

高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第4冊

## 奥の坊遺跡群IV (奥ノ坊古墳群・久米池遺跡)

2006年3月

高松市教育委員会



奥ノ坊古墳群調査地全景(西から)



奥ノ坊古墳群検出土墳墓群(北から)

## 例　　言

1. 本報告書は、高松市東部運動公園（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4冊で、高松市高松町に所在する奥ノ坊古墳群（おくのぼうこふんぐん）と高松市新田町に所在する久米池遺跡（くめいけいせき）の報告を収録した。

2. 発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。

奥ノ坊古墳群　　調　　査　地：高松市高松町奥ノ坊  
測量調査：平成13年6月5日～6月27日  
発掘調査：平成13年9月4日～11月28日  
整理作業：平成17年1月4日～8月31日

久米池遺跡　　調　　査　地：高松市新田町久米池  
発掘調査：平成15年1月8日～1月21日  
整理作業：平成17年8月1日～18年3月31日

3. 発掘調査から整理作業及び報告書編集まで高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員大嶋和則が担当した。

4. 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関ならびに方々からご教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順、敬称略）

香川県教育委員会、（財）香川県埋蔵文化財調査センター、古高松土地改良区、地元自治会、地元水利組合  
國木健司、佐藤竜馬、古野美穂子、松田重治

5. 発掘調査から整理作業、報告書執筆まで下記の方々の協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。  
(敬称略)

信吉純恵、大野宏和、川部浩司、増田ゆず（徳島文理大学大学院当時）  
林田真典、水田貴士（徳島文理大学当時）

6. 本調査に関連して、以下の業務の一部を業務委託発注により実施した。

航空写真測量……………国際航業（株）  
遺物写真撮影……………西大寺フォト

7. 挿図として、国土地理院発行1/25,000地形図「高松北部」「高松南部」「五剣山」「志度」を一部改変して使用した。

8. 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は国土座標第IV系（日本測地系）の北を示す。

9. 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

SA：柱穴列　SD：溝　SK：土坑　SP：柱穴　ST：土坑墓

10. 本書で使用した図版の縮尺は注記の無い場合は次のとおりである。

遺構：1/40　　土器：1/4　　石器・金属製品：1/2

11. 発掘調査で得られた資料は高松市教育委員会で保管している。（ただし、奥ノ坊古墳群から出土した人骨及び遺物の一部は近世～現代の墓に伴うものであり、墓地所有者が判明していることから、所有者に返却した。）

# 本文目次

## 巻頭図版

### 第1章 調査の経緯と経過

第1節 事業全体の経緯と経過	1
第2節 発掘調査の経緯と経過	2
第3節 整理作業の経過	5

### 第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6

### 第3章 奥ノ坊古墳群の調査成果

第1節 調査地の概要と測量調査	9
第2節 発掘調査の方法と基本層序	9
第3節 遺構	9
第4節 まとめ	38

### 第4章 久米池遺跡の調査成果

第1節 調査地の概要と調査の方法	50
第2節 遺構	51
第3節 まとめ	59

観察表	65
-----	----

写真図版	69
------	----

# 挿図目次

第1図 高松市東部運動公園(仮称)整備事業発掘調査地	2	第27図 表土掘削中出土遺物③	37
第2図 奥ノ坊古墳群調査地位置図	3	第28図 高松平野東部丘陵北半の後期古墳位置図	39
第3図 久米池遺跡調査地位置図	4	第29図 古高松地区後期古墳集成①	41
第4図 周辺遺跡分布図	8	第30図 古高松地区後期古墳集成②	42
第5図 奥ノ坊古墳群調査前平面図	11	第31図 古高松地区後期古墳集成③	43
第6図 奥ノ坊古墳群平面図	13	第32図 古高松地区後期古墳集成④	44
第7図 奥ノ坊古墳群遺構図	15	第33図 古高松地区後期古墳集成⑤	45
第8図 調査地南北方向土層図	17	第34図 古高松地区後期古墳集成⑥	46
第9図 調査地東西方向土層図①	18	第35図 古高松地区後期古墳集成⑦	47
第10図 調査地東西方向土層図②	19	第36図 古高松地区後期古墳集成⑧	48
第11図 奥ノ坊 2号墳平面図	20	第37図 トレンチ配置図	49
第12図 奥ノ坊 2号墳断面図	21	第38図 第1 トレンチ平面図	50
第13図 奥ノ坊 3号墳平面図	22	第39図 第3 トレンチ平面図	51
第14図 奥ノ坊 3号墳断面図	23	第40図 第6 トレンチ平面図	52
第15図 奥ノ坊 4号墳平面図及び周溝断面図	24	第41図 第6 トレンチ土層断面柱状図	53
第16図 土壙墓群平面図	25	第42図 S A 1, S D 2, 噴砂平・断面図	53
第17図 土壙墓平・断面図	26	第43図 S P 5断面図	54
第18図 S T 5平・断面図	27	第44図 S D 3断面図	54
第19図 土坑平・断面図①	28	第45図 S D 4断面図	54
第20図 土坑平・断面図②	30	第46図 調査地周辺出土遺物実測図	54
第21図 土坑平・断面図③	31	第47図 平成8年度工事範囲及び検出遺構模式図	56
第22図 土坑及びピット平・断面図	32	第48図 平成8年度表採遺物実測図	57
第23図 遺構出土遺物実測図	34	第49図 平成7年度以前久米池内表採遺物実測図	58
第24図 表土掘削中出土錢実測図	34	第50図 久米池・久米寺関係箇所位置図	60
第25図 表土掘削中出土遺物実測図①	35	第51図 川南・西遺跡検出屋敷地平面図	61
第26図 表土掘削中出土遺物実測図②	36		

# 挿表目次

表1 東部運動公園(仮称)整備に伴う発掘調査経過	1	表3 久米池遺跡整理作業工程表	5
表2 奥ノ坊古墳群整理作業工程表	5	表4 高松平野東部丘陵北半の後期古墳一覧表	40

# 写真図版目次

写真 1	調査前遠景(北から).....	70
写真 2	調査前状況(北から).....	70
写真 3	2号墳調査前(北から).....	70
写真 4	3号墳調査前状況(東から).....	70
写真 5	測量風景(西から).....	70
写真 6	調査風景(東から).....	70
写真 7	2号墳断面(東から).....	70
写真 8	2号墳周溝完掘状況(北から).....	70
写真 9	3号墳表土掘削状況(西から).....	71
写真10	3号墳断面(東から).....	71
写真11	3号墳断面(北から).....	71
写真12	3号墳完掘状況(北から).....	71
写真13	4号墳完掘状況(北から).....	71
写真14	土壙墓群検出状況(北から).....	71
写真15	土壙墓群断面(北から).....	71
写真16	調査地全景(北から).....	71
写真17	土壙墓群完掘状況(北から).....	72
写真18	土壙墓群完掘状況(南から).....	72
写真19	S D7遺物出土状況(北から).....	72
写真20	S K 3遺物出土状況(北から).....	72
写真21	奥ノ坊古墳群出土遺物①.....	73
写真22	奥ノ坊古墳群出土遺物②.....	74
写真23	奥ノ坊古墳群出土遺物③.....	75
写真24	調査地全景(南から).....	76
写真25	第1トレンチ掘削状況(西から).....	76
写真26	第2トレンチ掘削状況(東から).....	76
写真27	第3トレンチ掘削状況(北から).....	76
写真28	第6トレンチ土層断面(北から).....	76
写真29	S D 3検出状況(東から).....	76
写真30	S P 5検出状況(東から).....	76
写真31	S A 1検出状況(西から).....	76
写真32	S A 1半裁状況(東から).....	77
写真33	S A 1完掘状況(東から).....	77
写真34	噴砂検出状況(南から).....	77
写真35	旧河道検出状況(南から).....	77
写真36	久米池遺跡出土遺物①.....	78
写真37	久米池遺跡出土遺物②.....	79

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 事業全体の経緯と経過

高松市では全市的なレベルでまとまった総合的なスポーツレクリエーション活動拠点として高松市東部運動公園（仮称）の整備が計画され、その基本構想・基本計画が平成5年度に策定された。運動公園整備予定地となつたのは高松市の東端の丘陵地帯で、高松町の奥ノ坊・大空・金川渕地区で、総事業面積は47.2haに及ぶ広大なものであった。整備予定地には香川県の弥生後期を代表する大空遺跡をはじめ、奥ノ坊古墳及びスペリ古墳の存在が知られており、この他にも未周知の埋蔵文化財が所在する可能性は高いと考えられた。このため工事に先立ち整備予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて都市開発部公園緑地課と協議を行い、事前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵状況を明らかにすることで合意した。

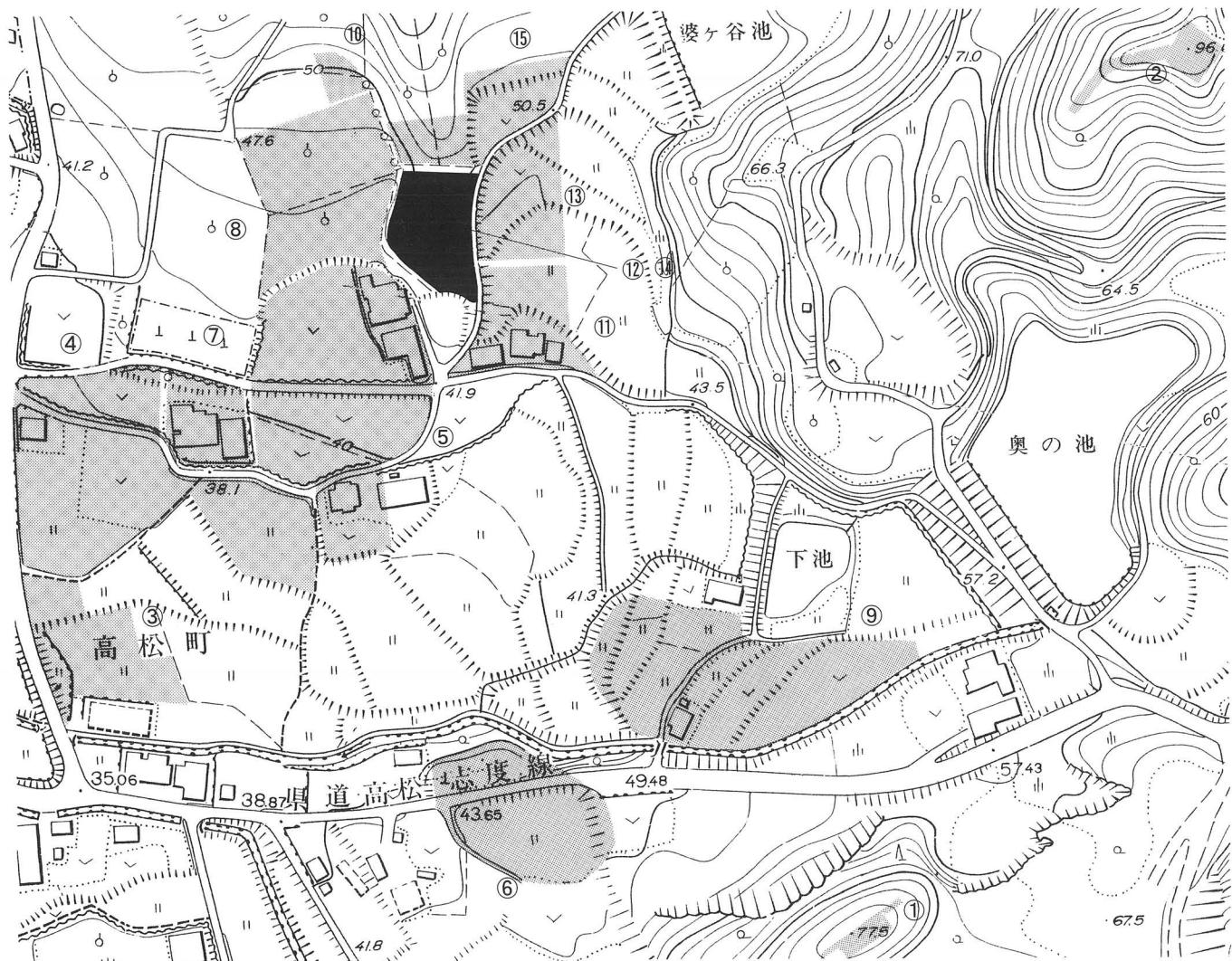
高松市教育委員会では、平成7年度から用地買収の完了した土地について試掘調査を実施した。平成7年度には大空古墳、金川渕古墳、奥ノ坊2号墳（その後の本調査で3・4号墳も発見）を発見した。これを受け、再度都市開発部公園緑地課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、工事の前に記録保存を行うことで合意した。試掘調査はその後も継続して行い、平成9年度までに整備予定地内に203箇所のトレンチを掘削した。この調査により、周知の埋蔵文化財包蔵地であった大空遺跡、奥ノ坊古墳、スペリ古墳の3遺跡については、既にほとんど消滅しており事前の保護措置の必要がないことが判明した。一方、新たに奥の坊現前遺跡、奥の坊遺跡、奥の坊奥池西遺跡、大空北遺跡の4集落遺跡が発見された。新たに発見された遺跡の総面積は約30,000m<sup>2</sup>である。これらの遺跡についても順次都市開発部公園緑地課と協議を行い、工事前に記録保存を行うことで合意した。

一方、運動公園整備工事は平成9年度から洪水調整池の工事を行い、平成12年度後半から全体の造成工事を行うことが予定されていた。このため洪水調整池部分の発掘調査を早期に着手し、平成12年度前半までに全調査を終えることとした。調査対象地は遺跡総面積30,000m<sup>2</sup>のうち現道及び現水路を除く約26,910m<sup>2</sup>とした。その後、工事計画が変更になり、平成14年度後半から全体造成工事が開始されることになり、発掘調査についても平成14年度前半まで期間を延長することとなった。このため、当初は掘削深度が深く、調査面積も広大で、調査期間も短いことから、掘削業務を委託発注して調査を実施していたが、平成11年度より比較的掘削深度の浅い部分については直営で調査を行った。

また、平成15年1月には運動公園整備工事に使用する粘土を新田町久米池から採取することとなり、同地に所在する久米池遺跡について工事に合わせて調査を実施した。

表1 東部運動公園（仮称）整備に伴う発掘調査経過

番号	遺跡名	調査区	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査方法	報告書
	試掘調査	全域	1995.8.4～1997.10.8	2,997	直営	I (1999.3刊)
①	大空古墳	全域	1996.2.14～1996.2.23	150	直営	
②	金川渕古墳	全域	1996.2.23～1996.3.8	300	直営	
③	奥の坊現前遺跡	I～III	1997.2.10～1997.3.24	1,560	委託	II (2004.3刊)
④	奥の坊現前遺跡	IV～VI	1997.10.7～1998.3.13	5,200	委託	
⑤	奥の坊遺跡	I～IV	1998.9.14～1999.2.19	4,900	委託	未刊
⑥	大空北遺跡	全域	1999.4.16～1999.6.4	2,200	直営	III (2004.12刊)
⑦	奥の坊遺跡	V	1999.5.28～1999.7.13	700	直営	未刊
⑧	奥の坊遺跡	VI・VII	1999.11.10～2000.3.3	2,300	委託	未刊
⑨	奥の坊奥池西遺跡	全域	2000.4.17～2000.7.25	3,600	直営	III (2004.12刊)
⑩	奥の坊遺跡	VIII	2000.10.2～2000.12.28	300	直営	未刊
⑪	奥の坊遺跡	IX	2000.10.5～2001.1.12	1,180	委託	未刊
⑫	奥ノ坊古墳群（測量）	全域	2001.6.5～2001.6.27	—	直営	IV (本報告書)
⑬	奥の坊遺跡	X	2001.8.27～2002.1.18	1,320	委託	未刊
⑭	奥ノ坊古墳群	全域	2001.9.4～2001.11.28	1,020	直営	IV (本報告書)
⑮	奥の坊遺跡	X I	2002.4.2～2002.7.5	1,180	直営	未刊
	久米池遺跡	全域	2003.1.8～2003.1.21	200	立会	IV (本報告書)



第1図 高松市東部運動公園（仮称）整備事業発掘調査地（S=1/2,500）

## 第2節 発掘調査の経緯と経過

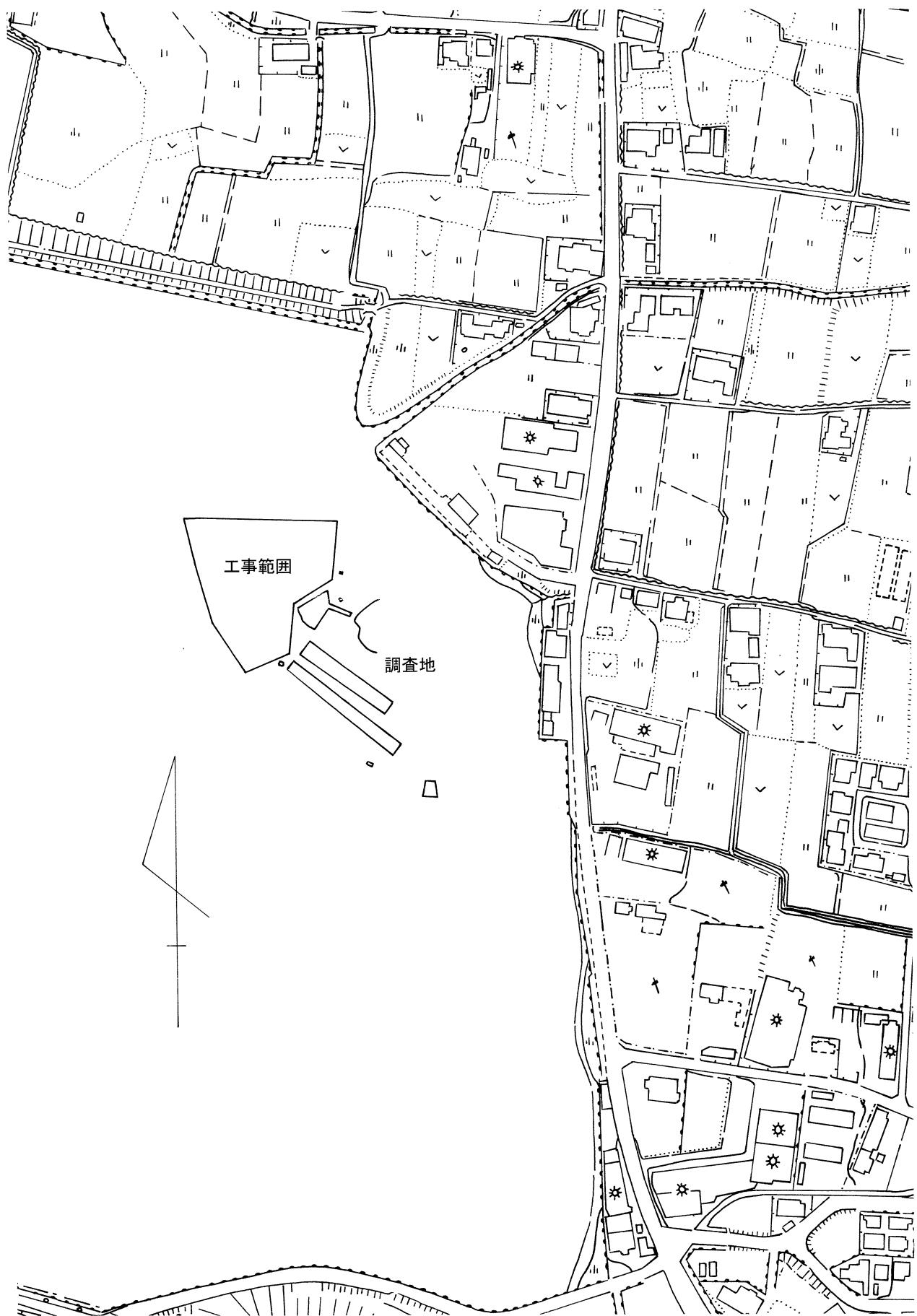
奥ノ坊古墳群は事業地北側の丘陵から舌状に派生する尾根の先端部に位置する。堀切によって独立した地形となっており、その形状から前方後円墳が想定された。このため、試掘調査を早期に実施したい地域として事業主体である公園緑地課と協議を進めていた。しかしながら、当該地は墓地であり、移転先の交渉等の遅れから用地買収も遅れる見込みであった。このため、平成7年8月に土地所有者の承諾を得て試掘調査を実施した。当初は前方後円墳を想定しており、また上部平坦面が墓地となっていたことから、墳裾の確認を行うトレンチ調査を実施した。前方後円墳は確認されなかったが、後円部裾を想定していた箇所で周溝と考えられる溝を検出し、その中心部に墓坑あるいは盗掘坑と考えられる窪みが現地形から読み取れ、円墳が所在することが判明した。なお、昭和40年の開墾時に消滅してしまったが、当該地の西側にかつて所在した尾根上においても奥ノ坊古墳と呼ばれる円墳があったことが知られており、周辺部にまだ古墳が所在する可能性が考えられた。その後、冬季に再度現地踏査を行ったところ、尾根の数箇所に窪みが見られることが判明し、また平成13年6月5日から6月27日に現地の測量を実施したところ、さらに数基の古墳が存在する可能性が考えられた。このため、堀切で区切られた前方後円墳状の尾根全域の1,020m<sup>2</sup>を発掘調査対象地とした。なお、遺跡名は奥ノ坊古墳群とし、昭和40年に消滅した古墳を1号墳と改称し、試掘調査で確認した古墳を2号墳とし、発掘調査で確認された順に古墳名をつけることとした。発掘調査は墓地移転後の平成13年9月4日から実施した。表土を掘削したところ、さらに2基の古墳が所在することが判明し、3・4号墳とした。この他、土坑・溝等を検出し、11月28日に全調査を終了した。

久米池遺跡は当事業地から南へ約3kmの新田町久米池に所在する。浚渫工事の際に遺構・遺物が確認された。

いるが、これまで発掘調査は行われておらず、その範囲や性格は不明の遺跡であった。平成 15 年1月、当事業の修景池整備に際し、久米池から 5,000m<sup>3</sup>の粘土を採取することとなった。遺跡は池底に位置し、ヘドロの厚い堆積が認められ重機や人の進入が困難なことから、事前の試掘調査の実施は不可能と判断した。事業主体である公園緑地課と協議の結果、工事実施時に数箇所トレンチ調査を実施し、遺跡の無い範囲で工事を行うことで合意した。発掘調査は 1 月 8 日から 1 月 21 日までの実働 6 日間で実施した。



第2図 奥ノ坊古墳群調査地位置図 (S=1/2,500)



第3図 久米池遺跡調査地位置図 (S=1/2,500)

### 第3節 整理作業の経過

東部運動公園整（仮称）備事業に伴う発掘調査は平成14年度まで行われた。このため、各調査年度の翌年度に土器洗浄や接合等の基礎整理を行うのみで、本格的な整理作業は全調査終了後の平成14年度後半から実施した。

奥ノ坊古墳群の整理作業は、平成14年度において基礎整理を実施し、本格的な整理作業は平成17年1月から8月において実施した。久米池遺跡の整理作業は、平成15年度において基礎整理を実施し、本格的な整理作業は平成17年8月から平成18年3月において実施した。以下に工程表を掲載する。

表2 奥ノ坊古墳群整理作業工程表

	平成14年度	平成16年度			平成17年度				
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
基礎整理									
実測									
トレース									
レイアウト									
報告書作成									

表3 久米池遺跡整理作業工程表

	平成15年度	平成17年度							
		8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
基礎整理									
実測									
トレース									
レイアウト									
報告書作成									

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央、瀬戸内海に面している。高松市域の大部分は高松平野によって占められている。東を立石山、雲附山等に、南を日山、上佐山、西を五色台山塊に遮られ、北に瀬戸内海を望み位置しており、南北約20km、東西約16kmを測る。平野の境界を画する低位山塊及び屋島、紫雲山等の独立山塊は、侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われていたことによって侵食解析から取り残されて形成されたメサまたはビュートと呼ばれるもので、讃岐のどかな田園風景の象徴の一つである。

高松平野は四国中央部に東西に連なる讃岐山脈に端を発する中小河川により形成された沖積地である。高松平野には、西から本津川、香東川、春日川、新川といった河川が瀬戸内海に向けて北流している。本調査区の位置する古高松（高松町・新田町・春日町）は、この中の春日川、新川にほど近い地域である。春日・新川の両河川は水量に乏しく、平野中央部を流れる香東川のように大規模な扇状地は見られない。また、古高松の北部は、江戸時代初期の干拓により陸地化されたものであり、寛永10（1633）年の『讃岐国絵図』によると、その頃の海岸線はかなり内陸に入り込んでおり、屋島は島として描かれている。北を屋島に面した海岸（旧地形による）、東を立石山山塊、南を久米山丘陵、西を春日川によって限られた高松平野北東部の一角は、古代・中世を通じて「高松」（讃岐国山田郡高松郷）と呼ばれたが、天正16（1588）年の生駒親正による高松城築造以後は、城下高松に対して「古高松」と呼称されてきた。江戸時代以前の古高松の地形が推定可能な史料として香西成資が古者の話を元に享保4（1719）年に編纂した『南海通記』がある。その中に天正10（1582）年頃の地形として「…春日ノ里ニ至ル、此所ハ屋島山、石清尾山両受ノ間、入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル、遠干潟ナ春日里ト木太郷ノ間、海ノ中道アツテ通用ス。…」との記述がある。ここでいう小山とは、現在の高松市新田町小山にあたると考えられ、この小山近辺まで海岸線あるいは河口が湾状に入り込んでいたと想定できる。

今回、東部運動公園（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として発掘調査が行われた「奥ノ坊」は高松町の北東端にあたり、地形的には高松市と牟礼町にまたがる標高100～200mの山塊の、西側低丘陵地の尾根及び谷部に位置する地域である。現在はかなり内陸的な様相を示すが、上記の推定海岸線から考えると海岸から1～1.5kmと非常に近かったと推測される。

### 第2節 歴史的環境

高松平野では、昭和60年代以降、高松東道路建設、太田第2土地区画整理事業、空港地再開発などの大規模プロジェクトに伴い発掘調査件数が増大したことによって遺跡数は飛躍的に増大し、高松平野の形成過程や集落の様相が次第に明らかになってきている。今回の発掘調査事業地は高松平野の東部にあたり、平野北西部に位置する石清尾山塊と共に遺跡の多い地帯として早くから認識してきた地域である。

当事業地周辺の遺跡の大部分は弥生時代から古墳時代にかけてのものであるが、旧石器・縄文時代の遺物・遺構も若干知られている。旧石器時代については、本格的な遺構は知られていないが、久米池南遺跡（東山崎町）においてナイフ型石器が出土している。縄文時代については、小山・南谷遺跡において落とし穴状の土坑が14基検出されているほか、旧河道中から縄文土器が出土している。当事業地においても奥の坊奥池西遺跡において落とし穴と考えられる遺構が検出されており、小山・南谷遺跡との関連が注目される。一方、平野中央部の発掘調査においては旧河道からの晩期の土器の出土例は多いが、井手東I遺跡において地表面下約70cmからアカホヤの堆積層が確認されていることが特筆される。

弥生時代前期の遺跡としては、平野中央部では二重の環濠が検出された汲汲遺跡等が知られているが、平野東部では現在のところ発見されていない。中期前半では当事業で確認された奥の坊遺跡が知られている。南向きの緩斜面に営まれた集落で、多量の土器・石器に伴い分銅形土製品や擬朝鮮系無文土器等も出土している。また、丘陵部を東に越えた羽間遺跡では細形銅剣が出土している。中期後半では久米山東側丘陵上に立地する高地性集落の久米池南遺跡がある。後期前半では既に消滅してしまったが、香川県の弥生時代後期前半の標識土器が出土したことで知られる大空遺跡が当事業地内に所在した。また、当事業地内の奥の坊現前遺跡をはじめ、スベリ山南遺跡、南谷遺跡、小山・南谷遺跡がある。いずれの遺跡においても製塩土器が多量に出土することが知られ

ている。後期後半では漆を採取していたと考えられる原中村遺跡があげられる。

古墳時代の集落遺跡は周辺では見られず、平野中央部においてあまり知られていない。一方、古墳は多く築造されている。高松平野では積石塚として有名な石清尾山古墳群があるが、平野東部では盛土古墳しか見られない。平野東部では諏訪神社古墳が古式の古墳であることが知られている。また、前期の高松市茶臼山古墳は全長60mの前方後円墳で、後円部には竪穴式石室が2箇所設けられており、第1主体からは鉢形石2点、画文帶神獸鏡1点などが出でている。中期では屋島の北端に所在する長崎鼻古墳において、阿蘇溶結凝灰岩製の石棺が出でている。後期では副室構造の小山古墳、T字型の石室を持つ瀧本神社古墳等特異な古墳が多い。中でも香川県で唯一石棚を持ち、畿内型の亀甲型陶棺を埋葬主体とし、承盤付銅鏡を副葬する久本古墳の存在は特筆できる。この他、小規模な岡山小古墳群、平尾古墳群といった群集墳も見られる。当事業地においても、今回報告する奥ノ坊古墳群のほか、これまでに大空古墳、金川渕古墳の調査が実施されている。

古代の遺跡では、『日本書紀』にも記載されている古代山城屋嶋城の存在が知られている。近年の調査で城門遺構や石垣が検出されている。また新田本村遺跡と小山・南谷遺跡では高松平野の条里地割に先行し、方向の異なる条里地割が発見されている。この先行条里地割が当事業地内の奥の坊現前遺跡においても確認されている。古代寺院としては山下廃寺がある。古式の瓦を出土していることが知られているが、発掘調査は行われていないので詳細は不明である。また屋島北嶺の千間堂において10～11世紀と考えられる礎石建物及び集積遺構が検出されており、屋島寺の前身遺構と考えられている。

中世に入ると高松平野でも武士の台頭が目立つ。特に中央政権との関わりも多く、数多くの戦いが行われている。まず、源氏と平氏が屋島で戦い、那須与一や佐藤継信の戦いぶりが『平家物語』によって今日まで伝えられている。南北朝期には讃岐の守護となった高松（舟木）頼重が喜岡城を築城するが、北朝方の細川定禅の攻撃により落城した。その後喜岡城は秀吉の四国征伐時にも落城している。中世の遺構としては、中世末～近世初頭にかけての溝で区画された屋敷が検出された川南・西遺跡があげられる。当事業地内では中世の遺物は出土するものの、遺構としては奥の坊奥池西遺跡において溝が検出された程度である。

近世の遺跡としては、近年高松城周辺で数多くの調査が実施されており、武家屋敷等が検出されている。平野東部では、東山崎・水田遺跡や川南・東遺跡等の農村が見られる。当事業地内では奥の坊遺跡において一部近世の屋敷地を検出しているにすぎない。

## 参考文献

- 大嶋和則 1999 『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 奥の坊遺跡群I』高松市教育委員会  
大嶋和則 2000 『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 川南・東遺跡』高松市教育委員会  
大嶋和則 2004 『高松市指定史跡 久本古墳』高松市教育委員会  
大嶋和則 2004 『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 奥の坊遺跡群II』高松市教育委員会  
大嶋和則 2004 『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 奥の坊遺跡群III』高松市教育委員会  
片桐孝浩 1994 『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 小山・南谷遺跡平成5年度』香川県教育委員会  
片桐孝浩 1997 『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡I』香川県教育委員会  
木下晴一 2000 『県道高松志度線緊急整備工事および県立医療短期大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 原中村遺跡』香川県教育委員会  
藏本晋司・森下友子 1992 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 東山崎・水田遺跡』香川県教育委員会  
小竹一郎ほか 1977 『古高松郷土誌』古高松郷土誌編集委員会  
中西克也 1997 『新田本村遺跡』香川県文化財調査年報 平成8年度』香川県教育委員会  
中西克也 1999 『新田本村遺跡』香川県文化財調査年報 平成9年度』香川県教育委員会  
藤井雄三・山本英之 1989 『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会  
山元敏裕 1995 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 井手東I遺跡』高松市教育委員会  
山元敏裕・末光甲正 1999 『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 川南・西遺跡』高松市教育委員会  
山元敏裕 2003 『史跡天然記念物屋島－史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書I－』高松市教育委員会



第4図 周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000)

- |            |          |              |             |              |
|------------|----------|--------------|-------------|--------------|
| 1 奥の坊權現前遺跡 | 2 奥の坊遺跡  | 3 大空北遺跡      | 4 奥の坊奥池西遺跡  | 5 奥ノ坊1号墳(消滅) |
| 6 奥ノ坊2~4号墳 | 7 金川渕古墳  | 8 大空古墳       | 9 スペリ古墳(消滅) | 10 大空遺跡(消滅)  |
| 11 大空南遺跡   | 12 屋嶋城跡  | 13 喜岡城(高松城)跡 | 14 羽間遺跡     | 15 長尾1号墳     |
| 16 長尾2号墳   | 17 長尾3号墳 | 18 南谷遺跡      | 19 小山・南谷遺跡  | 20 新田本村遺跡    |
| 21 小山古墳    | 22 山下古墳  | 23 山下廃寺      | 24 久本古墳     | 25 岡山古墳群     |
| 26 岡山小古墳群  | 27 漆谷古墳群 | 28 久米池遺跡     |             |              |

# 奥ノ坊古墳群



# 第3章 奥ノ坊古墳群の調査成果

## 第1節 調査地の概要と測量調査

奥ノ坊古墳群は、高松平野の東を画する立石山山塊から平野側へ舌状に延びる丘陵部の南緩斜面に所在する。今回の調査地は、丘陵部からさらに南へ派生する尾根の先端部に位置する。尾根頂部の標高は53.7mで、調査前は、雑木林で、尾根頂部は個人が所有する墓地となっていた。墓地の半数は、花崗岩の自然石を墓石としたもので、記年銘のある墓石の最古のものが天保年間のものであることから、概ね幕末から現代までの墓地と考えられる。また、西側斜面部において「ハラクワリ地蔵」（「ハラクワリ」とは香川の方言で「下腹痛」のこと）と呼ばれる花崗岩の自然石を墓石とした墓が単体で所在していた。

第1章で触れたとおり、今回の調査地にあたる尾根先端部が前方後円墳状の形態を呈していることから、前方後円墳が所在する可能性を考え、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、前方後円墳に関する遺構は検出されなかつたが、周溝を検出し、その内側に盗掘坑と考えられる窪みが認められ、古墳時代後期の円墳（2号墳）が所在することが明らかになった。このため、尾根全域の現況測量を行うことで、古墳の存在の有無確認に努めることとした。

測量調査は平成13年6月5日から6月27日に実施し、測量図を第5図に掲載した。この測量調査により、2号墳の東のA地点においても同様の窪みが認められたほか、B地点には窪みと石材の散布が認められ、古墳の可能性が考えられた。

## 第2節 発掘調査の方法と基本層序

調査に先立って、現地に所在する墓石の移転作業を実施した。墓石の中には江戸時代にさかのぼるものもあつたが、個人の所有であることから、撤去に際し立会のみを行つた。墓石下から人骨と共に近世陶磁器や寛永通寶を納めた木箱等が出土した。これら近世の墓地遺構に伴う事物の撤去を完全に行ってから発掘調査を実施した。なお、出土物に関しては、墓地に伴うものであることから、所有者に返却した。

調査地は前方後円墳状を呈し、前方後円墳の存在の可能性も考えられたことから、地形の主軸方向に1ヶ所、主軸に直交するように尾根の頂部にあたる2ヶ所に土層観察用のセクションを設定し、人力による掘削を行つた。また、2号墳及び古墳の想定されたA・B地点においても想定される墳丘主軸とそれに直交するセクションを設定し、掘削を行つた。発掘調査の結果、想定された前方後円墳は所在せず、また、B地点にも古墳は所在しなかつたが、2号墳の他、A地点において3号墳、尾根頂部において4号墳を検出した。

調査区の基本層序は4層に分層できる。第1層は灰黄褐色砂質土で、尾根頂部には、ほとんど堆積せず、斜面部にのみ見られる。第2層は暗灰黄色砂質土で、尾根鞍部にのみ堆積するものである。第3層は黄褐色砂質土で、全域に堆積している。第4層は黄灰色砂質土の地山である。遺構面は、この地山の直上の1面のみである。先述の2～4号墳までの円墳3基の他、土壙墓5基、土坑20基、ピット多数を検出した。これらの遺構は概ね近世のものと考えられるが、一部弥生時代にさかのぼると考えられるものもある。

## 第3節 遺構

### (1) 古墳

#### 1号墳（第4図5）

##### 墳丘

調査地の約80m西方にかつて所在した古墳である。今回の調査地と同様に北側の丘陵から派生する尾根上に位置していたが、昭和40年の開墾によって消滅した。所在地の現在の標高は45m前後であるが、現地は1～2m程度削平されていることから、46～47m程度の標高に所在したと考えられる。墳丘は円墳とされている（小竹1977）が、その規模については不明である。埋葬施設及び周溝の存在等についても不明である。

## 出土遺物

昭和 40 年の開墾時に須恵器平瓶が出土している（小竹 1977）。やや扁平で肩部が強く屈曲するもので、7 世紀中葉から後葉の古墳であった可能性が考えられる。

## 2号墳（第 11・12 図）

### 墳丘

調査地の南部で検出した古墳である。尾根の南端に位置し、墓壙床面の標高は約 49m で、調査区内では最も低位に立地する。墳丘は、盛土が流出しており不明であるが、弧状に巡る周溝の規模から、直径約 10m の円墳の可能性が考えられる。墳丘南半は花崗土の採土により、削平されている。

### 埋葬施設

主体部は消滅しており不明であるが、横穴式石室が所在したと考えられ、その墓壙を検出した。斜面部に掘削されているため、尾根上部側ほど幅広く掘削されており、上端では最大幅 3.2m、残存長 3m を測るが、床面では幅 2m、残存長 2m を測り、主軸方位は N-25°-E である。床面はほぼ平坦で、標高 48.95m を測る。横断面は逆台形を呈し、縦断面は奥側の地山を緩やかながらも L 字状に切り取っている。埋土は 3 層に分層でき、断面図第 3・4・8 層が該当する。第 3 層は明黄褐色砂質土、第 4 層は黒褐色砂質土で、いずれも遺物は出土していないが、流土と考えられる第 5 層の褐色砂質土層より掘り込まれていることから、盜掘坑埋土と考えられる。第 8 層は褐色の砂質土で、第 5 層の下部から掘り込まれていることから、墓壙の埋土と考えられる。

### 周溝

周溝は、幅 1.3m、深さ 40cm、検出長 11m を測る。埋土は 2 層に分層できる。上層は断面図の第 6 層に該当し、にぶい黄褐色砂質土、下層は第 7 層に該当し、褐色の砂質土である。古墳上部斜面を L 字状に切り取り、尾根と墳丘を区画している。

### 出土遺物

試掘調査時に周溝部分から出土した須恵器の甕の体部の小片 1 点のみで、詳細な時期は不明である。

## 3号墳（第 13・14・23 図）

### 墳丘

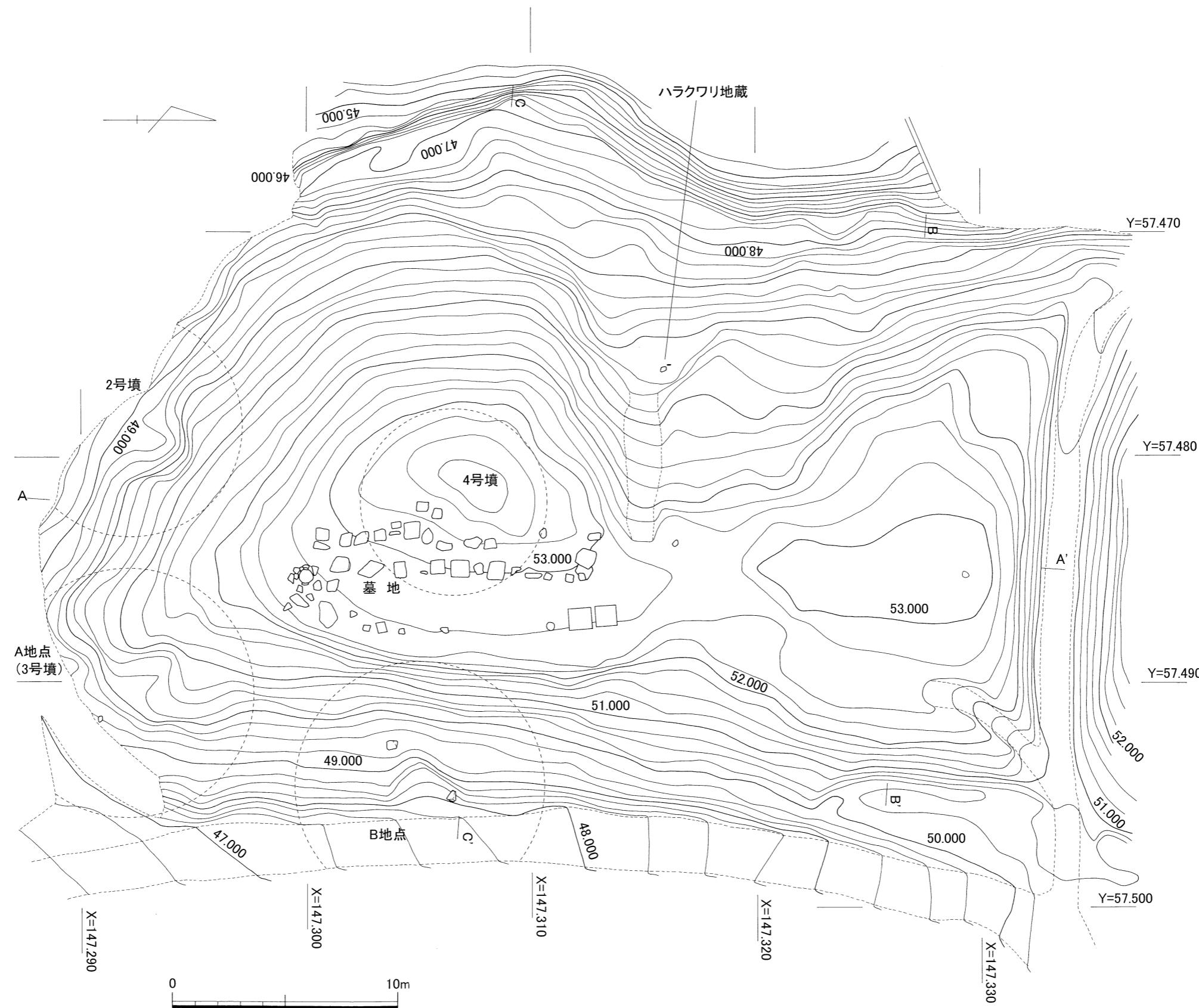
調査地の南東端で 2 号墳に隣接して検出した古墳である。尾根の南端に位置し、墓壙床面の標高は約 50m である。墳丘は、盛土が流出しており不明であるが、弧状に巡る周溝の規模から、直径約 11m の円墳の可能性が考えられる。墳丘南半は花崗土の採土により、削平されている。

### 埋葬施設

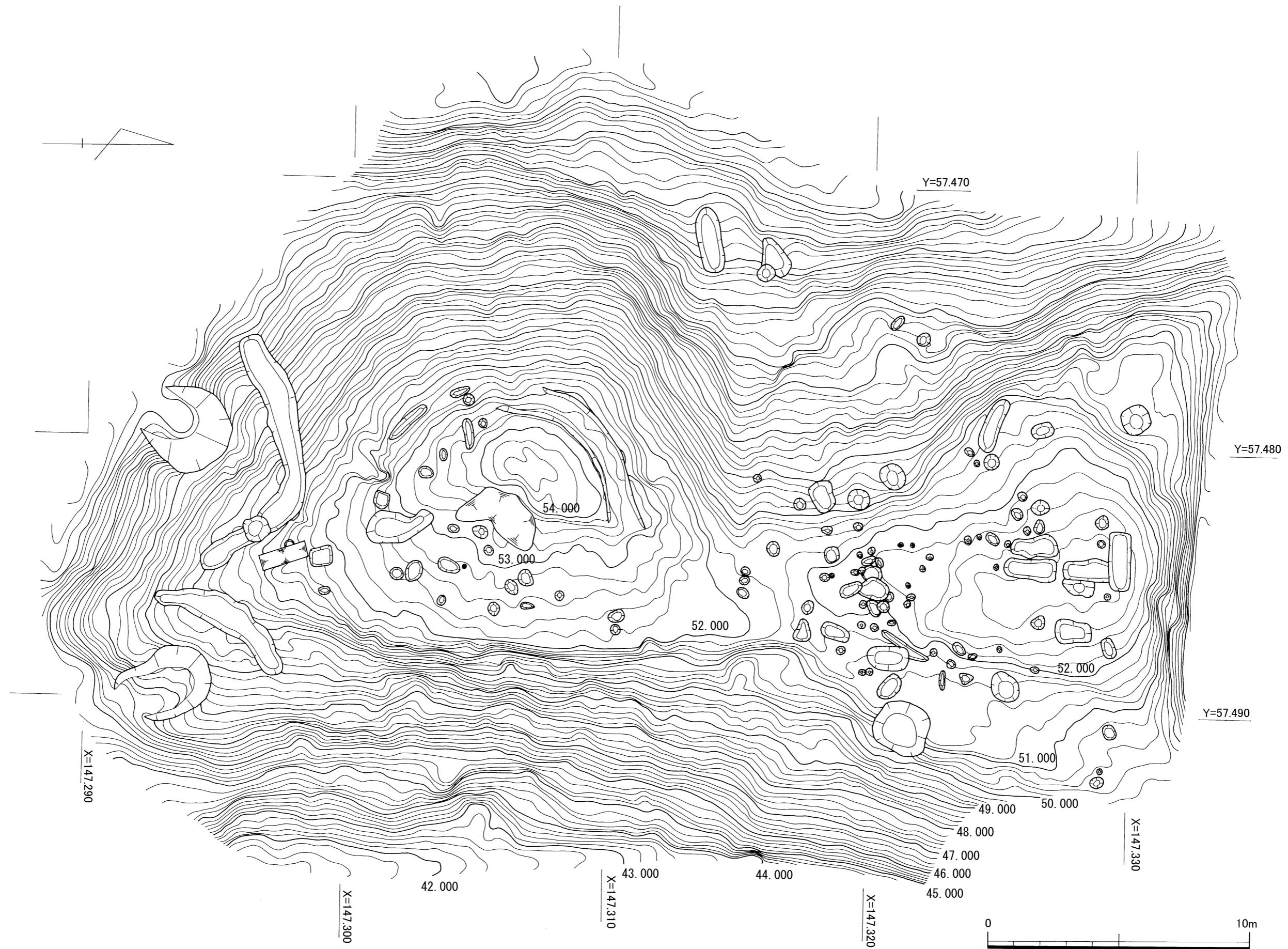
主体部は消滅しており不明であるが、横穴式石室が所在したと考えられ、その墓壙を検出した。斜面部に掘削されているため、尾根上部側ほど幅広く掘削されており、上端では最大幅 2.7m、残存長 3.6m を測るが、床面では幅 1.6m、残存長 2.8m を測り、主軸方位は N-20°-E である。床面は標高 50m 前後で、奥側が高くなっている。横断面は逆台形を呈し、縦断面は奥側の地山をシャープに L 字状に切り取っている。埋土は 4 層に分層でき、断面図第 4・5・7・8 層が該当する。第 4 層は黒褐色砂質土、第 5 層は暗褐色砂質土で、埋土中から棟瓦が出土していることから、江戸時代後半以降の盜掘坑埋土と考えられる。第 7 層は褐色の砂質土、第 8 層は黄褐色砂質土で、墓壙埋土と考えられる。なお、墓壙底面の南西隅にはやや窪みが認められ、石材の抜き取り痕の可能性が考えられる。

### 周溝

周溝は、墳丘の尾根上部側にのみわずかに残存していた。幅 1.3m、深さ 10cm、検出長 5.7m を測る。埋土は断面図第 6 層に該当し、橙色砂質土の単層である。削平が著しいため不明であるが、2 号墳同様、尾根上部側のみ区画していた可能性が考えられる。



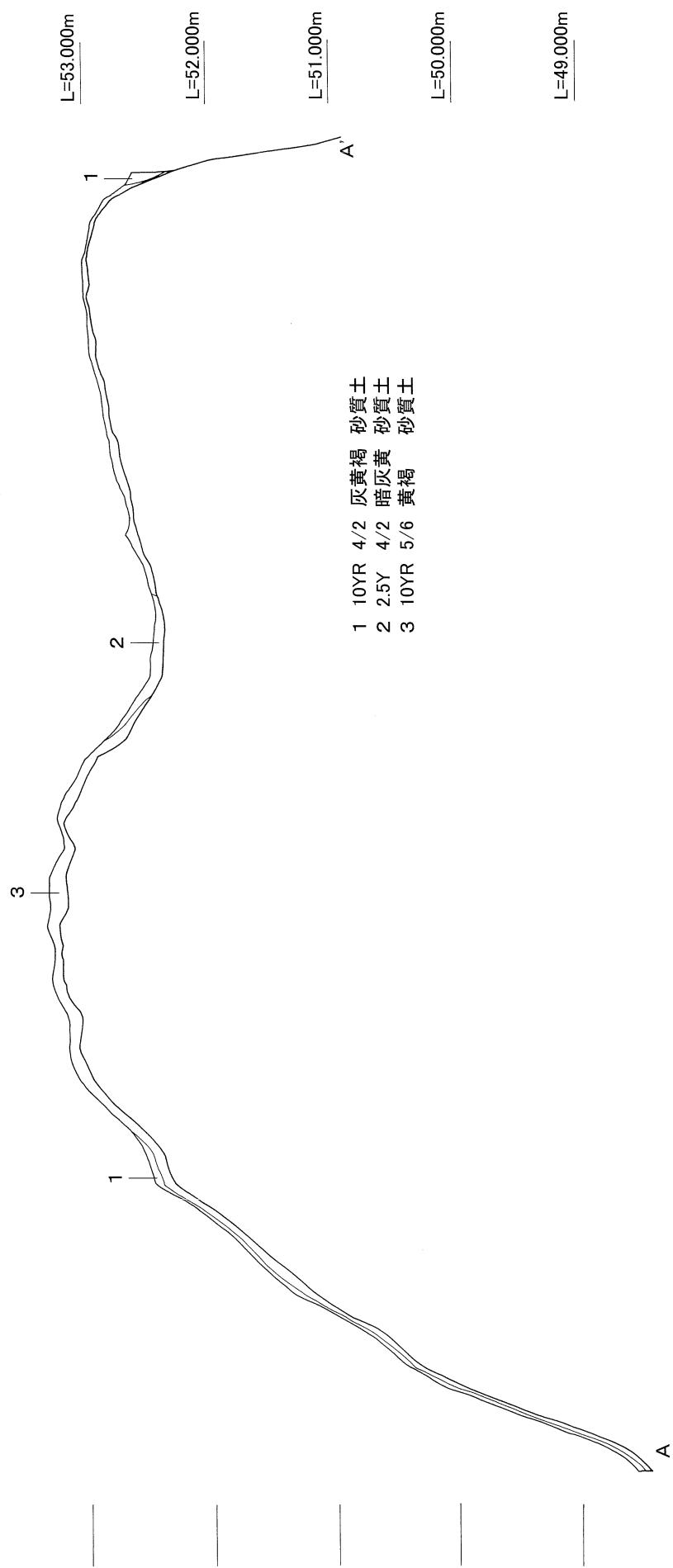
第5図 奥ノ坊古墳群調査前平面図 (S=1/200)



第6図 奥ノ坊古墳群平面図 (S=1/150)

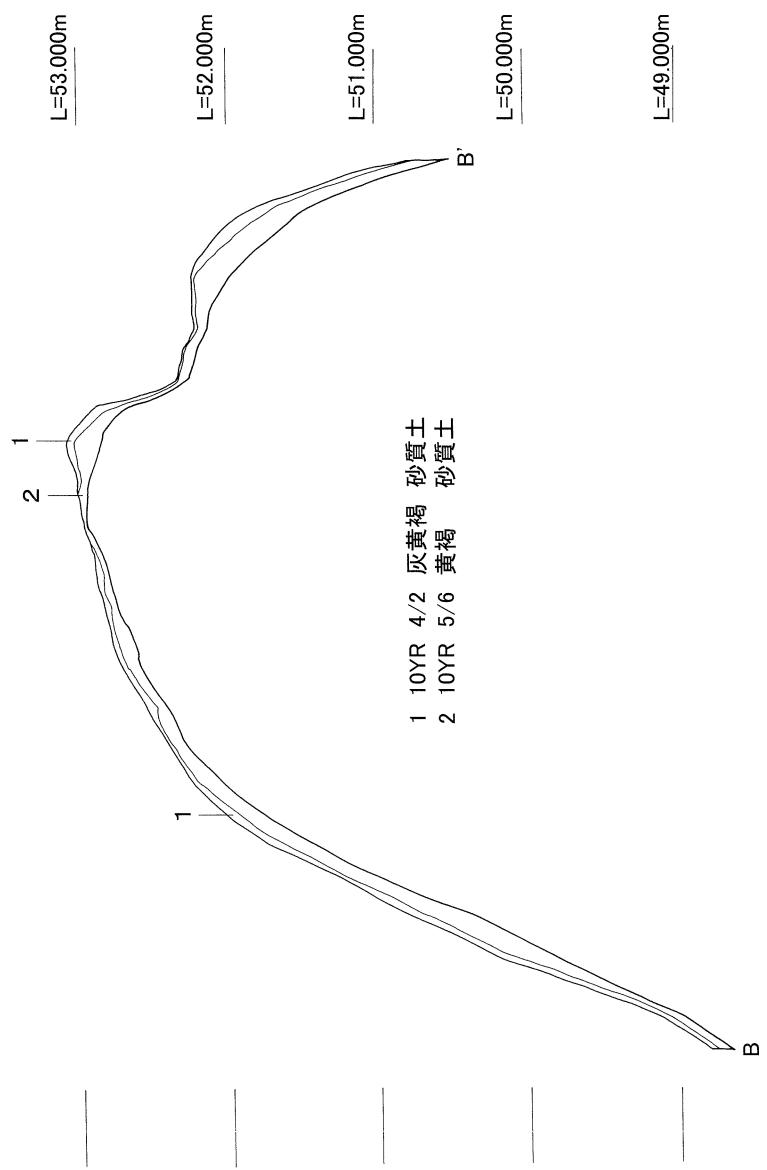


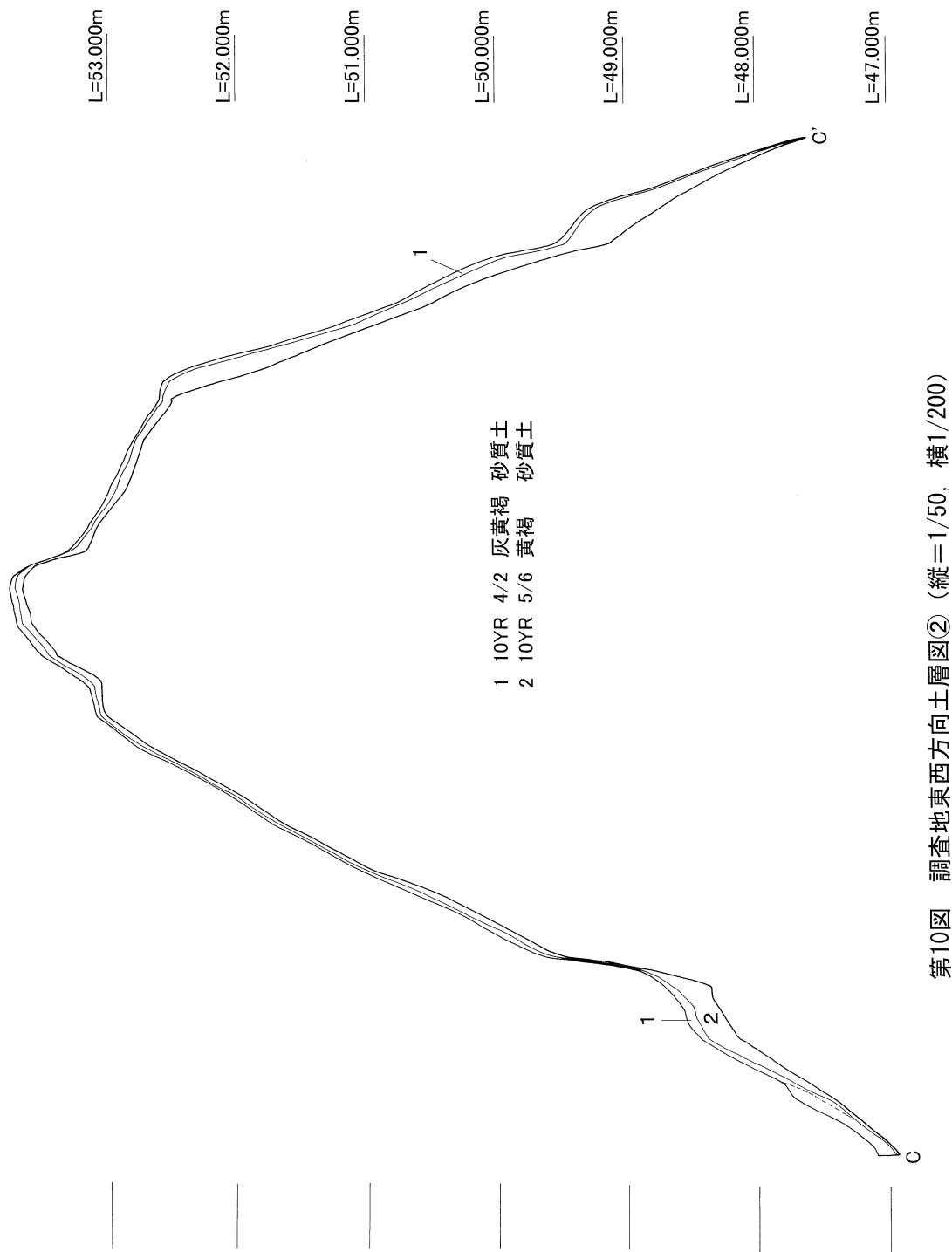
第7図 奥ノ坊古墳群遺構図 (S=1/150)



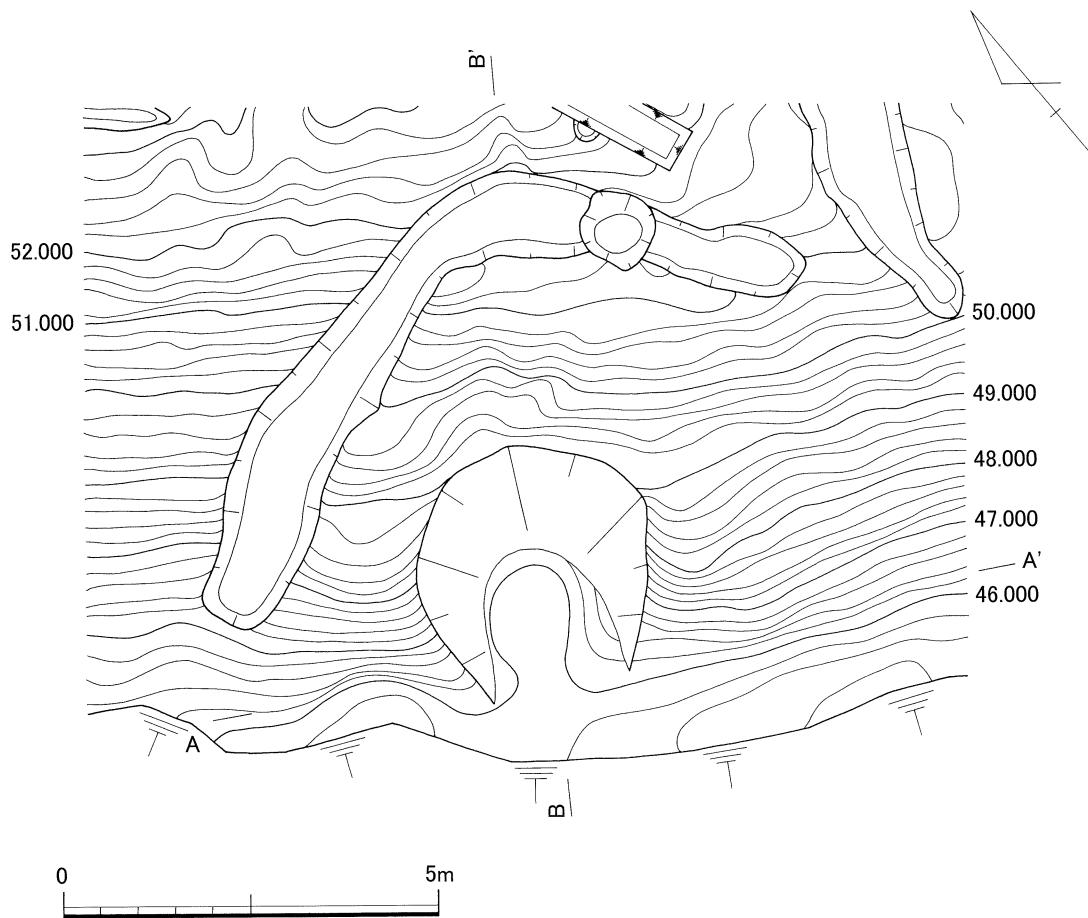
第8図 調査地南北方向土層図 (縦=1/50, 横1/200)

第9図 調査地東西方向土層図① (縦=1/50, 横1/200)





第10図 調査地東西方向土層図② (縦=1/50, 横1/200)



第11図 奥ノ坊2号墳平面図

### 出土遺物

周溝から第23図1の須恵器の蓋が1点出土した。小型化しており、かえりは口縁端部より下方まで伸びていることからTK217併行期と考えられる。

### 4号墳（第15図）

#### 墳丘

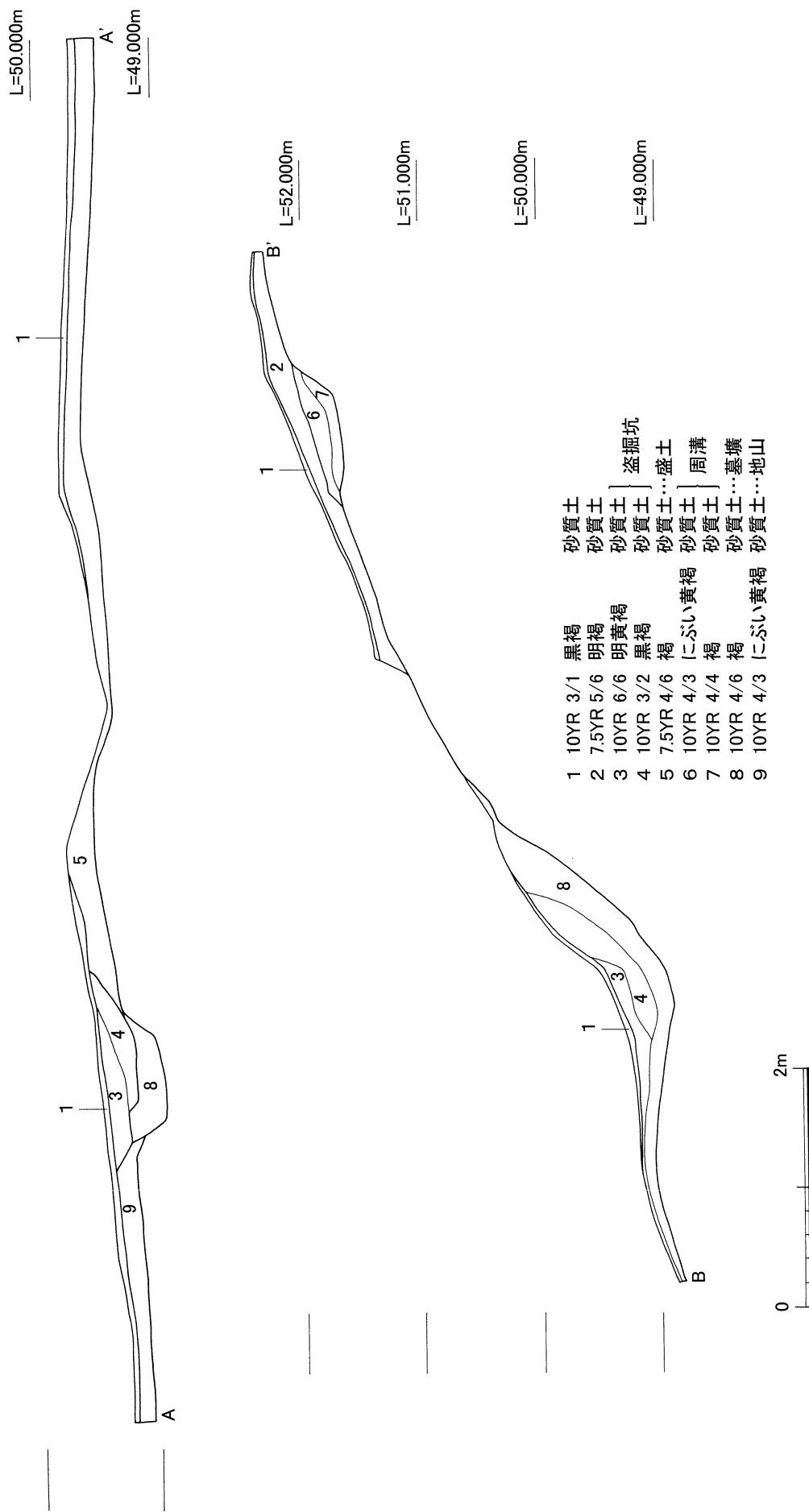
尾根の頂部で検出した古墳である。現存する墳丘部の標高は約53.5mである。墳丘は、盛土が流出しており不明であるが、弧状に巡る周溝の規模から、直径約8mの円墳の可能性が考えられる。墳丘東半は近世以降の墓地造成によると考えられる削平を受けている。

#### 埋葬施設

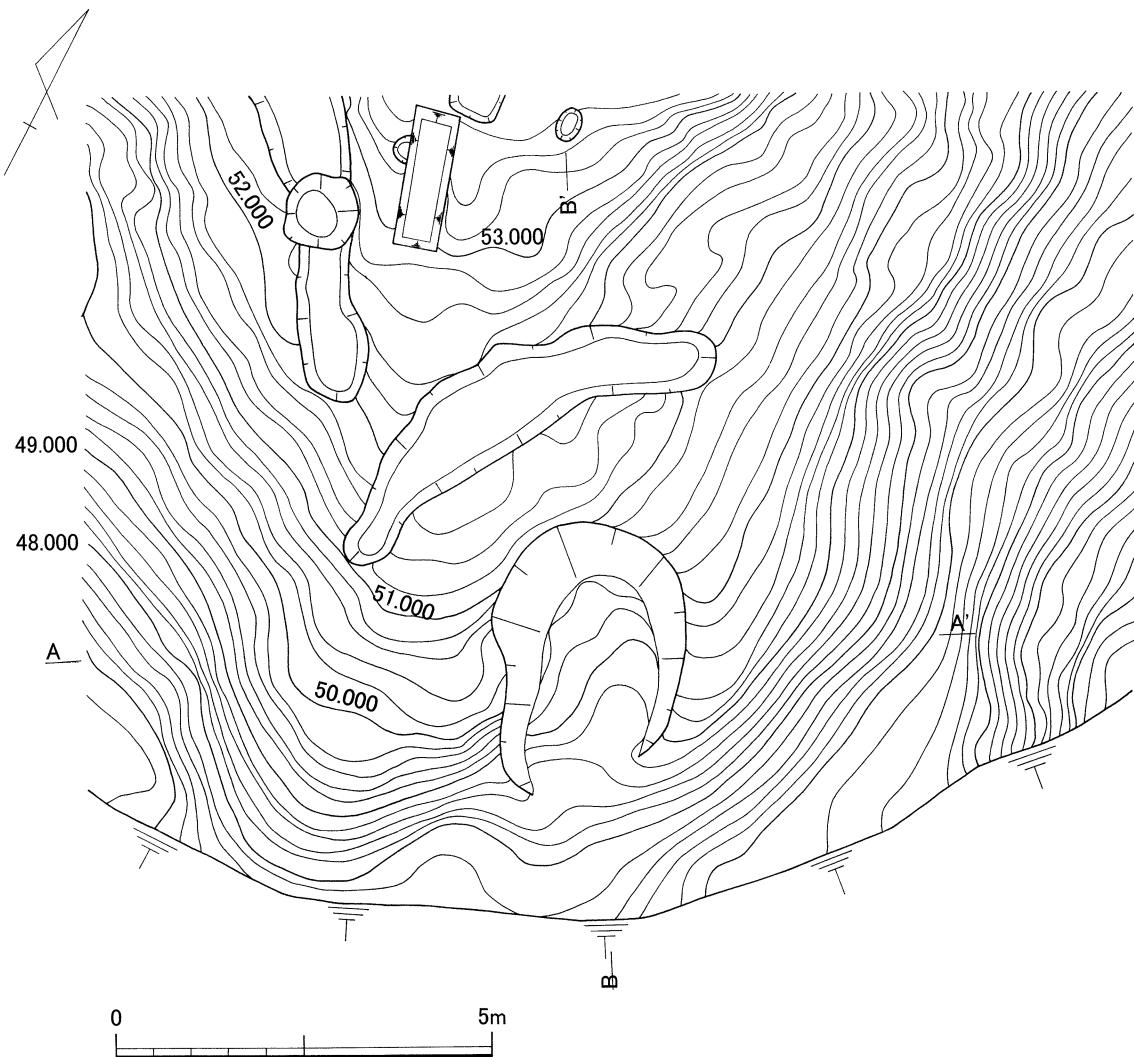
近世以降の墓地として削平されており、主体部は不明である。しかしながら、墓石として使用されている花崗岩の自然石は、横穴式石室の石材を転用した可能性が考えられる。

#### 周溝

周溝は、古墳の北西側に残存していた。幅1.6m、深さ15cm、検出長7.5mを測る。埋土は明黄褐色砂質土の単層である。なお、古墳の南西側でも幅40cm、深さ5cm、検出長1.9mの溝上の土坑SK5を検出しており、周溝の延長と考えられる。



第12図 奥ノ坊2号墳断面図



第13図 奥ノ坊3号墳平面図

#### 出土遺物

古墳に伴う遺物は出土しておらず、時期不明である。

#### (2) 土壙墓

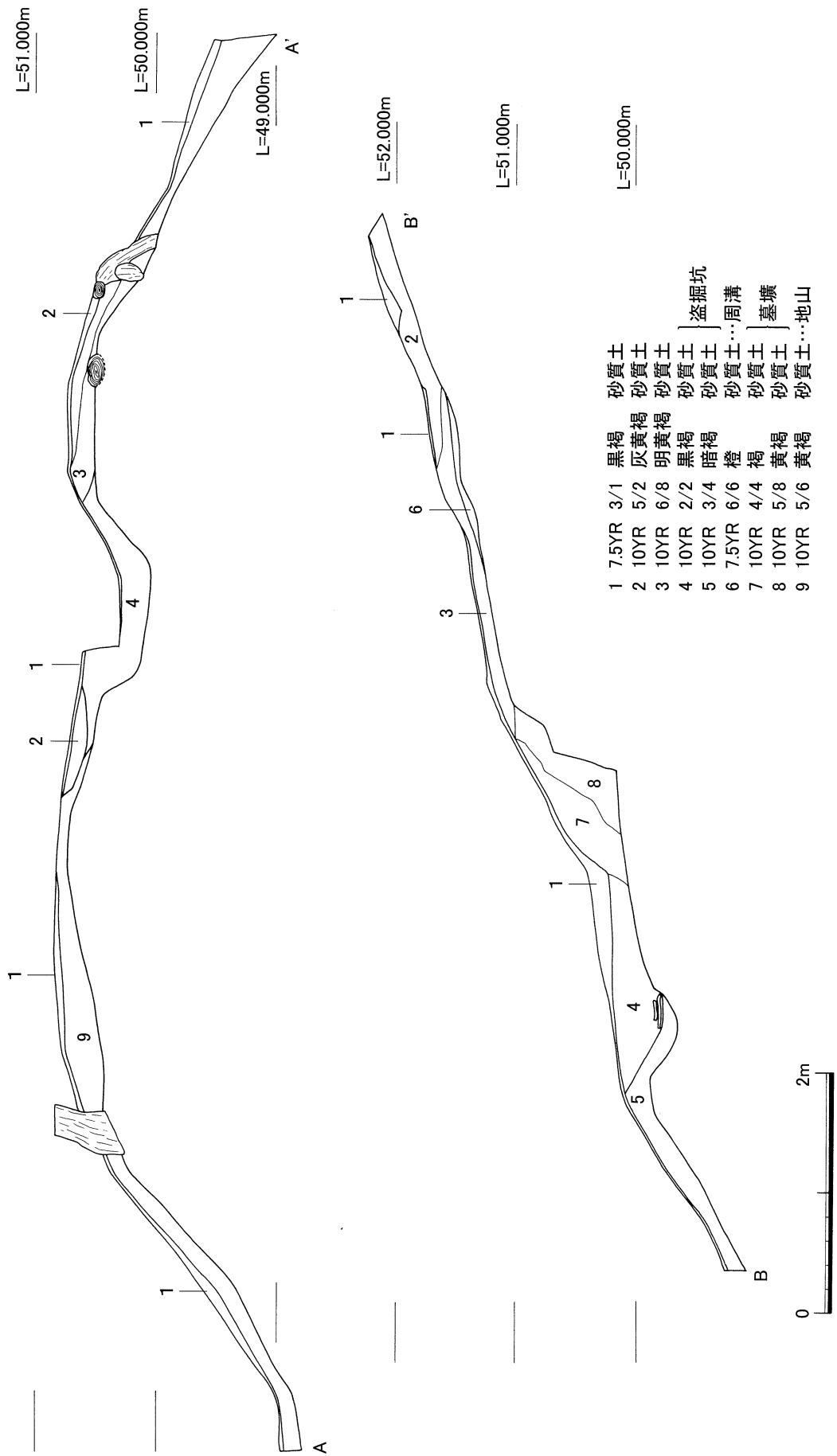
##### ST1 (第 16・17 図)

調査区の北部の尾根頂部で土壙群を検出した。他の土坑と比べ、尾根頂部に立地し、長方形を呈し、主軸方位や配置に規則性が見出せること等から土坑墓群と考える。

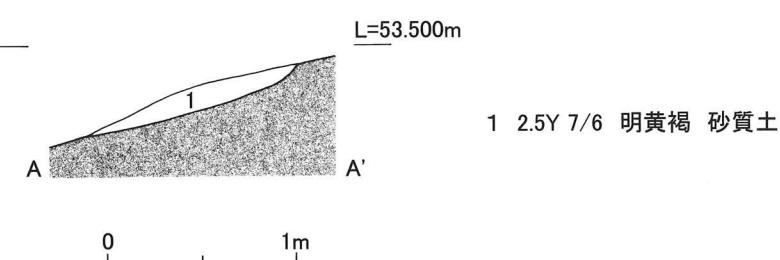
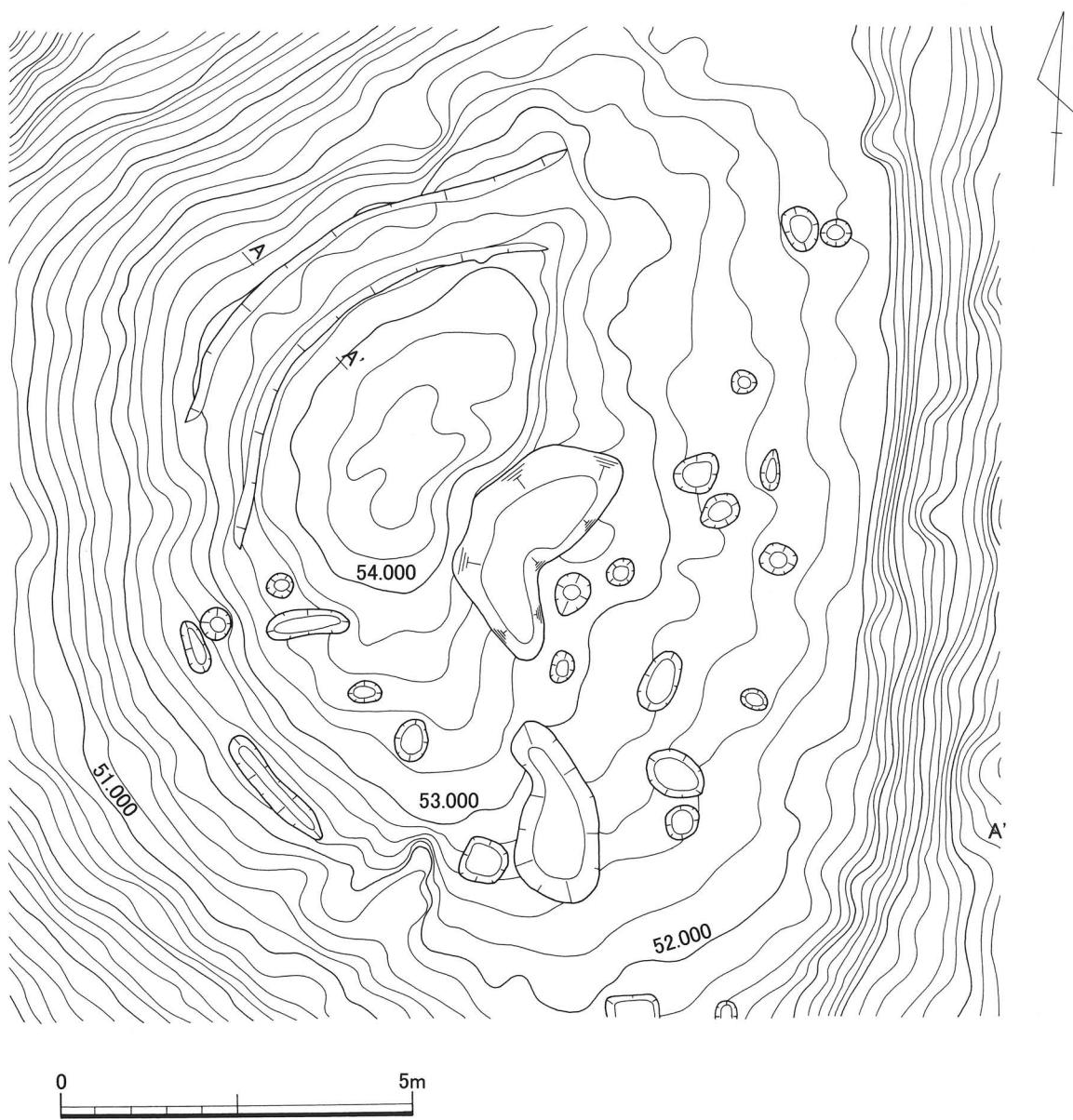
ST1は土壙墓群の南部に位置する。西側にST2が隣接して並行しており、主軸の北側延長部分にもST3が所在している。所在平面形態は南北方向に長軸をとる長方形を呈するが、北辺より南辺がわずかに狭い。南北1.94m、北辺83cm、南辺70cm、深さ15cmを測り、主軸方位はほぼ南北方向である。断面形状は逆台形を呈し、底面はほぼ水平である。埋土は2層に分層でき、上層は灰黄褐色砂質土、下層は褐色砂質土である。出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。

##### ST2 (第 16・17 図)

ST1の西側で並行して検出した土壙墓である。平面形態は南北方向に長軸をとる長方形を呈するが、北辺より南辺がわずかに狭い。南北1.82m、北辺80cm、南辺60cm、深さ10cmを測り、主軸方位はほぼ南北方向であ



第14図 奥ノ坊3号墳断面図



第15図 奥ノ坊4号墳平面図及び周溝断面図

る。断面形状は逆台形を呈し、底面はわずかに南側へ下がる。埋土は2層に分層でき、上層は灰黄褐色砂質土、下層は橙色焼土である。焼土は、床面の南端及び北端には認められず、中央部で盛り上がったような状況で堆積している。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明であるが、東側には10cmの間隔をあけてST1が並行しており、北辺をほぼ同じ位置に揃えてあることから、ST1と同時期のものと考えられる。

#### ST3（第16・17図）

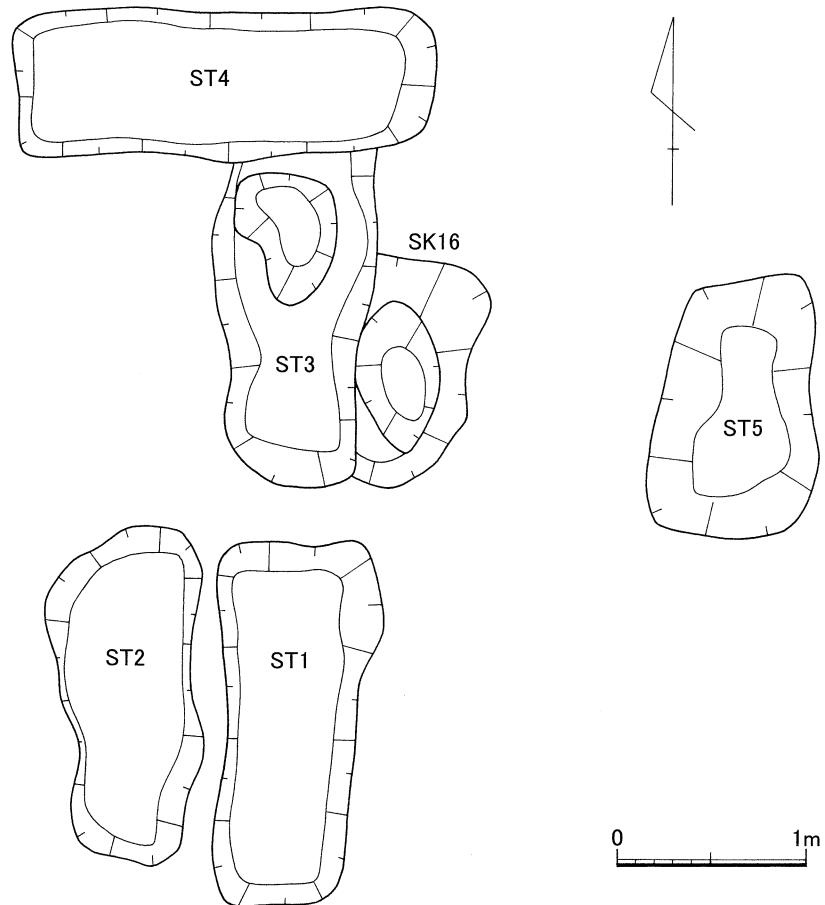
ST1の主軸の北側延長部分で検出した土壙墓である。ST4に北端を切られているが、平面形態は南北方向に長軸をとる長方形を呈すると見られ、北辺より南辺がわずかに狭い。南北1.78m以上、北辺76cm、南辺70cm、深さ16cmを測り、主軸方位はほぼ南北方向である。断面形状は逆台形を呈し、底面はわずかに南側へ下がる。埋土は2層に分層でき、上層はにぶい黄褐色砂質土、下層は暗褐色砂質土である。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明であるが、南側には30cmの間隔をあけて主軸の延長部分でST1が掘削されていることから、ST1と同時期のものと考えられる。

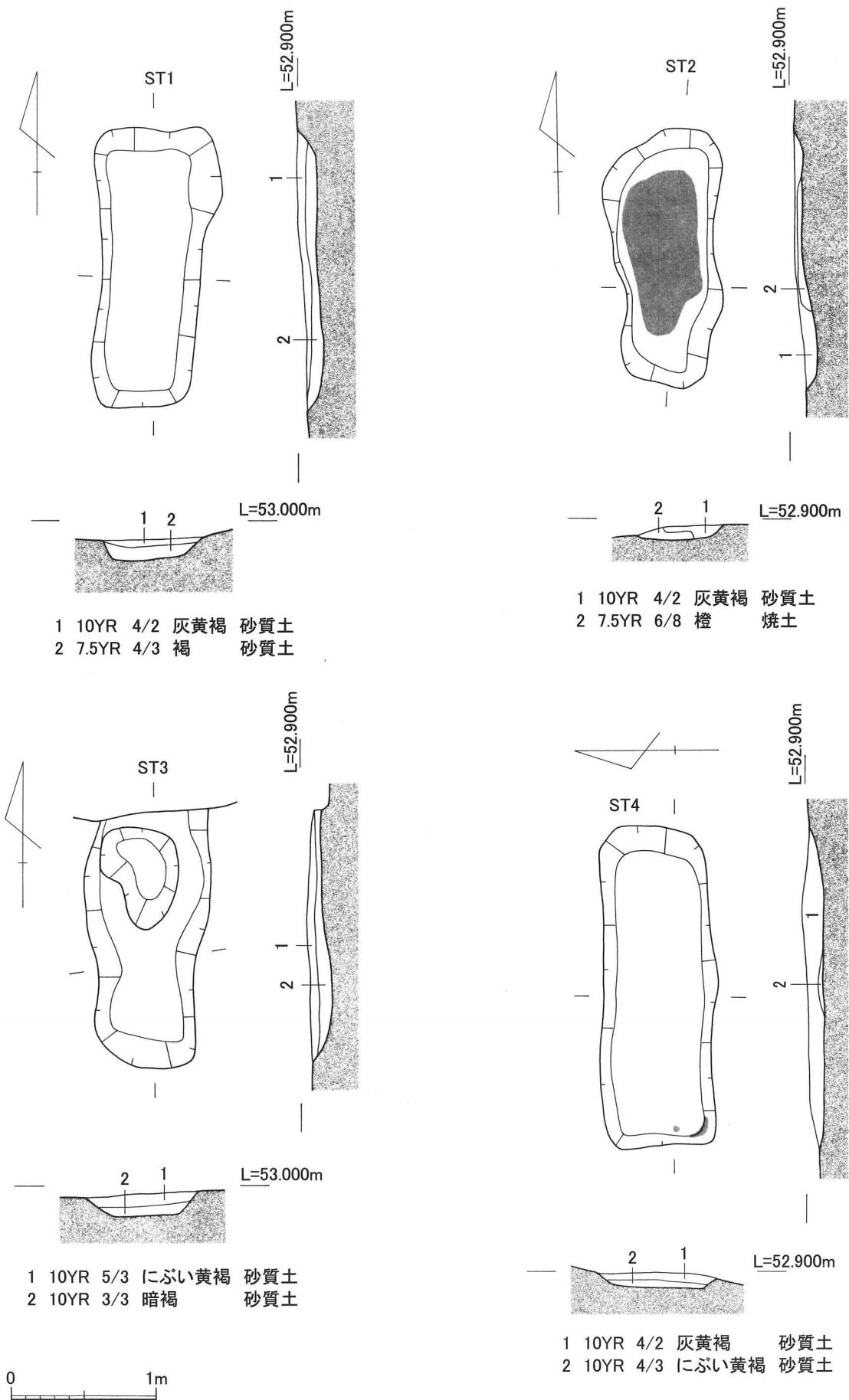
#### ST4（第16・17図）

土壙墓群の北端で検出した土壙墓である。平面形態は東西方向に長軸をとる長方形を呈し、長辺2.25m、短辺76cm、深さ15cmを測り、主軸はほぼ東西方向で他の土壙墓と直交している。断面形状は逆台形を呈し、底面はほぼ水平である。埋土は2層に分層でき、上層は灰黄褐色砂質土、下層はにぶい黄褐色砂質土である。遺構の南東隅部分にわずかに焼土が検出された。

土壙墓上面部分において肥前系磁器の小片が出土しているが、混入品の可能性もある。ST3を切っており、他の土壙墓より後出すると考えられる。



第16図 土壙墓群平面図



第17図 土壌墓平・断面図

### ST5 (第 16・18 図)

土壙墓群の西端で検出した土壙墓である。平面形態は南北方向に長軸をとる長方形を呈すると見られ、南辺より北辺がわずかに狭い。南北 1.4m、北辺 68cm、南辺 82cm、深さ 12cm を測り、主軸方位は N-6° -W である。断面形状は逆台形を呈し、底面はほぼ水平である。埋土は灰黄褐色砂質土の単層である。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明であるが、西側に 1.55m の間隔をあけて ST3 が並行することから、同時期ごろのものと考えられる。

### (3) 土坑

#### SK1 (第 19 図)

調査区南部で 2 号墳の周溝を切った状態で検出した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺 98cm、短辺 90cm、深さ 40cm を測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は明黄褐色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

#### SK2 (第 19 図)

調査区南部で検出した土坑である。平面形態は方形を呈し、長辺 86cm、短辺 77cm、深さ 15cm を測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は黄褐色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

#### SK3 (第 19・23 図)

調査区南部で、近世以降の墓地による削平された部分で検出した土坑である。平面形態は不整形で、長辺 2.7m、短辺 1.2m、深さ 22cm を測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は 2 層に分層できる。上層は黄褐色砂質土、下層は明褐色砂質土である。

遺物は、下層から出土した第 23 図 4 の土師質土器の蓋 1 点のみである。近世以降の遺構と考えられる。

#### SK4 (第 19 図)

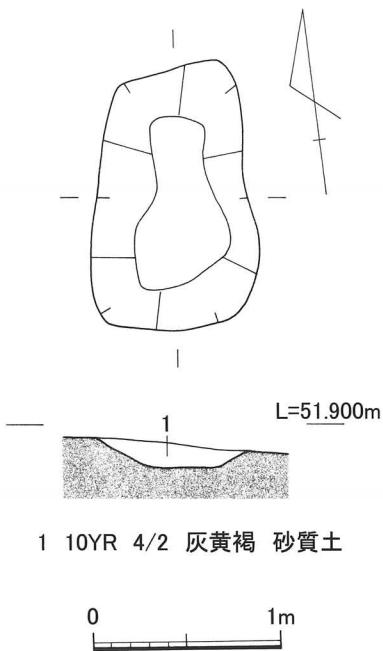
調査区西部の尾根斜面部のうち、やや緩斜面となった部分で検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長辺 2.53m、短辺 92cm、深さ 22cm を測り、主軸方位は N-77° -E である。断面形状は逆台形を呈し、埋土は 4 層に分層できる。第 1 層は黒褐色砂質土、第 2 層はにぶい黄褐色砂混粘質土、第 3 層は褐灰色砂混粘質土、第 4 層はにぶい黄橙色粘質土である。斜面部に掘削されており斜面の傾斜に合わせ、床面も傾斜している。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、後述する SK6 と並行しており、近世墓の可能性が考えられる。

#### SK5 (第 20 図)

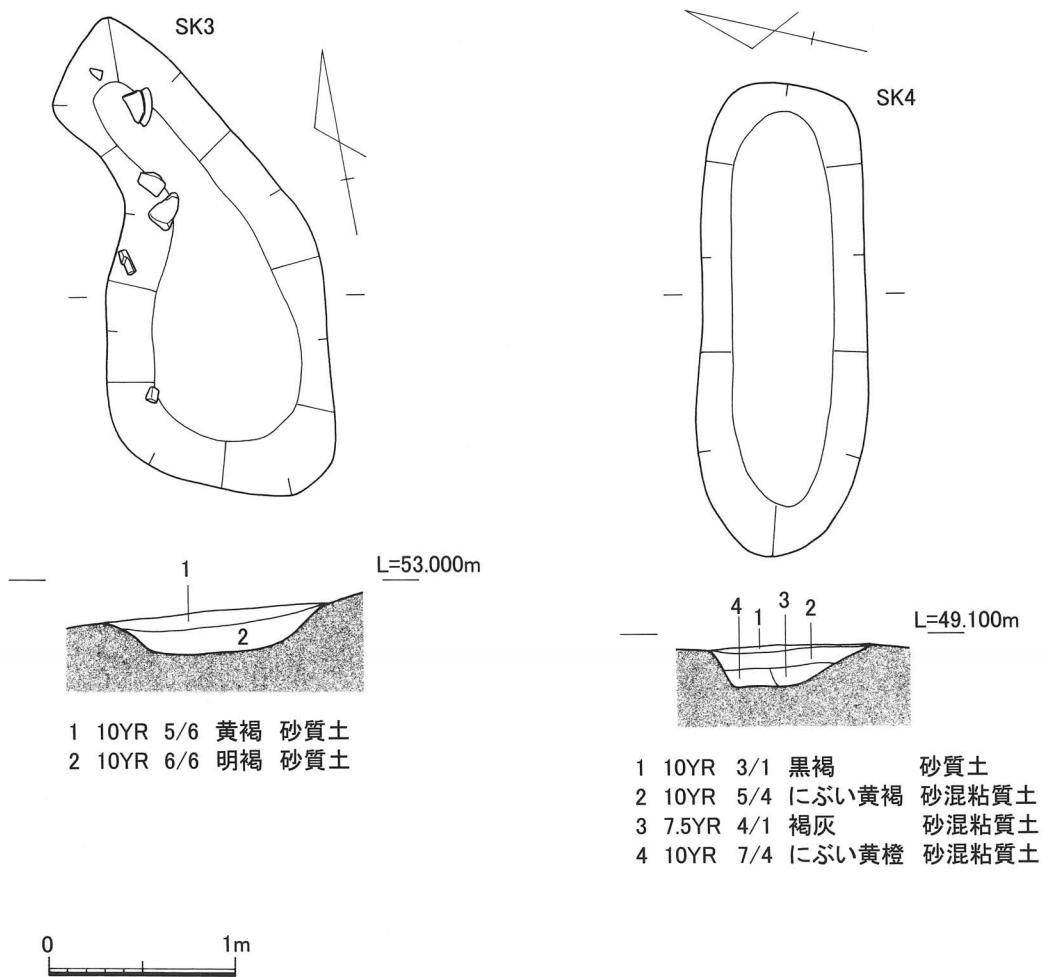
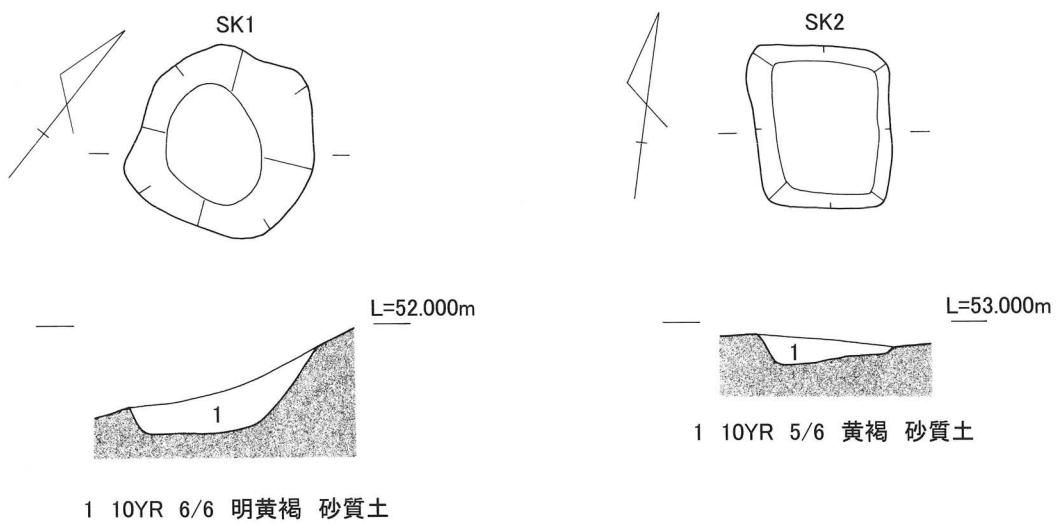
調査区南部で検出した土坑である。平面形態は溝状を呈し、長辺 1.9m、短辺 40cm、深さ 5cm を測る。断面形状は U 字を呈し、埋土は明黄褐色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、4 号墳の周溝の延長部分にあたることから、周溝の一部と考えられる。

#### SK6 (第 19・23 図)

調査区西部の尾根斜面部のうち、やや緩斜面となった部分で検出した土坑である。平面形態は橢円形を呈し、長辺 1.65m、短辺 98cm、深さ 40cm を測り、主軸方位は N-66° -E である。断面形状は逆台形を呈し、埋土は 4 層に分層できる。第 1 層は灰褐色砂混粘質土、第 2 層はにぶい黄褐色砂混粘質土、第 3 層は灰黄褐色砂質土、第 4 層はにぶい黄褐色砂質土である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。斜面部に掘削されており斜面の傾斜に合わせ、床面も傾斜している。埋土中からは、人骨が出土しており、墓と考えられる。SK6 の斜



第18図 ST5平・断面図



第19図 土坑平・断面図①

面上部約2m部分に「ハラクワリ地蔵」と呼ばれる花崗岩の自然石が所在したことから、SK6との関連が考えられる。

出土遺物は第23図2・3である。2は土師質の人形である。3は肥前系磁器の碗である。外面の網目文は直線で描かれている。ほぼ完形で、内部に寛永通寶3枚と板状の鉄製品が納められていた。陶磁器の年代観から1850～60年代の遺構と考えられる。なお、調査終了後、人骨及び遺物は墓地所有者に返却した。

#### SK7（第20図）

調査区北部で検出した土坑である。平面形態は長方形を呈し、長辺1.1m、短辺60cm、深さ8cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

#### SK8（第20図）

調査区北部で検出した土坑である。平面形態は長方形を呈し、長辺1.2m、短辺90cm、深さ18cmを測る。断面形状はレンズ状を呈し、埋土は2層に分層できる。上層はにぶい黄褐色砂質土、下層は黄橙色砂質土である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

#### SK9（第20図）

調査区北部で検出した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、長辺2.05m、短辺2m、深さ80cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄橙色粘質土の単層である。遺物は瓦の小片が出土しており、近世以降の遺構と考えられる。

#### SK10（第21図）

調査区北部で検出した土坑である。平面形態は橢円形を呈し、長径1.08m、短径70cm、深さ12cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色粘質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

#### SK11（第21図）

調査区北部で検出した土坑である。平面形態は橢円形を呈し、長辺1.6m、短辺92cm、深さ36cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は2層に分層できる。上層は黄褐色砂質土、下層は明褐色砂質土である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

#### SK12（第21図）

調査区北部でSK11に切られた状態で検出した土坑である。平面形態は溝を呈し、長辺2.14m、短辺30cm、深さ3cmを測る。断面形状は浅いU字を呈し、埋土はにぶい黄褐色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

#### SK13（第21図）

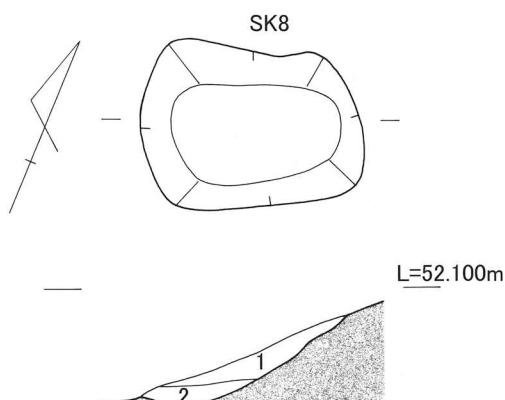
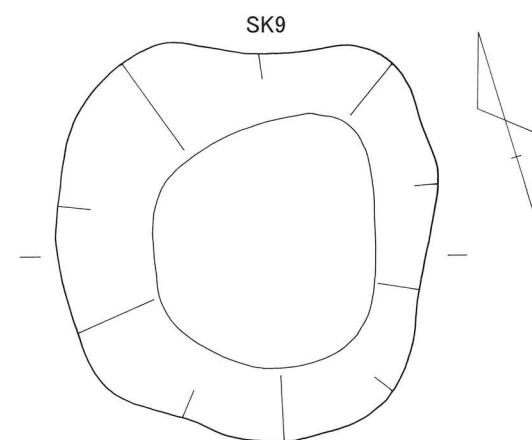
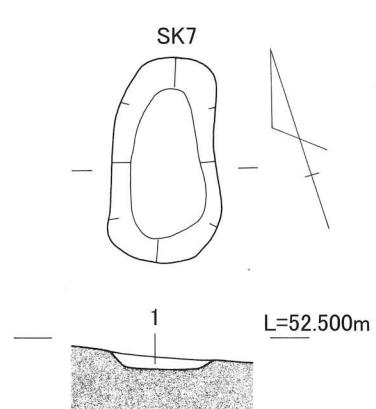
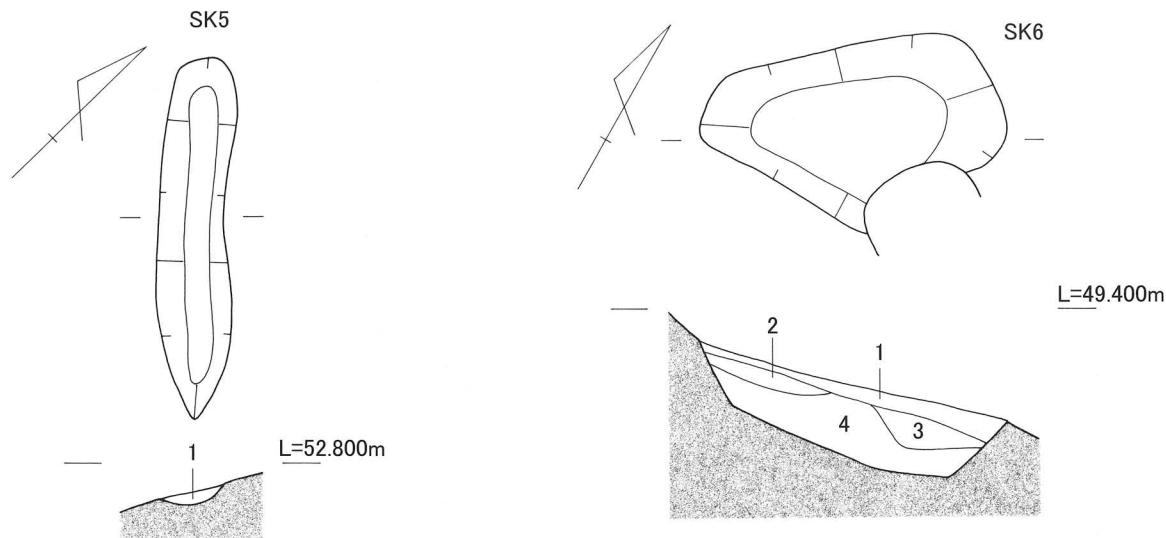
調査区北部で検出した土坑である。平面形態は橢円形を呈し、長径1.3m、短径1.04m、深さ23cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は褐色粘質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

#### SK14（第21図）

調査区北部で検出した土坑である。平面形態は溝状を呈し、長辺2.16m、短辺70cm、深さ10cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

#### SK15（第21図）

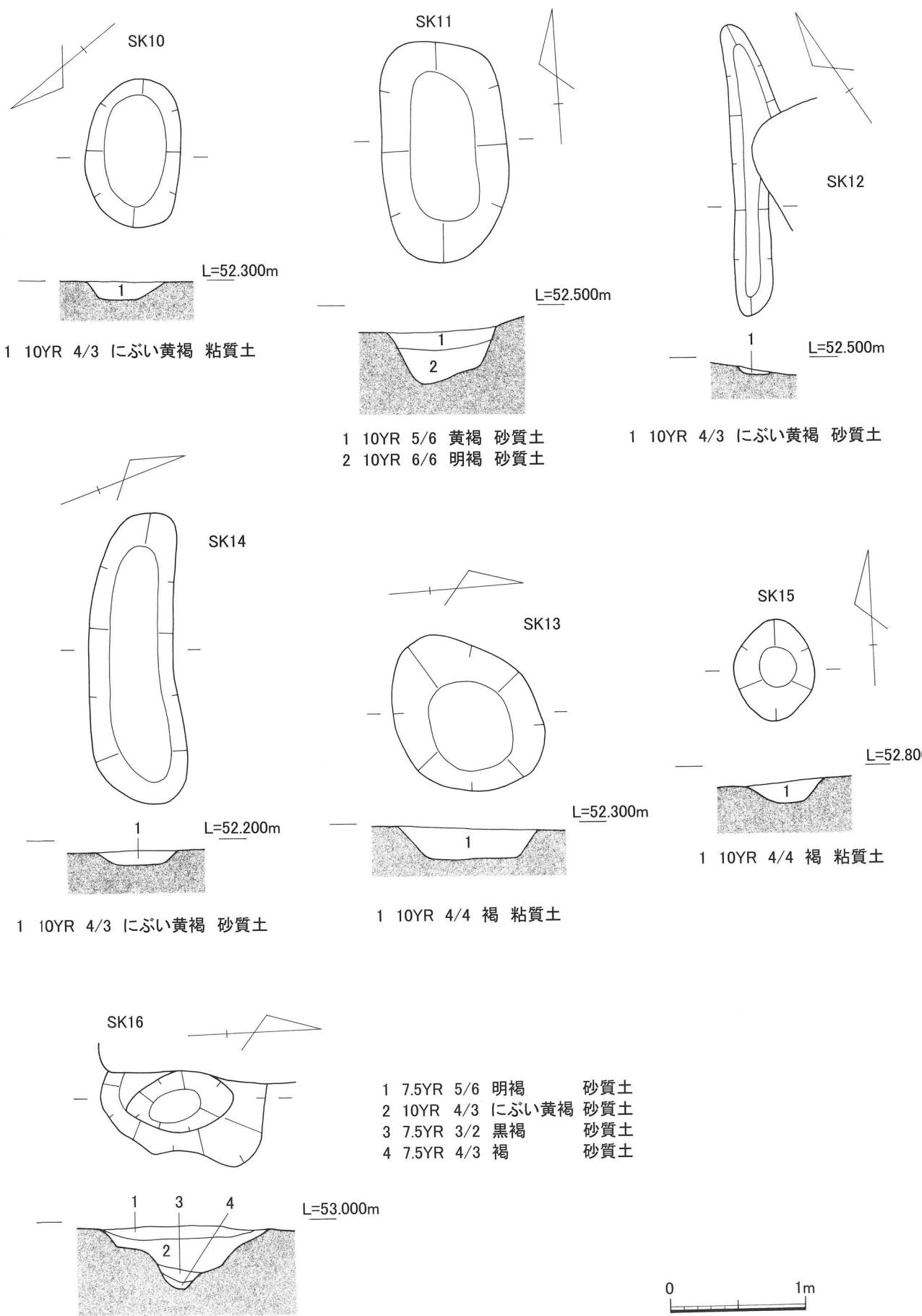
調査区北部で検出した土坑である。平面形態は橢円形を呈し、長径74cm、短径60cm、深さ16cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は褐色粘質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。



1 10YR 7/4 にぶい黄橙 砂質土



第20図 土坑平・断面図②



第21図 土坑平・断面図③

### SK16 (第 21 図)

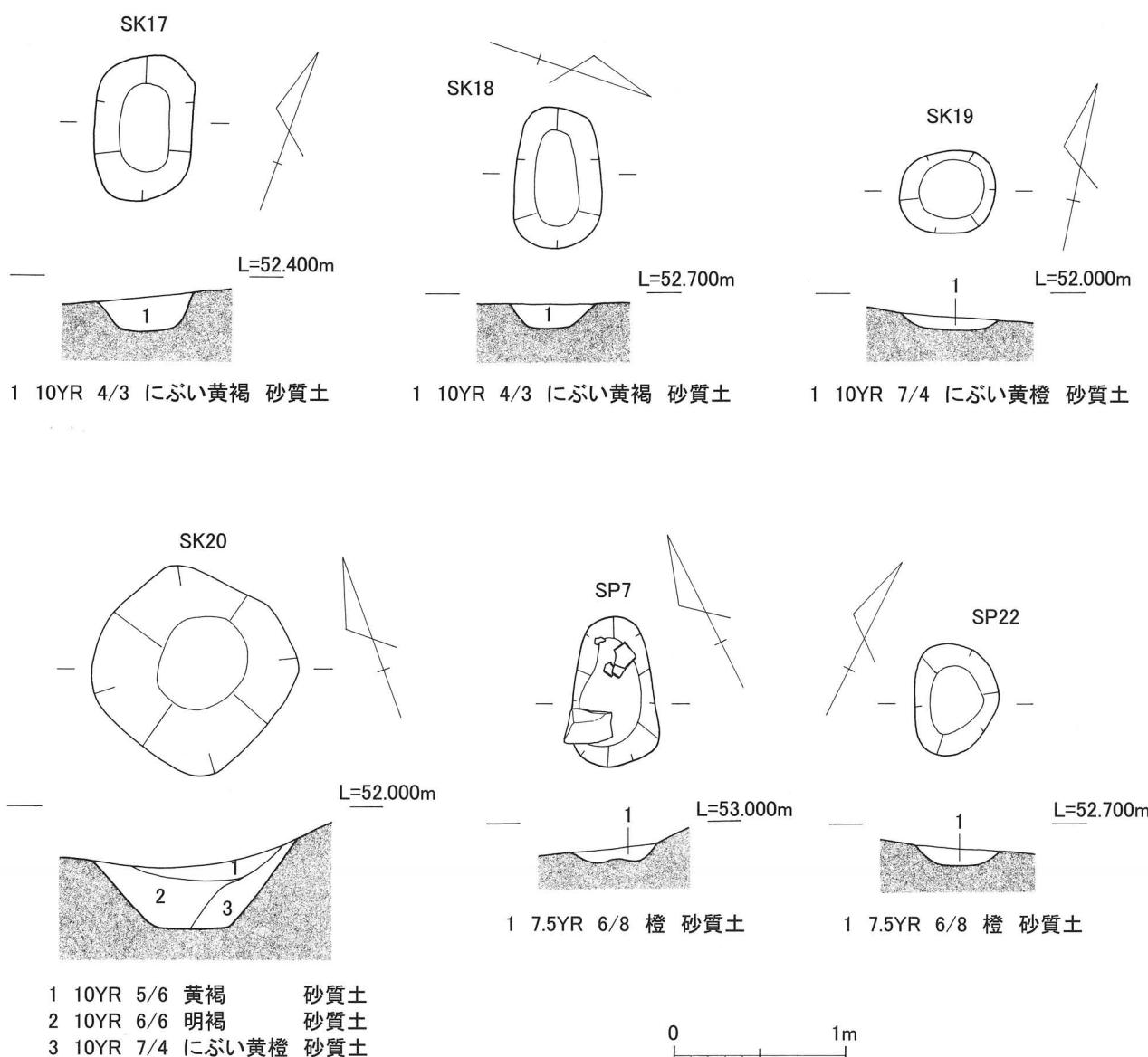
調査区北部で検出した土坑である。西半が S T3に切られており、平面形態は不明であるが、長辺 1.22m、短辺 60cm以上、深さ 46cmを測る。2段落ちとなっており、中央部にピット状の窪みが見られる。埋土は 4 層に分層でき、第 1 層は明褐色砂質土、第 2 層はにぶい黄褐色砂質土、第3層は黒褐色砂質土、第 4 層は褐色砂質土である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

### SK17 (第 21 図)

調査区北部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径 88cm、短径 57cm、深さ 18cmを測る。断面形狀は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

### SK18 (第 21 図)

調査区北部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径 83cm、短径 52cm、深さ 13cmを測る。断面形狀は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。



第22図 土坑及びピット平・断面図

#### SK19 (第 21 図)

調査区北部で検出した土坑である。平面形態は橢円形を呈し、長径 55cm、短径 50cm、深さ 7cm を測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄橙色粘質土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

#### SK20 (第 22 図)

調査区北部で検出した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、一辺 1.1m、深さ 50cm を測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は 3 層に分層できる。第 1 層は黄褐色砂質土、第 2 層は明褐色砂質土、第 3 層はにぶい黄橙色砂質土である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

### (4) ピット

#### SP7 (第 22・23 図)

調査区南部の近世以降の墓地造成によって削平された部分で検出したピットである。平面形態は橢円形を呈し、長径 88cm、短径 50cm、深さ 10m を測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は橙色砂質土の単層である。埋土中には人頭大の割石が検出された。

出土遺物は第 23 図 6 の土師質土器の火鉢 1 点のみである。内外面とも板ナデを施すものである。19 世紀頃の遺構と考えられる。

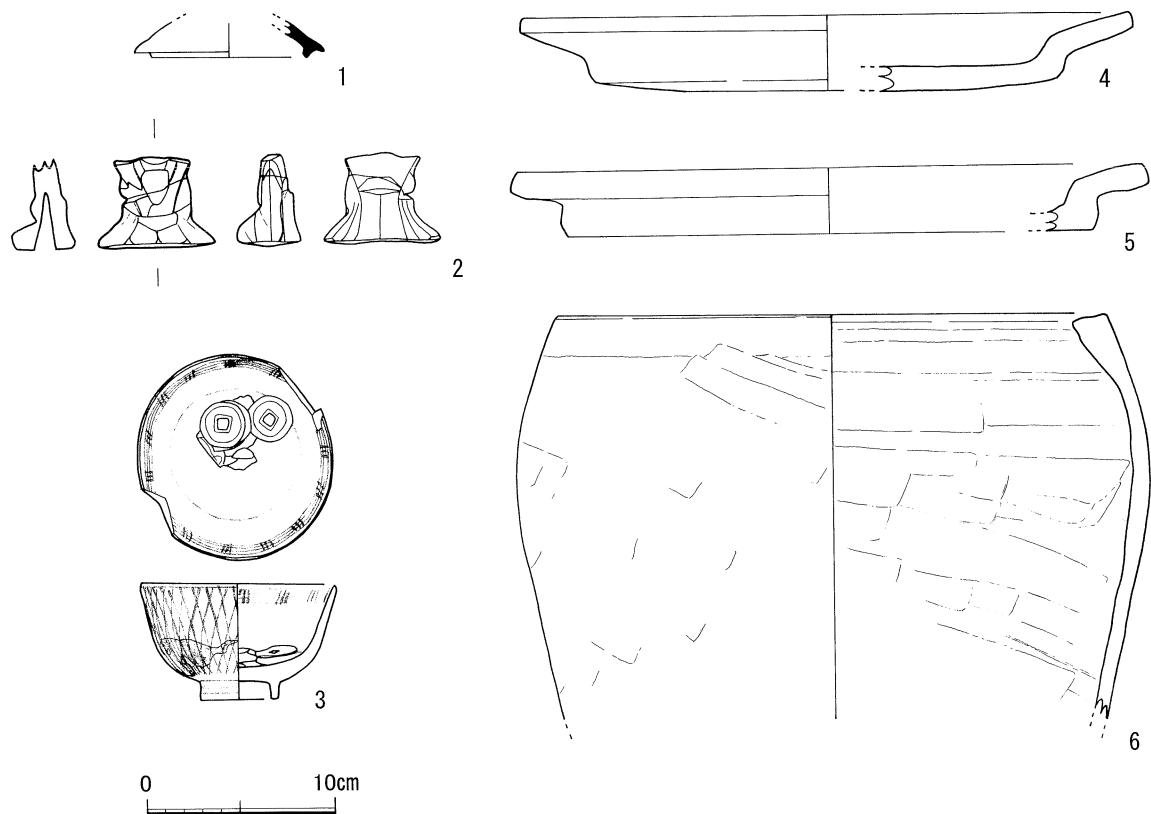
#### SP22 (第 22・23 図)

調査区南部の近世以降の墓地造成によって削平された部分で検出したピットである。平面形態は橢円形を呈し、長径 66cm、短径 50cm、深さ 10cm を測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は橙色砂質土の単層である。

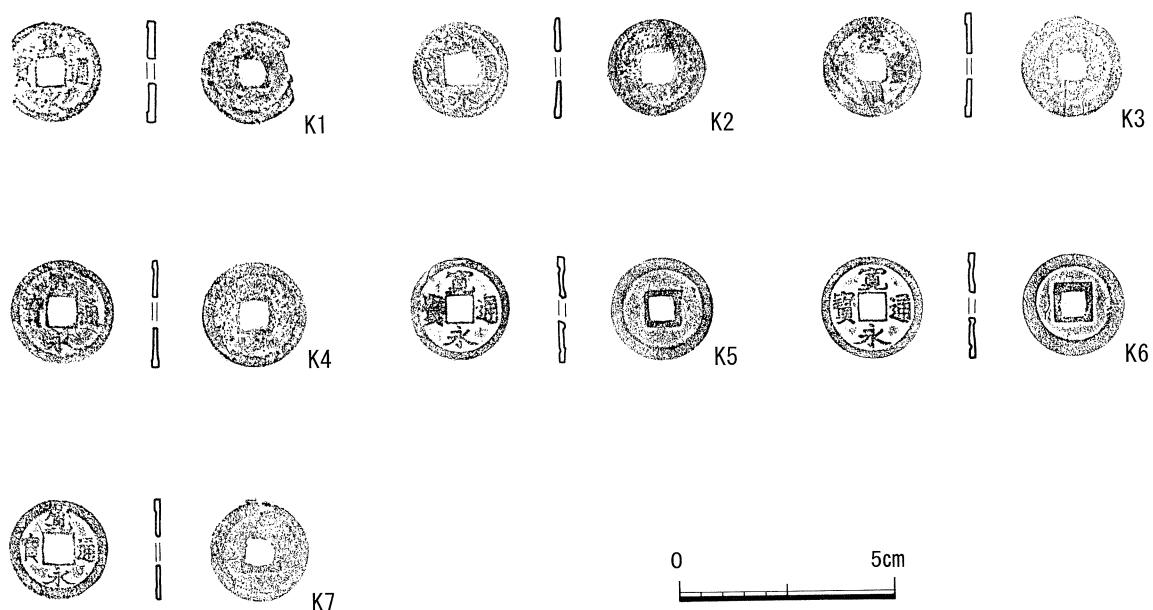
出土遺物は第 23 図 5 の土師質土器の蓋 1 点のみで、19 世紀頃の遺構と考えられる。

### (5) 表土出土の遺物

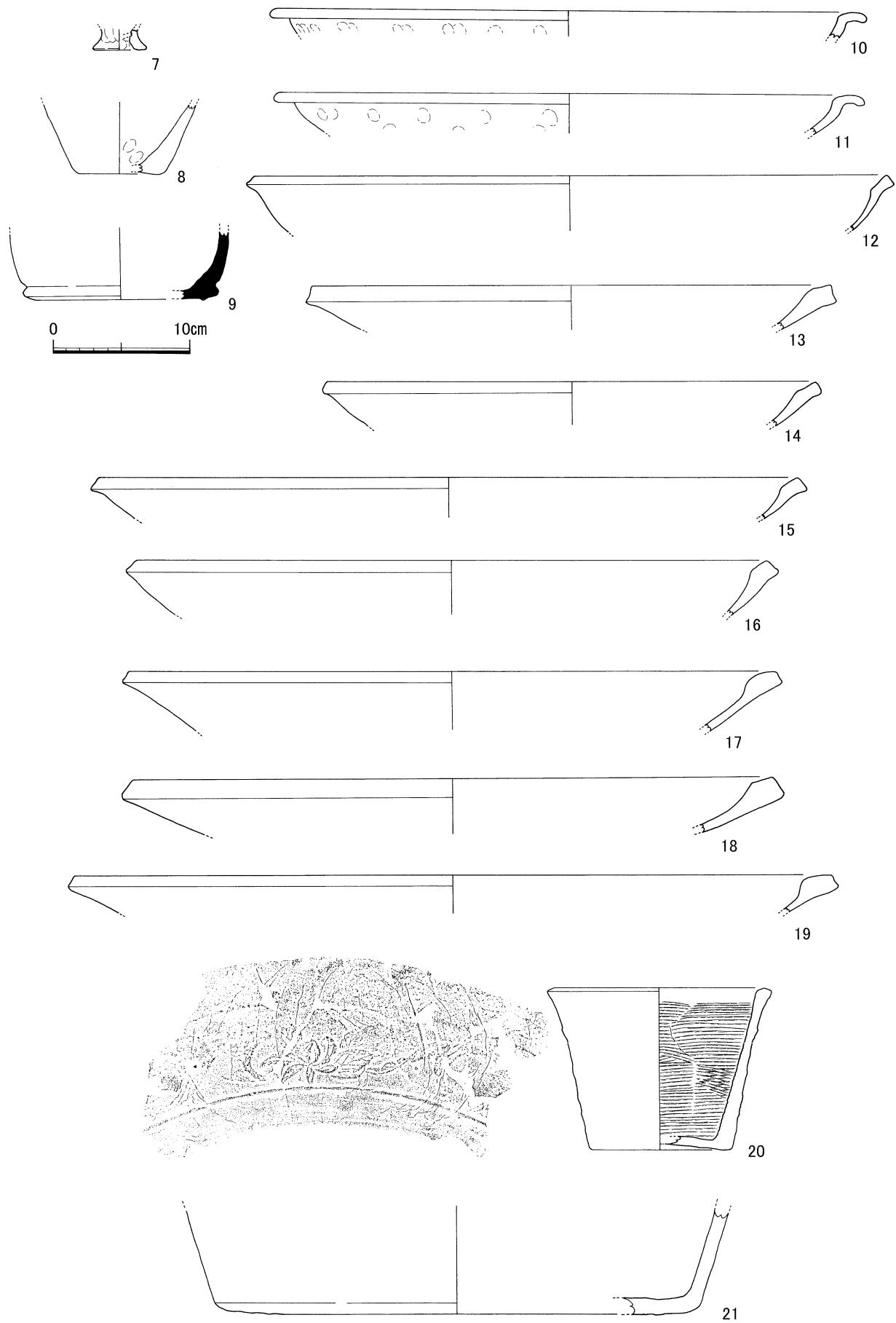
遺構面までの表土掘削中に出土した遺物を第 24 ~ 27 図に掲載した。主に調査区の北半の尾根頂部付近で出土した。幕末の遺物が大半を占めるが、弥生後期の土器なども認められる。K1 ~ K7 は古銭である。K3 は摩滅により文字が不明であるが、その他のものは寛永通寶である。7 は弥生土器の製塩土器の脚部である。内外面に指頭圧が施されている。8 は弥生土器の甕底部である。内面に指頭圧が施されている。9 は須恵器の壺である。高台は退化している。10 ~ 19 は焙烙である。10・11 は口縁部が大きく屈曲し、土師質のもので、外面に指頭圧が施されているものである。12 ~ 19 は口縁部がほとんど屈曲せず、瓦質のものである。20 は土師質土器の焜炉である。外面には型成形による草花文が見られ、内面は粗いヨコハケである。21 は土師質土器の甕である。22 は肥前系磁器の蓋である。23 ~ 25 は肥前系磁器の碗である。23 の外面はコンニヤク印判である。26 は瀬戸美濃系磁器の碗である。27・28 は肥前系磁器の碗である。29 は肥前系磁器の皿である。型紙刷りである。30 は肥前系陶器の皿である。高台無釉とし、見込みに鉄絵が見られる。31 は産地不明陶器の蓋である。32 は京・信楽系陶器の底部である。33・34 は明石焼陶器の鉢である。35 ~ 39 は明石焼陶器の擂鉢である。40 は土師質土器の井戸枠である。S1 は凝灰岩製の硯である。S2 はナイフ形石器である。全体に白色風化している。



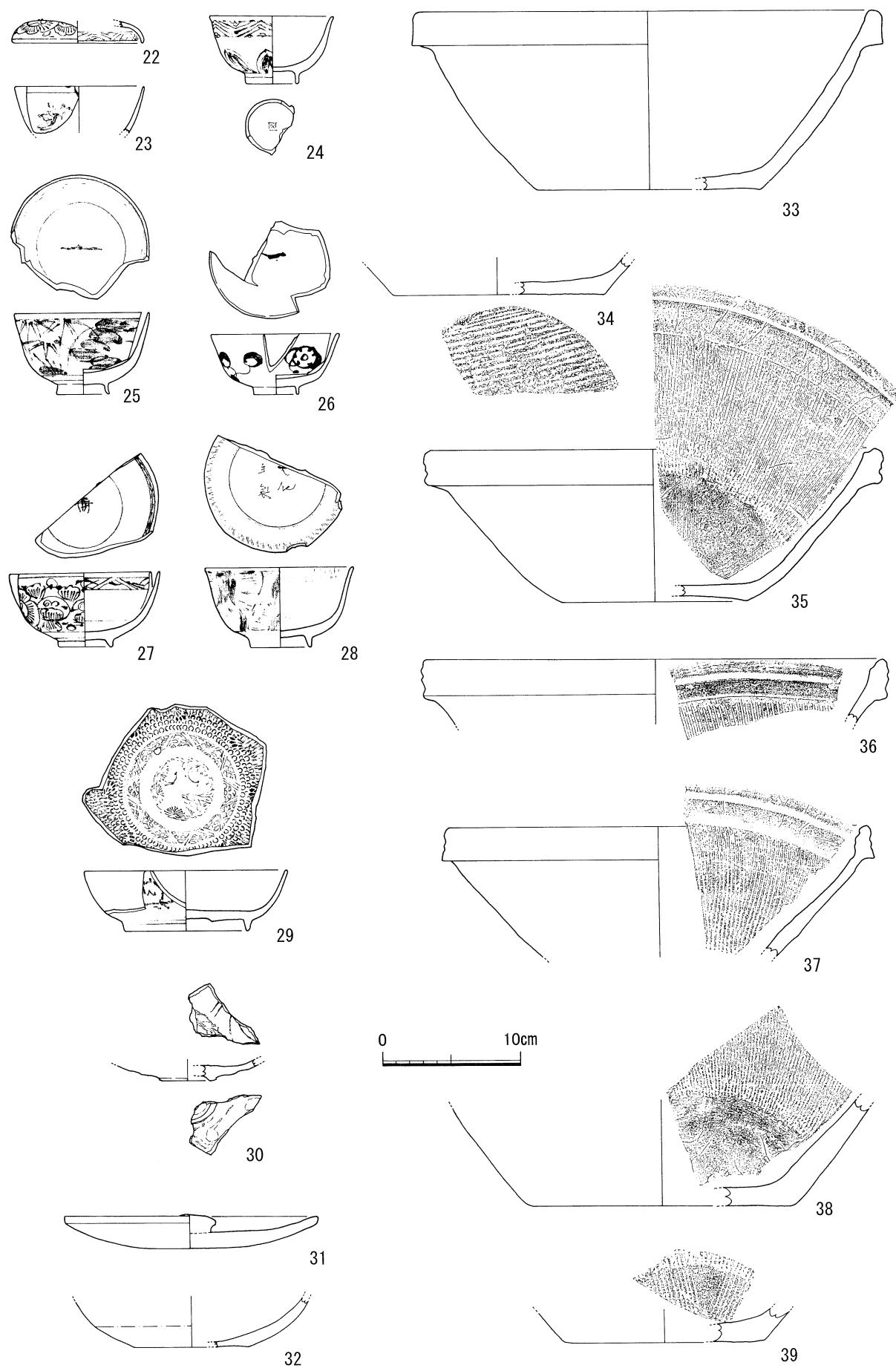
第23図 遺構出土遺物実測図



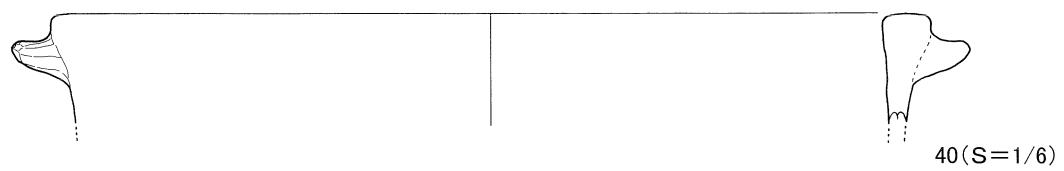
第24図 表土掘削中出土銭実測図



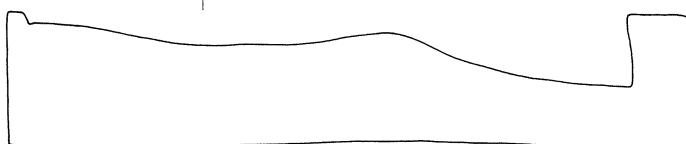
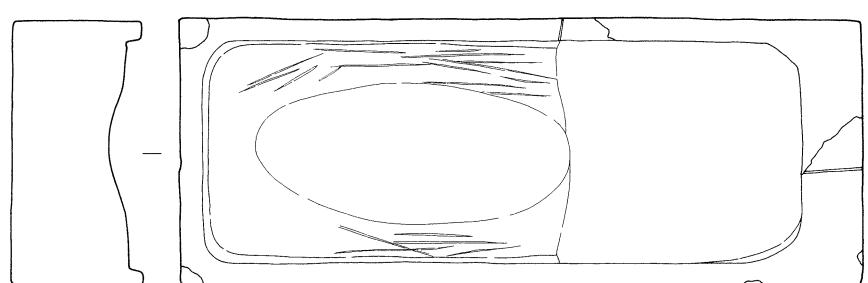
第25図 表土掘削中出土遺物実測図①



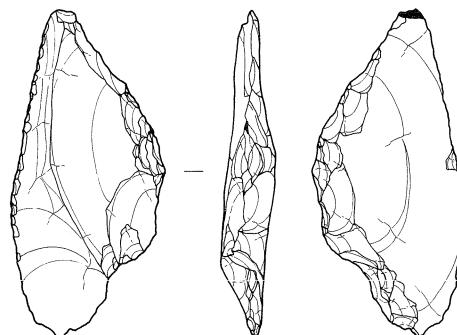
第26図 表土掘削中出土遺物実測図②



0 20cm



S1



0 5cm

第27図 表土掘削中出土遺物③

## 第4節 まとめ

### (1) 遺構の変遷について

今回の調査では、古墳をはじめ、土坑、柱穴等多数の遺構を検出した。また、遺物も幅広い時期のものが出土している。以下に、遺構の変遷を示し、まとめにかえたい。

当該調査区で最も古い時期のものとしては、表土から出土したS2のナイフ形石器で、旧石器時代にさかのぼるものである。ただし、当該期の明確な遺構は検出されていない。

次に、弥生土器が少量見られる。当該期の遺構も不明であるが、弥生土器の出土位置がST1～ST5周辺に偏ることから、これら土壙墓が弥生時代の遺構の可能性が考えられる。調査地周辺では、奥の坊遺跡（弥生中期）、奥の坊權現前遺跡（弥生後期）が見られ、いずれかの時期の可能性が考えられる。なお、ST1～ST5は、主軸方位や配列が企画的であり、今回の調査地の大多数を占める近世の遺構の状況とは明らかに異なる様相を示すものである。ただし、ST4のみ、主軸方位が直交しており、上面で近世の遺物が出土していることから、後出する可能性も否定できない。

古墳時代終末期には、調査地の丘陵部に古墳群が築かれた時期である。奥ノ坊2～4号墳が該当する。いずれも大きく改変を受けており、規模・石室の状況等不明な点が多い。なお、今回の調査では2・3号墳でわずかに須恵器の小片が出土したにすぎないが、1号墳出土遺物等からも概ね7世紀の古墳群と考えられる。

古墳時代以降は、遺構・遺物はほとんど見られなくなり、近世後半に再び墓地として活用されるようになり、現在に至っている。

### (2) 古高松地区の古墳について

今回の調査では、7世紀の古墳群を検出した。しかしながら、いずれも大きく改変を受けているため、その規模や被葬者像等については不明な点が多い。このため、周辺の古墳を集成し、その理解の一助としたい。

高松平野東部の丘陵地帯は、古くから古墳の多い地域として知られている。そのうち丘陵部の北半の古高松地区の後期古墳は、伝承地や消滅したと言われているものも含め45基が知られている。特に小山古墳・山下古墳・久本古墳が、当該地の中では平野に近い位置に立地し、規模が大きく、特徴的な古墳として著名である。消滅した小山古墳や墳丘盛土が流出してしまっている山下古墳については、墳丘規模は不明であるが、発掘調査が行われた久本古墳については、直径36mの円墳で、周溝を含めた直径は53mを想定している（大嶋2004）。また、石室についても、その規模や形態は特徴的である。小山古墳は全長11.6mを測り、複室構造を有するものである（小竹1977）。山下古墳は全長9mを測り、天井石を1枚岩とするものである（大山1980）。久本古墳は10.8mを測り、県下で唯一石棚を有するものである。なお、久本古墳については、承盤付銅鏡や亀甲型陶棺の出土も認められ、畿内との結びつきが非常に深いことをうかがわせる。

一方、これら古墳の背後に見られる丘陵帶において群集墳が認められる。その分布は、岡山古墳群や岡山小古墳群が所在する岡山周辺に集中する傾向が見られ、次いで長尾古墳群が所在する長尾山周辺と奥ノ坊古墳群が所在する丘陵部周辺にも分布域が認められる。いずれも丘陵の南斜面に築造されており、直径10m前後のものが多い。発掘調査された例としては大空古墳（大嶋1999）、金川渕古墳（大嶋1999）、漆谷古墳群（末光2004）がある。大空古墳及び金川渕古墳については、改変が著しく、遺物もほとんど出土しておらず、墳丘規模が10m前後であることが判明したにすぎない。漆谷古墳については、墳丘規模は不明であるが、石室の構造については、いずれも幅約1mの玄室の奥壁側が残っていた。その出土遺物から7世紀中葉～8世紀初頭の古墳群と考えられる。なお、石室については、発掘調査は行われていないが、長尾1号墳が最も残りがよく、玄室は残存長1.6m、幅1.1m、高さ90cm以上を測り、両袖式の横穴式石室と考えられる。今回発掘の奥ノ坊古墳群についてもこれらの古墳とほぼ同規模のものと考えられる。

## 参考文献

- 大嶋和則 1999 『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊 奥の坊遺跡群1』 高松市教育委員会  
大嶋和則 2004 『高松指定史跡 久本古墳』 高松市教育委員会  
大山真充 1980 『山下古墳調査報告』 香川県教育委員会  
小竹一郎ほか 1977 『古高松郷誌』 古高松郷土誌編集委員会  
末光甲正 2004 『漆谷古墳群』 高松市教育委員会



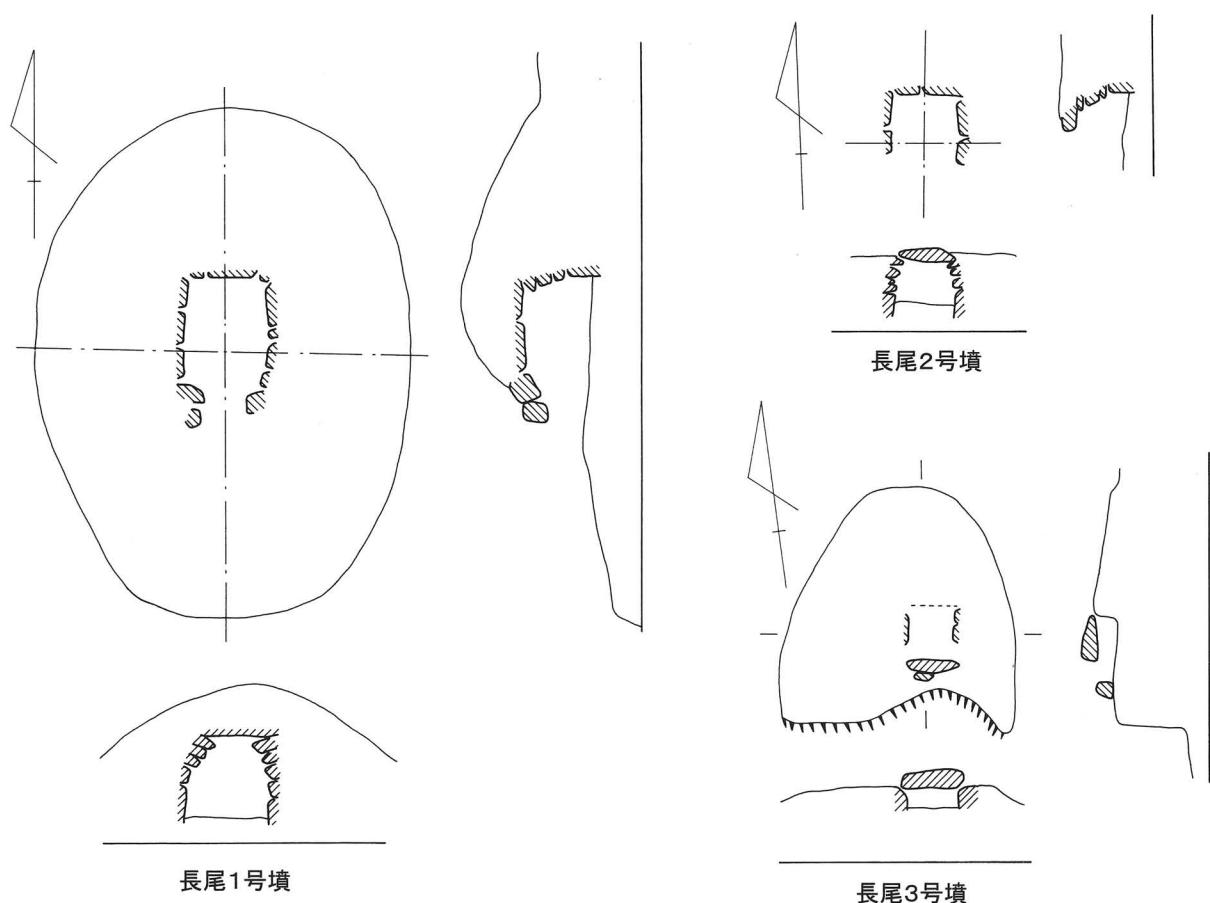
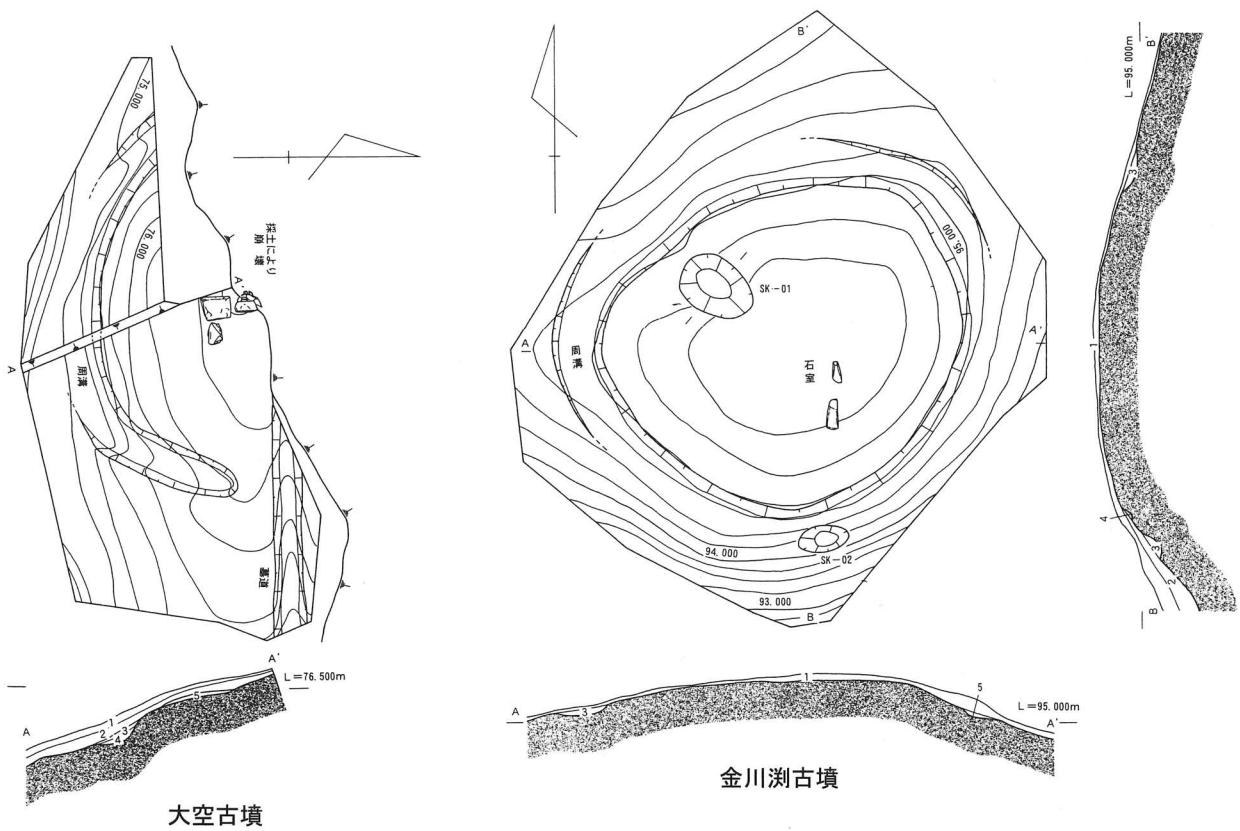
第28図 高松平野東部丘陵北半（古高松地区）の後期古墳位置図（S=10,000）

表4 高松平野東部丘陵北半（古高松地区）の後期古墳一覧表

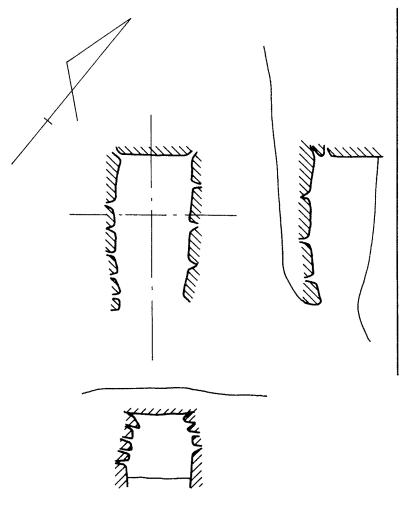
	古墳名	所在地	墳丘	埋葬施設	出土遺物	特記	文献	
1	喜岡古墳	高松町帰来	円墳	不明	土器出土	消滅？	1	
2	地部谷古墳跡	高松町地部谷	円墳	不明		開墾により消滅（位置不明）	1	
3	1号墳跡	高松町奥ノ坊	円墳	不明	須恵器平瓶	1965年開墾により消滅	1	
4	奥ノ坊	2号墳	高松町奥ノ坊	円墳	横穴式石室	須恵器小片	2002年調査・消滅 本書	
5	古墳群	3号墳	高松町奥ノ坊	円墳	横穴式石室	須恵器蓋	2002年調査・消滅 本書	
6		4号墳	高松町奥ノ坊	円墳	横穴式石室		2002年調査・消滅 本書	
7	金川渓古墳	高松町金川渓	円墳、直径10m	横穴式石室	須恵器小片	1995年調査・消滅	2	
8	大空古墳	高松町大空	円墳、直径11m	横穴式石室	須恵器小片	1995年調査・消滅	2	
9	スベリ古墳跡	高松町大空	円墳	不明	須恵器横瓶	1954年開墾により消滅	1	
10	南谷古墳跡	高松町南谷	円墳	不明	須恵器平瓶、土師器甕	1955年開墾により消滅	1	
11	1号墳	高松町長尾	円墳、直径約13.8m	横穴式石室、残存長約4m	須恵器片		1	
12	2号墳	高松町長尾	円墳	横穴式石室、残存長約1.3m	須恵器片		1	
13	3号墳	高松町長尾	円墳	横穴式石室、残存長約1m			1	
14	4号墳跡	高松町長尾	円墳	横穴式石室		消滅（位置不明）	1	
15	5号墳跡	高松町長尾	円墳	横穴式石室		消滅（位置不明）	1	
16	6号墳跡	高松町長尾	円墳	横穴式石室		消滅（位置不明）	1	
17	7号墳跡	高松町長尾	円墳	横穴式石室		消滅（位置不明）	1	
18	小山古墳跡	新田町小山	円墳、長径約18m、短径約16.5m残存	横穴式石室（複室）、全長11.6m	須恵器長頸壺	1950年採土により消滅	1	
19	古墳伝承地	新田町小山	不明	不明		消滅	1	
20	山下古墳	新田町山下	不明	横穴式石室、残存長9.0m		1977年調査	3	
21	1号墳	新田町岡山	円墳、直径10m	不明	土師器細片散布		1	
22	2号墳	新田町岡山	円墳、直径10m	不明	陶棺脚部？出土		1	
23	3号墳	新田町岡山	長径約7m、短径約4m残存	不明（安山岩自然石露出）			1	
24	4号墳	新田町岡山	長径約11m、短径約10m残存	不明			1	
25	5号墳	新田町岡山	長径約8m、短径約7m残存	不明	朱彩の土器細片散布		1	
26	6号墳	新田町岡山	長径約10m、短径約6m残存	不明			1	
27	7号墳	新田町岡山	長径約8.5m、短径約7m残存	不明			1	
28	8号墳	新田町岡山	円墳、直径7m	不明			1	
29	9号墳	新田町岡山	円墳、直径8m	不明			1	
30	10号墳	新田町岡山	円墳、直径8m	不明			1	
31	11号墳	新田町岡山	長径約9m、短径約7m残存	不明			1	
32	12号墳	新田町岡山	長径約8m、短径約6m残存	不明			1	
33	13号墳	新田町岡山	円墳、直径7m	不明	土師器の細片散布		1	
34	14号墳	新田町岡山	円墳、直径6m	不明			1	
35	15号墳	新田町岡山	長径約10m、短径約7m残存	消滅？	土師器細片散布		1	
36	2号墳	新田町岡山	不明	横穴式石室、残存長約4m			1	
37	3号墳	新田町岡山	長径約10m、短径約7m残存	石材散布			1	
38	岡山	4号墳	新田町岡山	不明	石材散布		1	
39	古墳群	5号墳	新田町岡山	不明	横穴式石室		1	
40	6号墳跡	新田町岡山	不明	横穴式石室	須恵器壺	造成により消滅（位置不明）	1	
41	7号墳跡	新田町岡山	不明	横穴式石室		造成により消滅（位置不明）	1	
42	漆谷	1号墳	新田町漆谷	円墳、直径8m	横穴式石室、残存長2m	土師器壺	1989年調査・移転復元	4
43	古墳群	2号墳	新田町漆谷	円墳	横穴式石室、残存長3.2m	須恵器壺	1989年調査・移転復元	4
44		3号墳	新田町漆谷	円墳	横穴式石室、残存長1.3m	鉄釘	1989年調査・移転復元	4
45	久本古墳	新田町久本	円墳、直径約36m	横穴式石室（石棚付）、全長10.8m	陶棺、銅鏡、須恵器	1975年調査・市指定	5	

## 参考文献

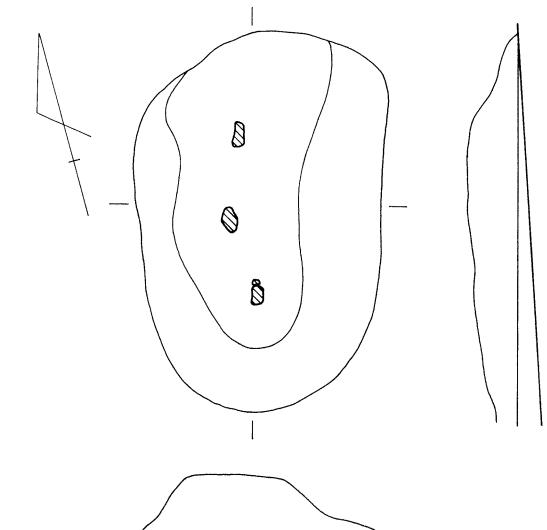
- 1 小竹一郎 ほか 1977『古高松郷土誌』古高松郷土誌編集委員会
- 2 大嶋和則 1999『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊 奥の坊遺跡群I』高松市教育委員会
- 3 大山真充 1980『山下古墳調査報告』香川県教育委員会
- 4 末光甲正 2004『漆谷古墳群』高松市教育委員会
- 5 大嶋和則 2004『高松市指定史跡 久本古墳』高松市教育委員会



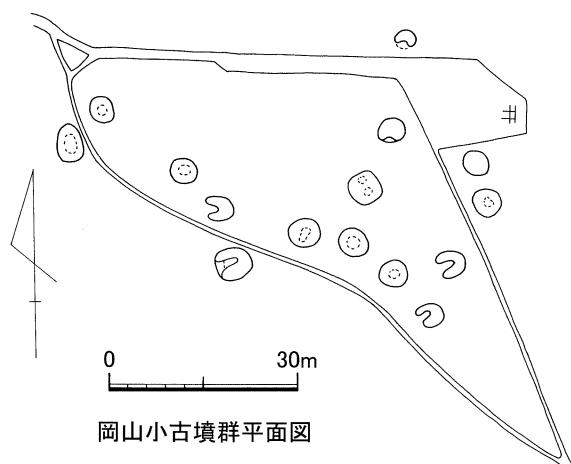
第29図 古高松地区後期古墳集成① (S=1/100)



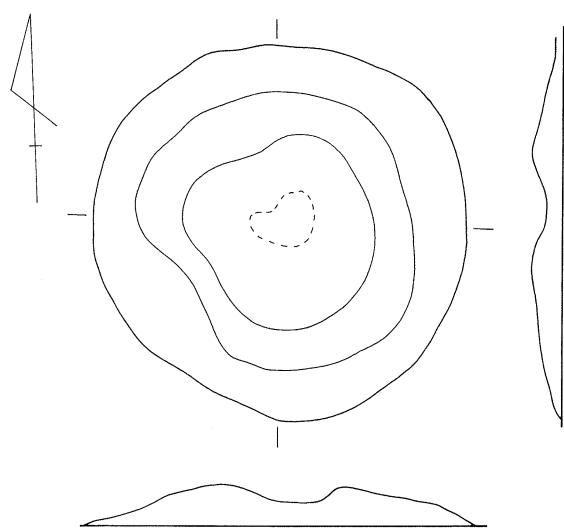
岡山2号墳



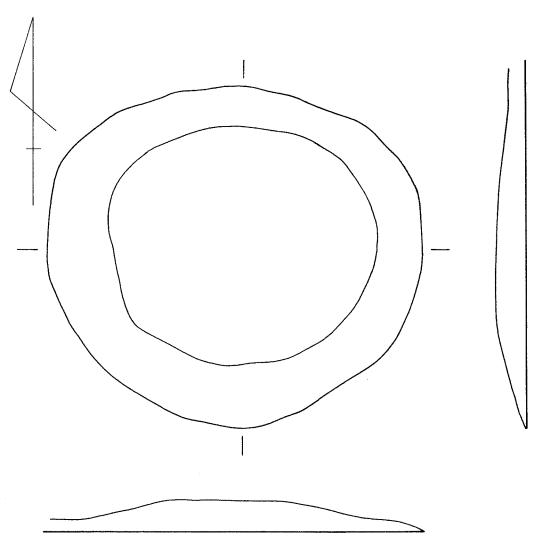
岡山3号墳



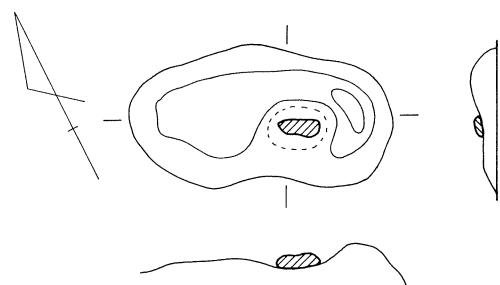
岡山小古墳群平面図



岡山1号墳

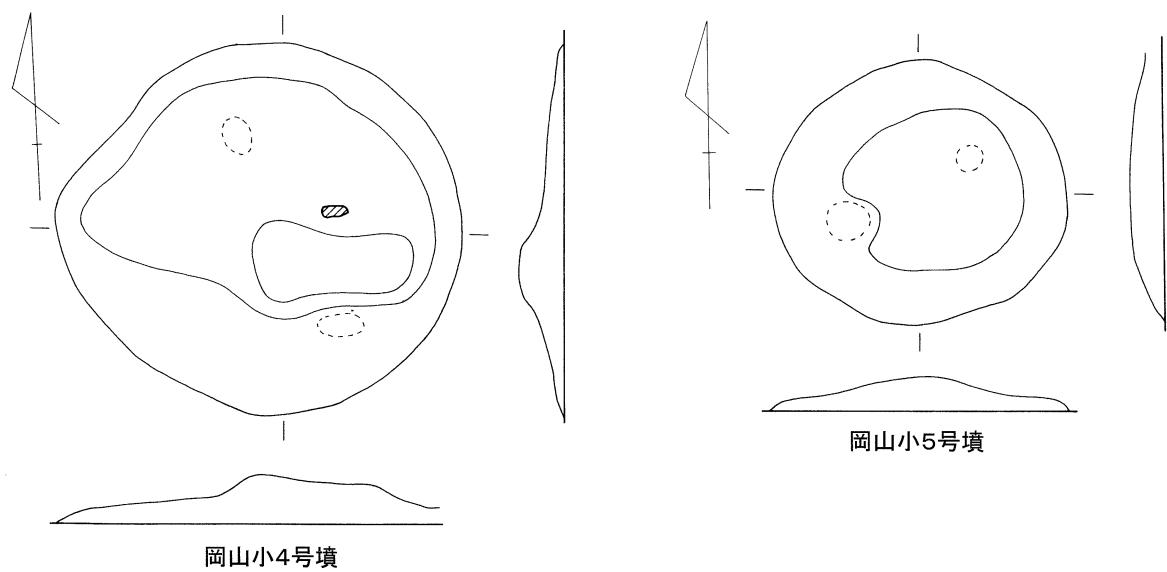


岡山2号墳

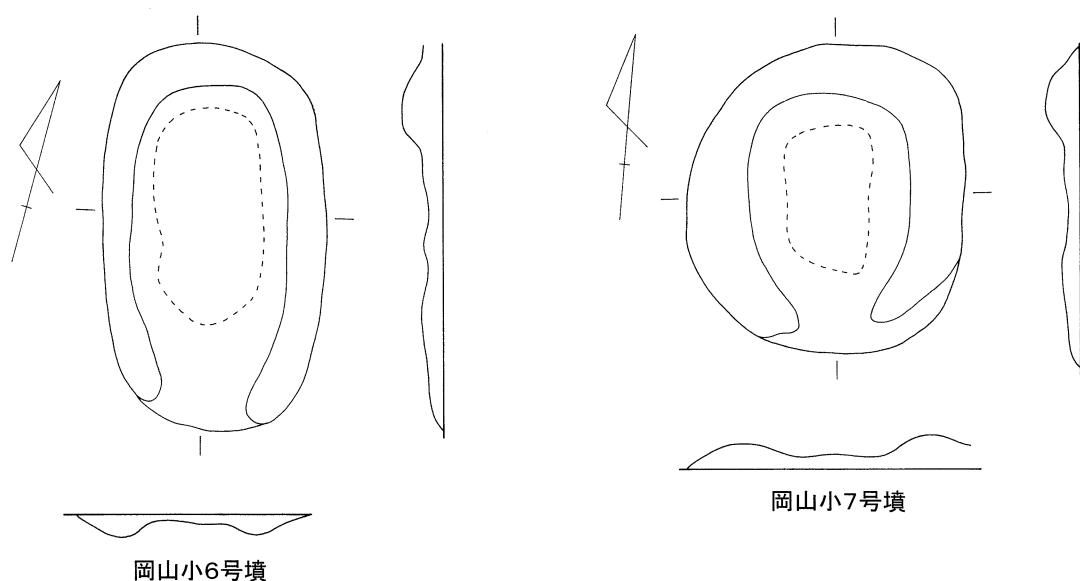


岡山3号墳

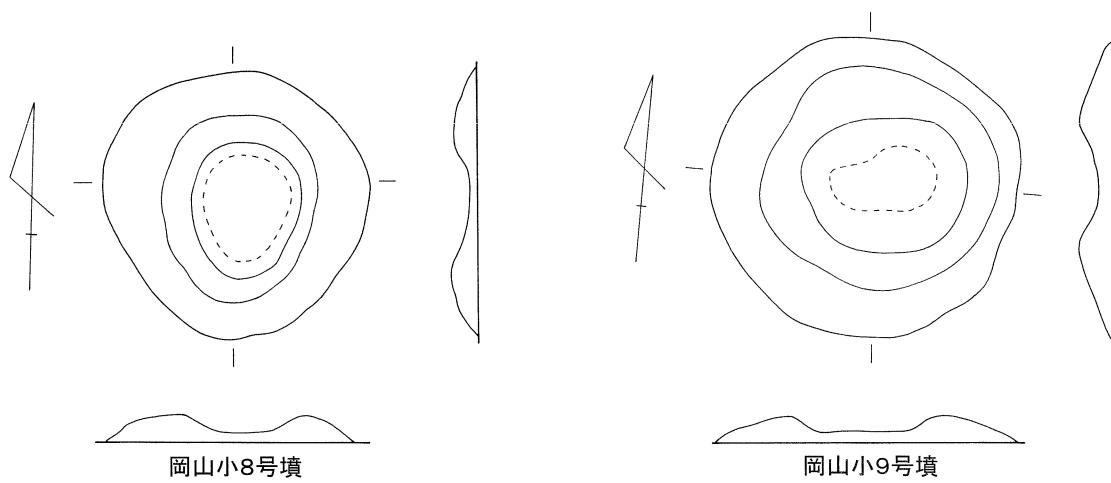
第30図 古高松地区後期古墳集成② (S=1/100)



岡山小5号墳

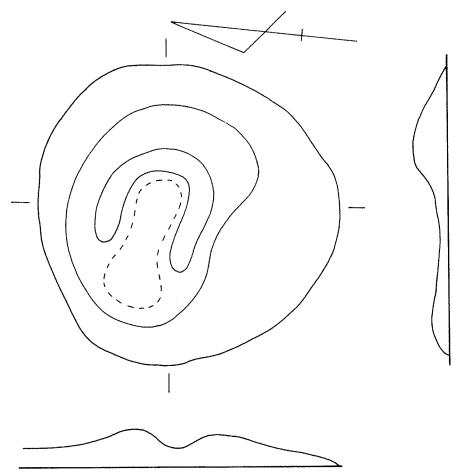


岡山小7号墳

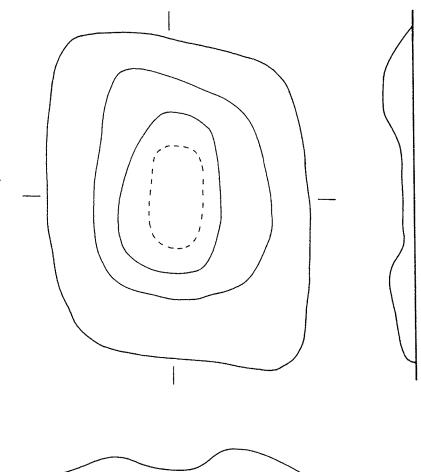


岡山小9号墳

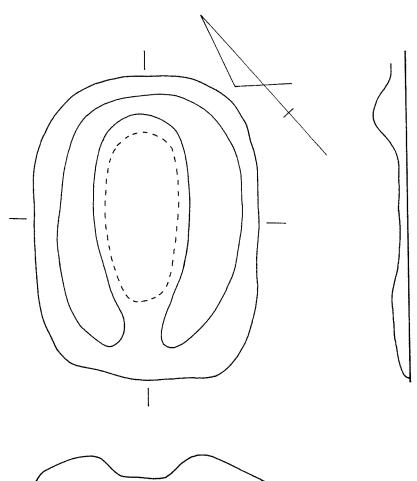
第31図 古高松地区後期古墳集成③ (S=1/100)



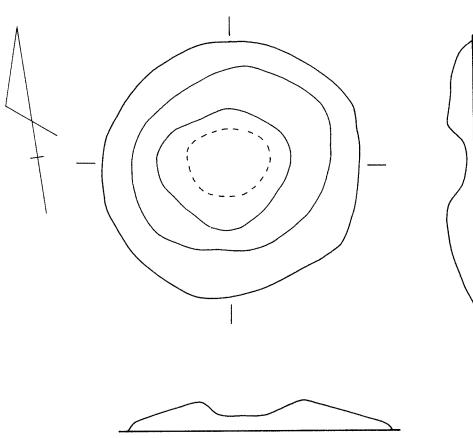
岡山小10号墳



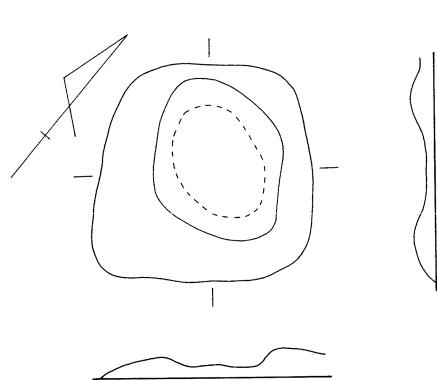
岡山小11号墳



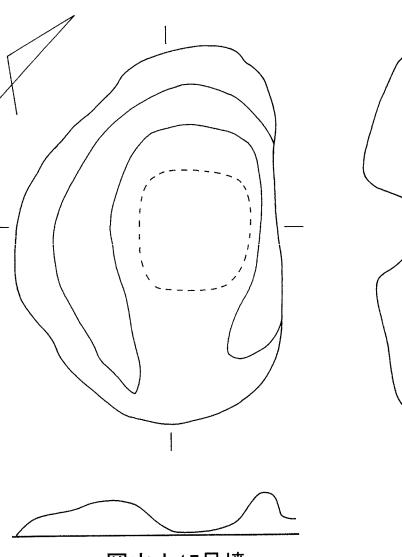
岡山小12号墳



岡山小13号墳

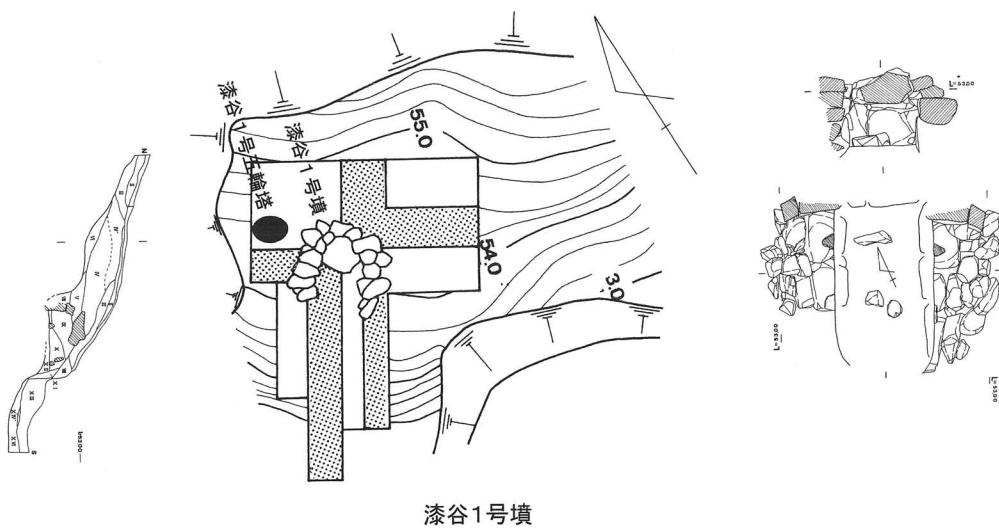


岡山小14号墳

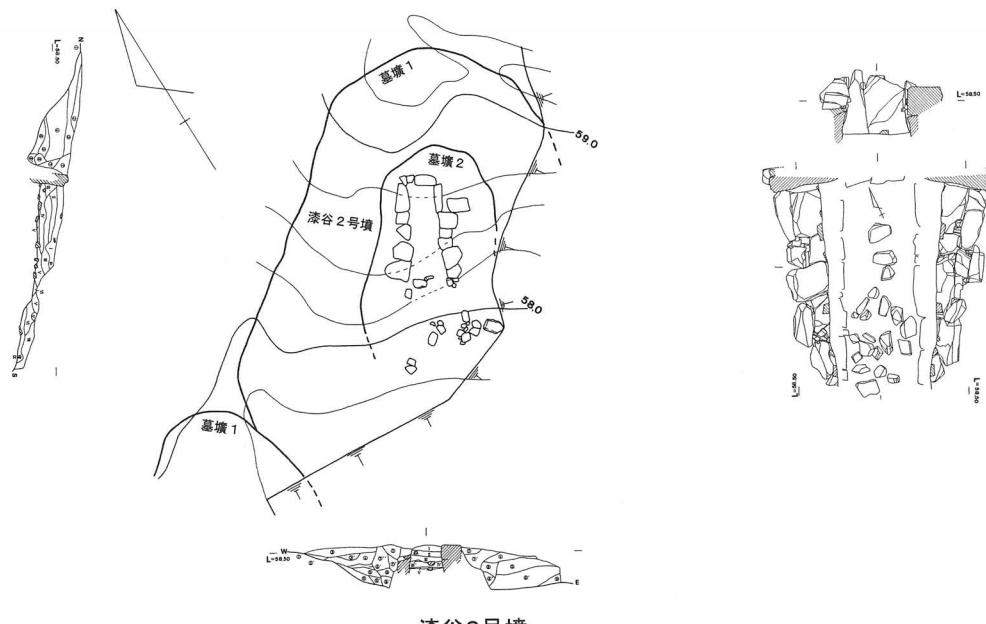


岡山小15号墳

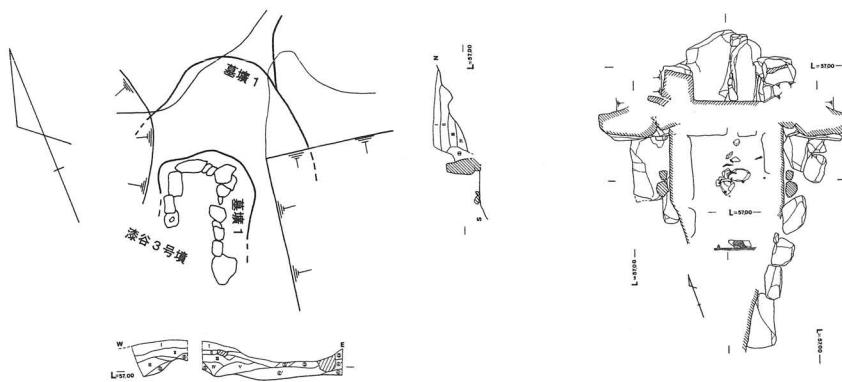
第32図 古高松地区後期古墳集成④ (S=1/100)



漆谷1号墳

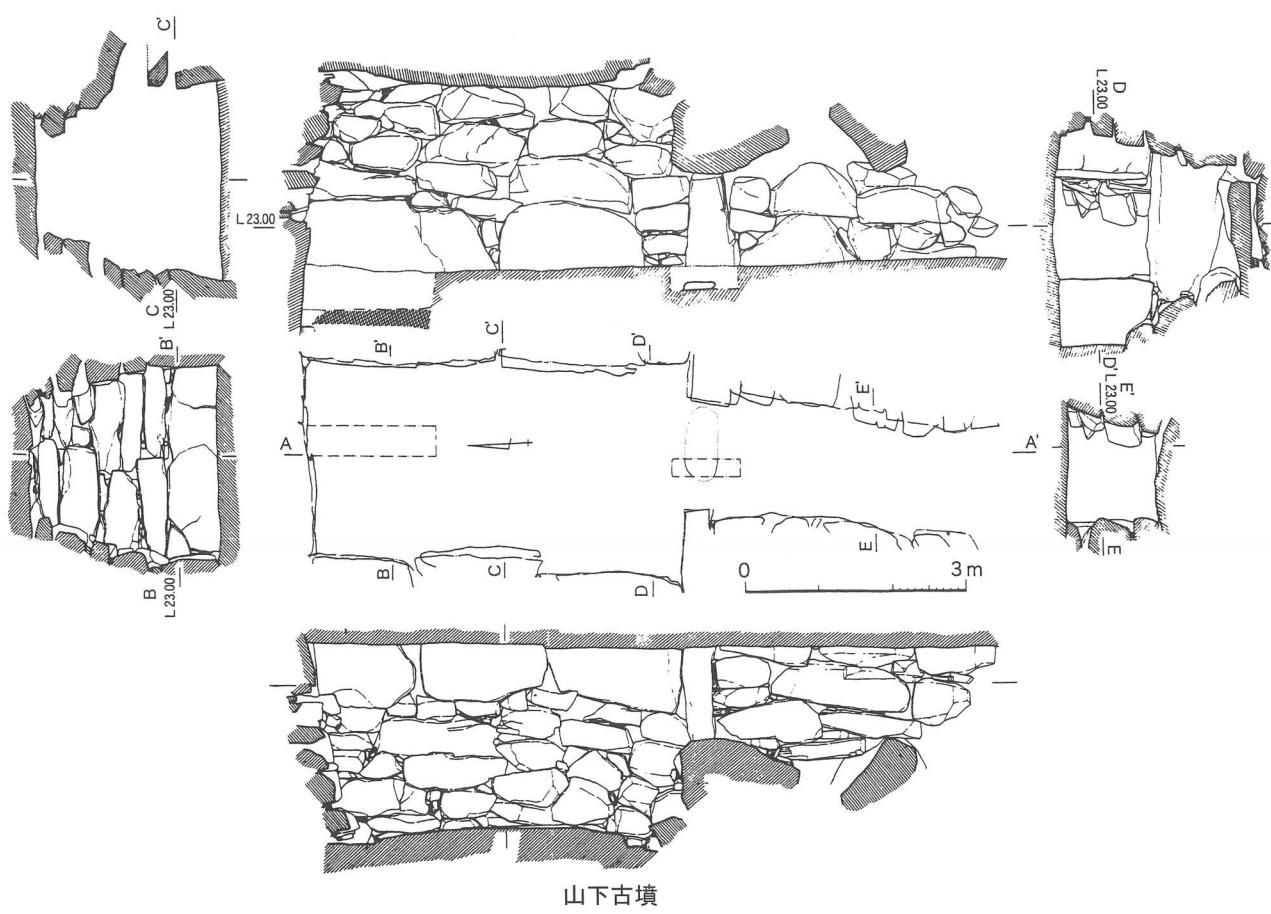


漆谷2号墳

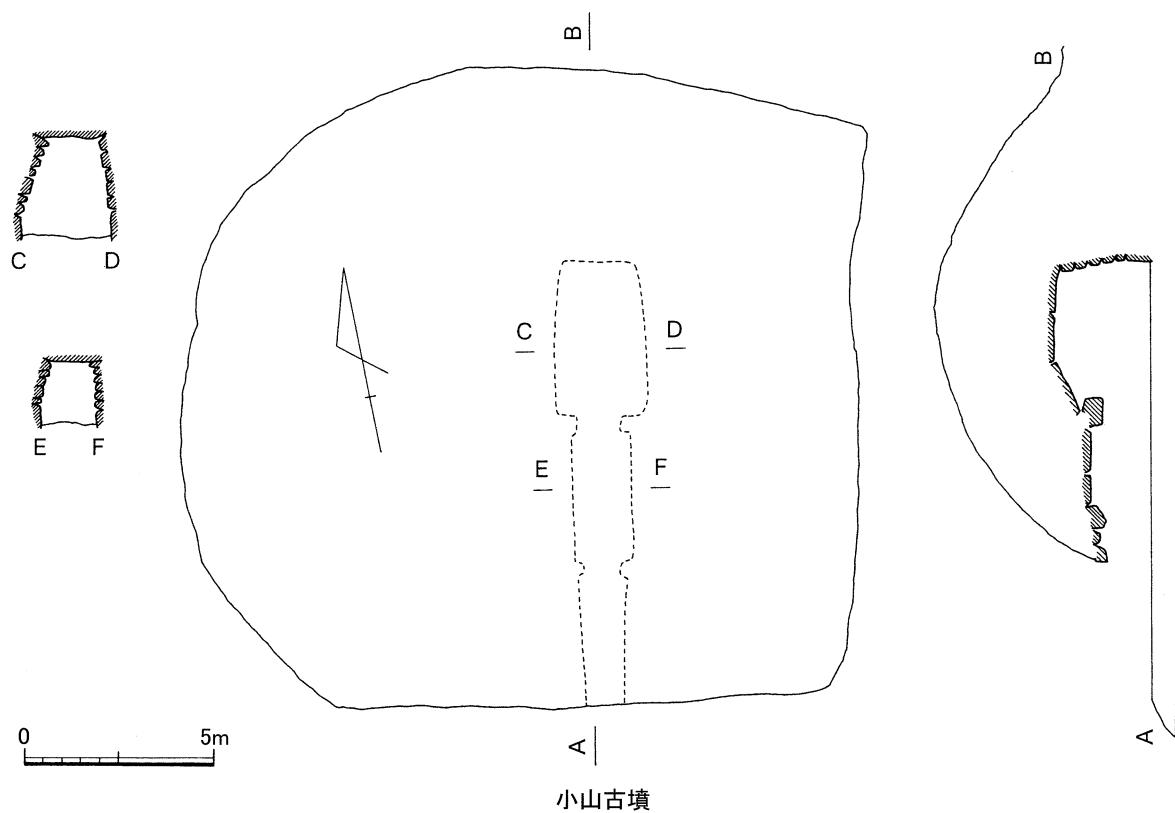


漆谷3号墳

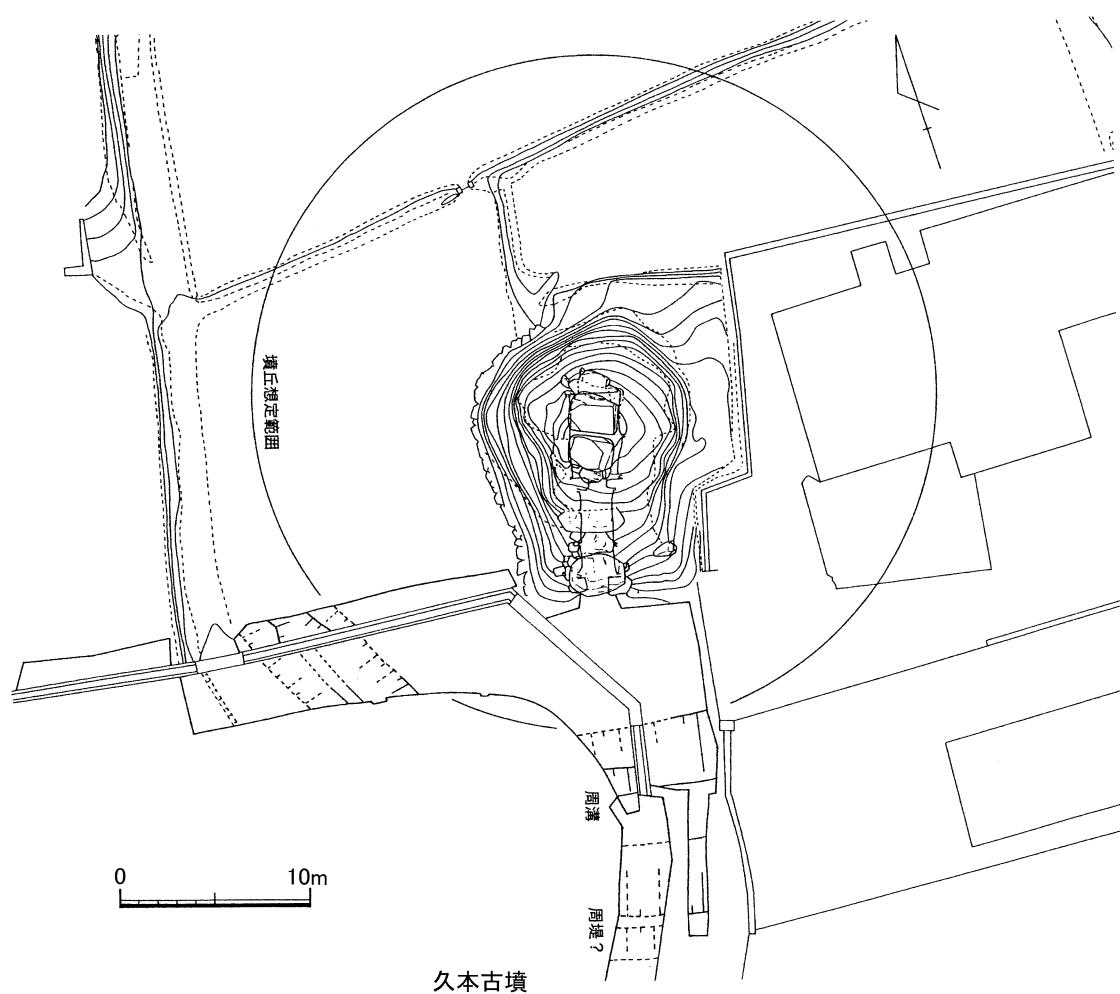
第33図 古高松地区後期古墳集成⑤ (S=1/100)



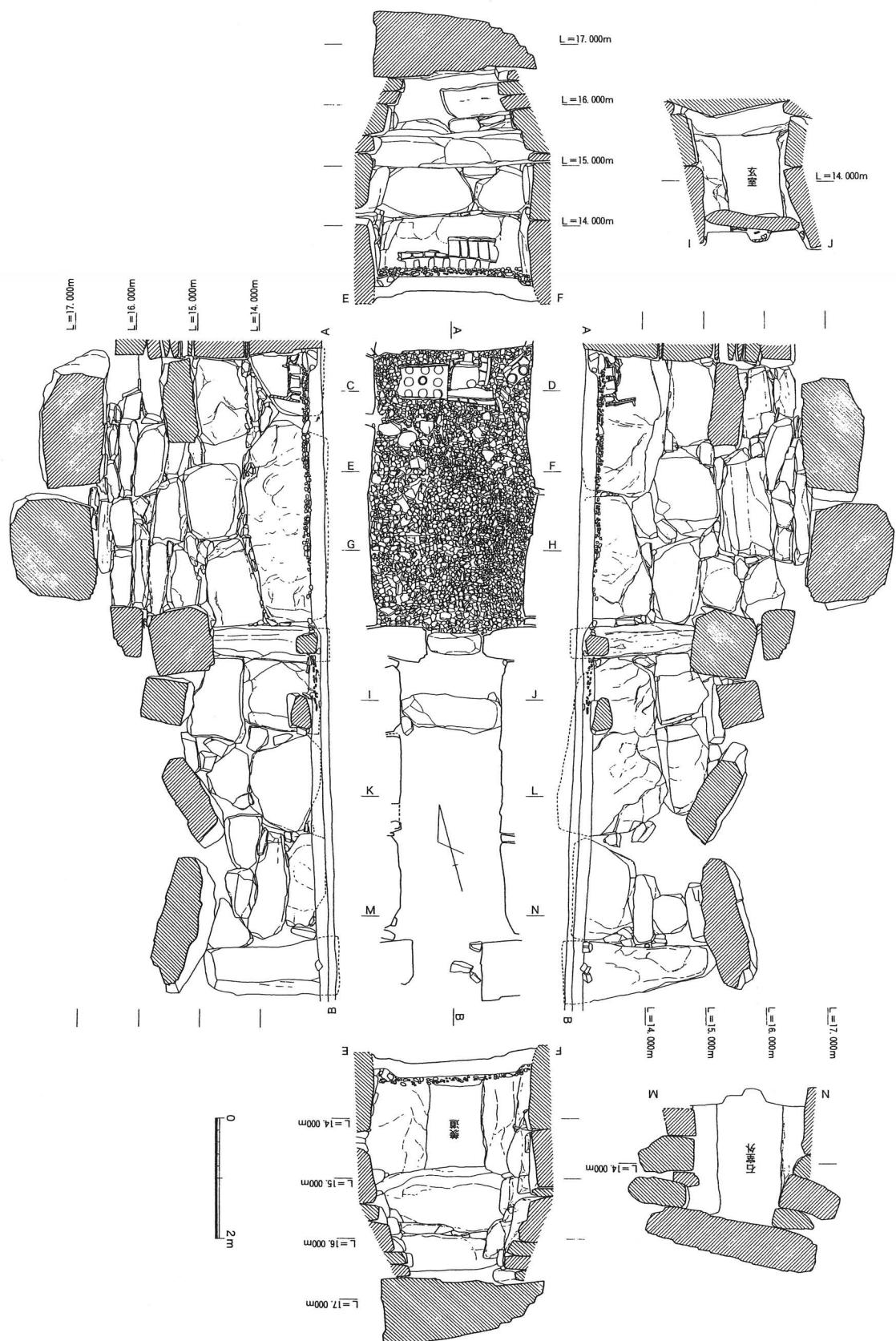
第34図 古高松地区後期古墳集成⑥



小山古墳



第35図 古高松地区後期古墳集成⑦



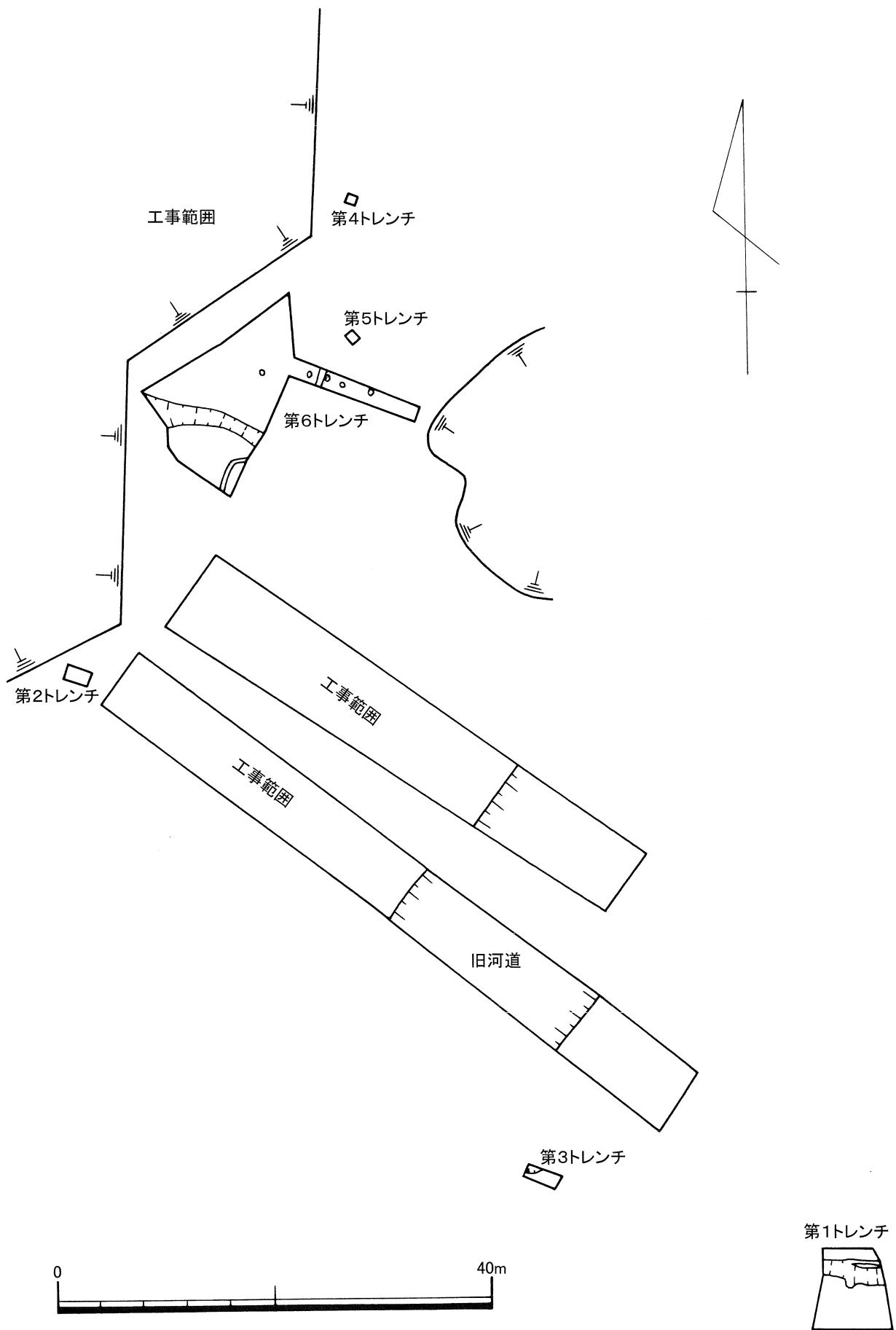
久本古墳石室実測図

第36図 古高松地区後期古墳集成⑧

# 久米池遺跡



## 第4章 久米池遺跡の調査成果

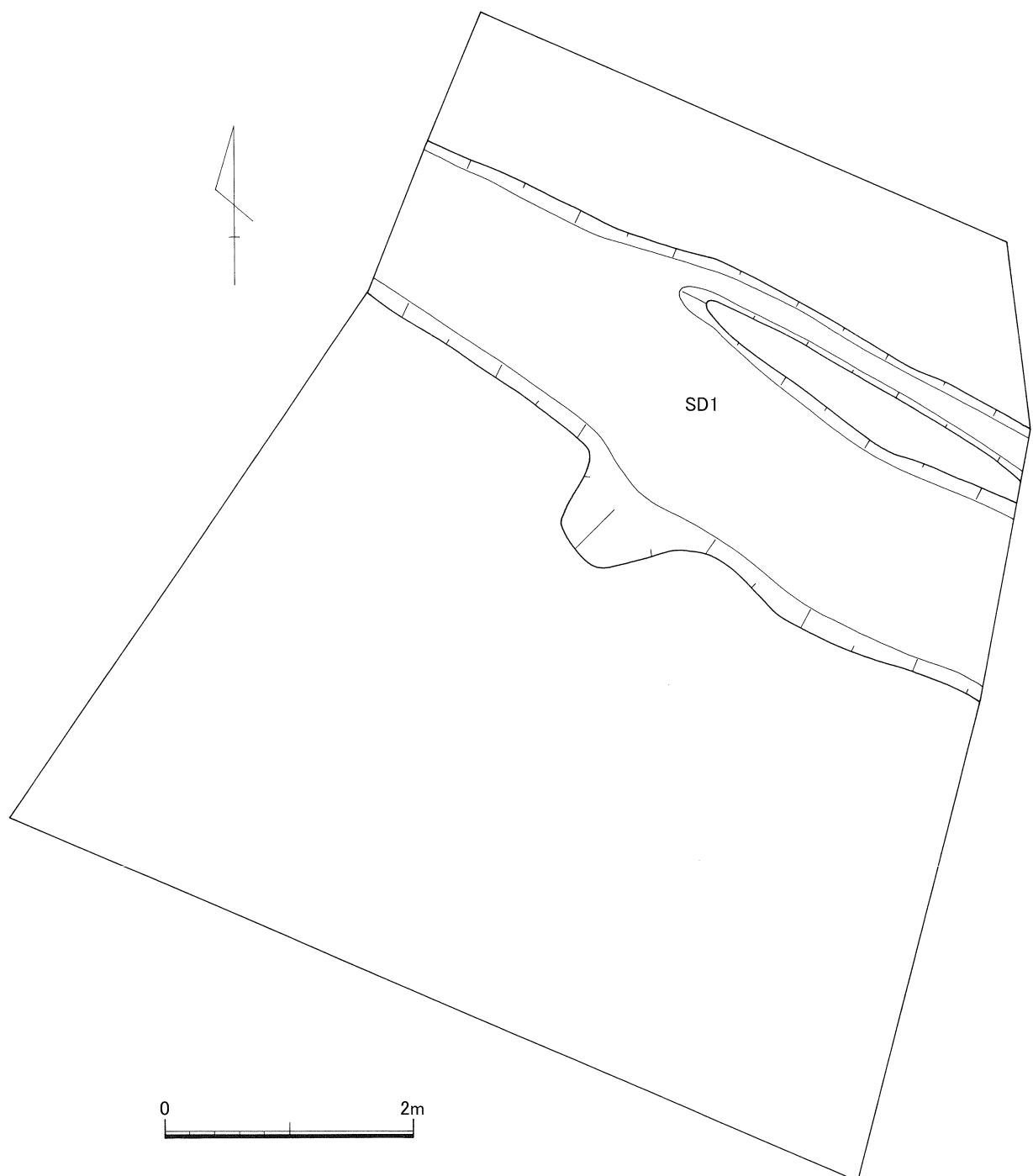


第37図 トレンチ配置図

## 第1節 調査地の概要と調査の方法

久米池遺跡はため池の中に所在する。今回の調査地は池の北東部分に該当する。調査地の標高は4m前後で、遺構面は標高3.5～4mである。調査地北東部は池の中でも微高地となっているが、これまでの度重なる浚渫工事による窪地が多数見られる。

今回の調査では、工事用の仮設道を設置しながら、任意にトレンチを設定し発掘調査を実施し、埋蔵文化財の所在しない範囲において工事を実施した。このため、最終的には6箇所でトレンチ調査を実施した。



第38図 第1トレンチ平面図

## 第2節 遺構

### (1) 第1トレンチ

調査地南端で設定したトレンチで、調査面積は約 50m<sup>2</sup>である。池底のヘドロ状の堆積層直下で地山の明黄褐色シルト～粘土層となっており、溝1条 (SD1) を検出した。

SD1はトレンチ北部で検出しており、幅 1.5m、深さ 10cm、検出長 5.8mを測る。埋土は黄灰色砂混粘質土層の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

トレンチ掘削時に第 46 図 1 の弥生土器の甕の体部片が出土した。外面には櫛原体による刺突文が見られる。

### (2) 第2トレンチ

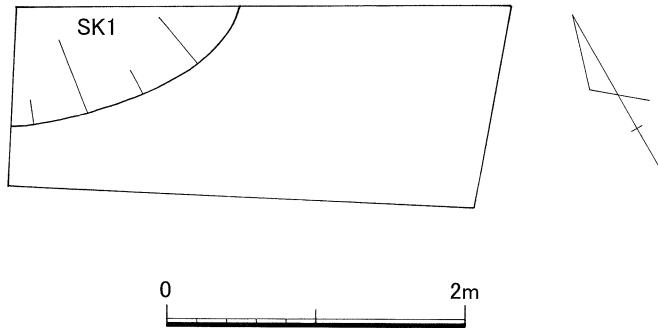
調査地西端で設定したトレンチで、調査面積は約 3m<sup>2</sup>である。池底のヘドロ状の堆積層直下で地山の明黄褐色シルト～粘土層となっており、遺構・遺物とも検出していない。

### (3) 第3トレンチ

第2トレンチは調査地西端で設定したトレンチで、調査面積は約 3m<sup>2</sup>である。池底のヘドロ状の堆積層直下で地山の明黄褐色シルト～粘土層となっており、土坑 1 基 (SK1) を検出した。

SK1はトレンチ北西端で検出しており、検出部分の長径 1.5m、短径 80cmを測る。埋土は黄灰色砂混粘質土層の単層である。機械掘削直後から湧水したため、遺構は掘削できおらず、詳細な時期は不明である。

トレンチ掘削時に第 46 図 2 の土師質土器の壺が出土した。



第39図 第3トレンチ平面図

### (4) 第4トレンチ

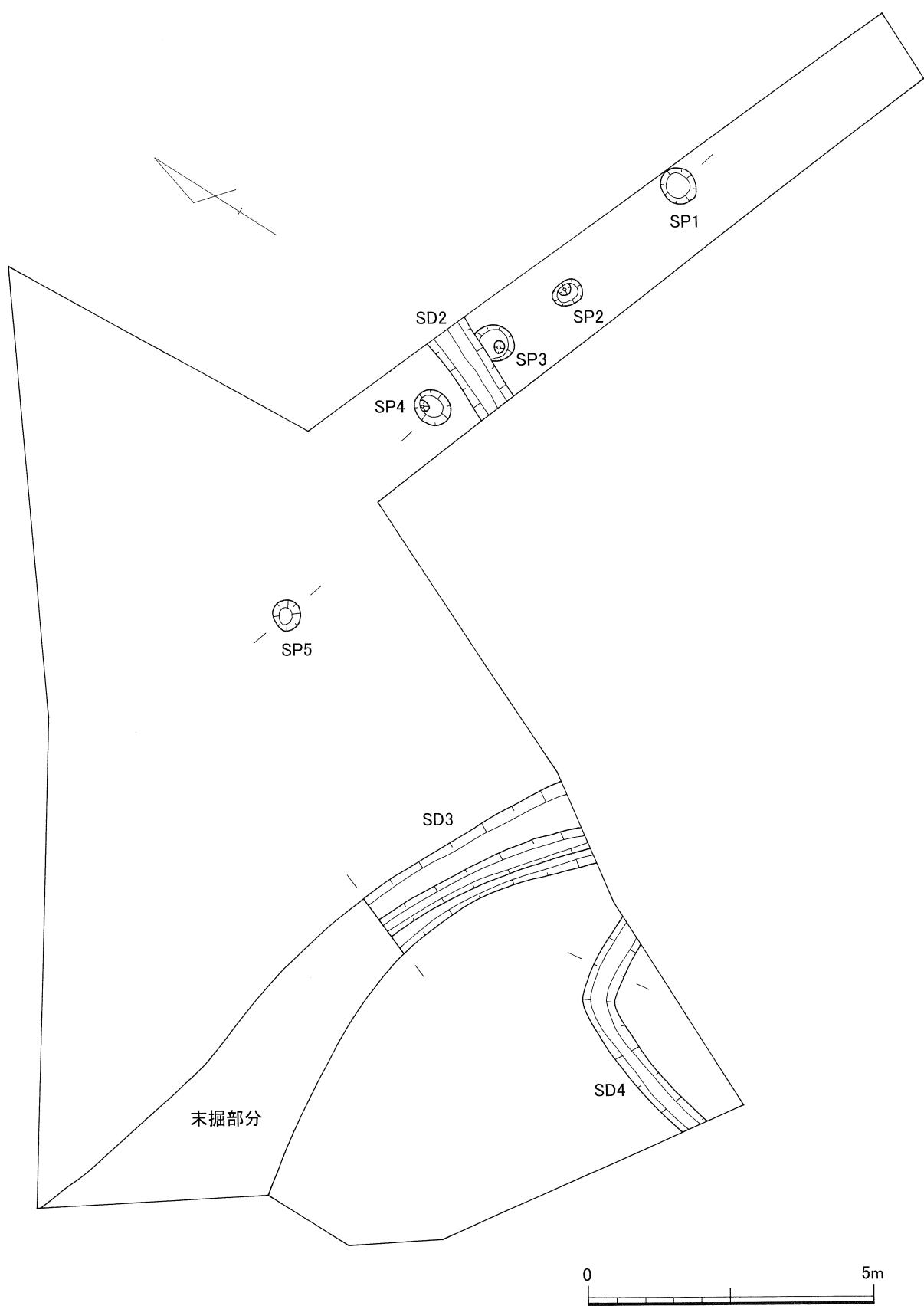
調査地北端で設定したトレンチで、調査面積は約 2m<sup>2</sup>である。池底より 50cm下層において地山の緑灰色粘土層となる。遺構は検出していないが、遺構面の上層には遺物包含層である黄灰色粘土層の堆積が認められ、須恵器や土師質土器小片が出土した。

### (5) 第5トレンチ

調査地北部で設定したトレンチで、調査面積は約 2m<sup>2</sup>である。ほぼ第4トレンチと同様な堆積を示す。遺構は検出していないが、黄灰色粘土層の遺物包含層から須恵器や土師質土器小片が出土した。

### (6) 第6トレンチ

調査地北部で設定したトレンチで、調査面積は約 140m<sup>2</sup>である。池底のヘドロ状堆積層以下の基本層序は 5 層に分層できた。第 1 層の緑黒色粘土層、第 2 層は浅黄色細砂層、第 3 層は青灰色粘土層、第 4 層は黄灰色粘土層で遺物包含層、第 5 層は緑灰色粘土層で地山ある。遺物包含層からは第 46 図 5 の土師質土器の甕、6 の須恵器の甕が出土した。第 5 層上面1面のみが遺構面となっており、柱穴・溝を検出した。遺構面の標高は約 3.9m である。



第40図 第6トレンチ平面図

### SA1 (第42図)

調査区東側拡張部分で検出した柱穴列である。SP1～SP4はほぼ一直線上に並ぶが、SP2・3間は1.55m、SP3・4間は1.7mと近似するのに対し、SP1・2間は2.7mと広い。また、SP1のみ埋土が異なることから、SP2～4で構成される柱穴列が想定できる。

SP2～4の平面形態は楕円形を呈し、長径50～60cm、短径40～55cm、深さ30～40cmである。断面形態は逆台形を呈し、埋土は掘方が黒色粘土、柱痕が褐灰色粘土である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

### SP1 (第42図)

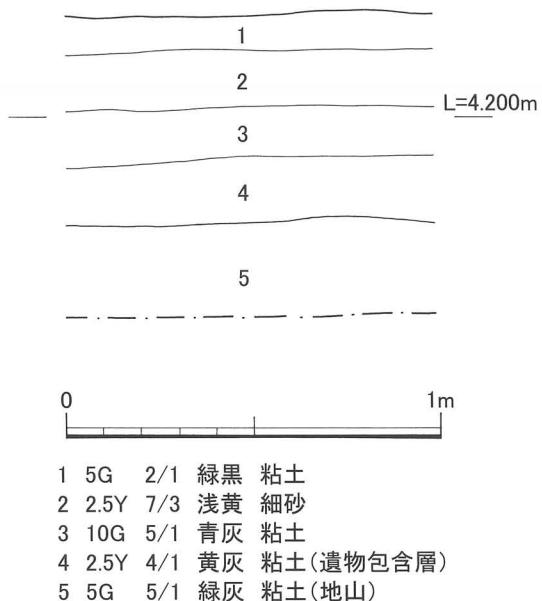
SA1の東延長部分で検出した柱穴である。平面形態は楕円形を呈し、長径60cm、短径55cm、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は黒色粘土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

### SP5 (第40・43図)

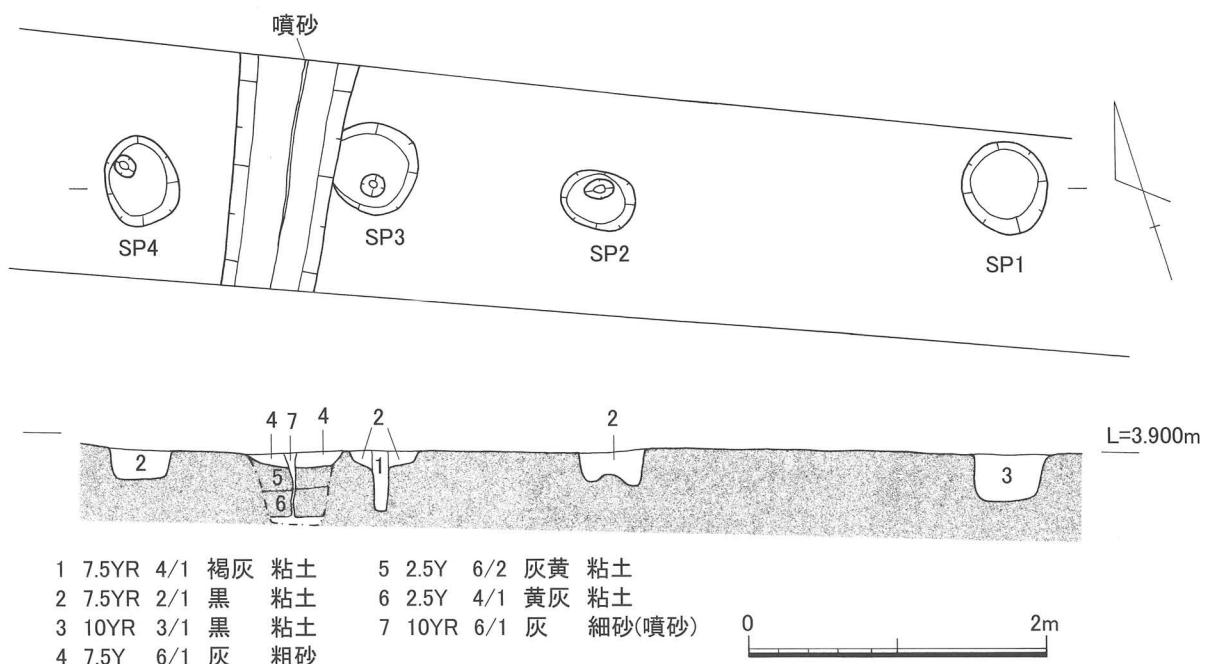
調査区中央部で検出した柱穴である。平面形態は楕円形を呈し、長径55cm、短径45cm、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は黒色粘土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

### SD2 (第42図)

調査区東側拡張部分で検出した溝である。幅76cm、深さ12cm、検出長1.55mを測る。断面形態は浅いU字を呈し、埋土は灰色粗砂の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、SP3を切っており、SA1より後出する。



第41図 第6トレンチ土層断面柱状図



第42図 SA1, SD2, 噴砂平・断面図

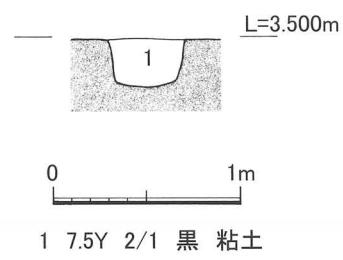
### SD3 (第 40・44・46 図)

調査区南半で検出した東西方向の溝である。溝幅は西側ほど広く、最大幅 2.4m、深さ 14cm、検出長 11.8mを測る。溝は南側が 1段深くなっている。埋土は黄灰色砂混粘土の単層である。

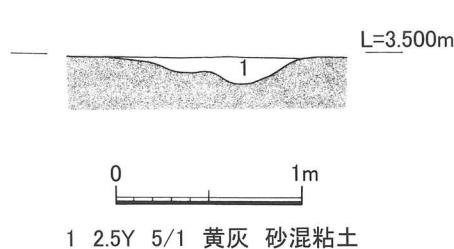
出土遺物は第 46 図に掲載した。3 は須恵器の壊である。4 は土師質土器の壊である。いずれも小片であるが、概ね古代の遺構と考えられる。

### SD4 (第 40・45 図)

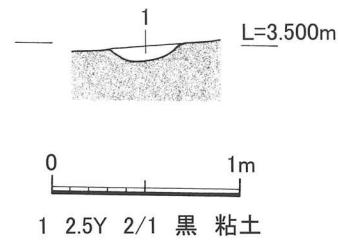
調査区の南端で検出した溝である。L字に屈曲しており、幅 38cm、深さ 10cm、検出長 4.8mを測る。断面形態はU字を呈し、埋土は黒色粘土の単層である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。



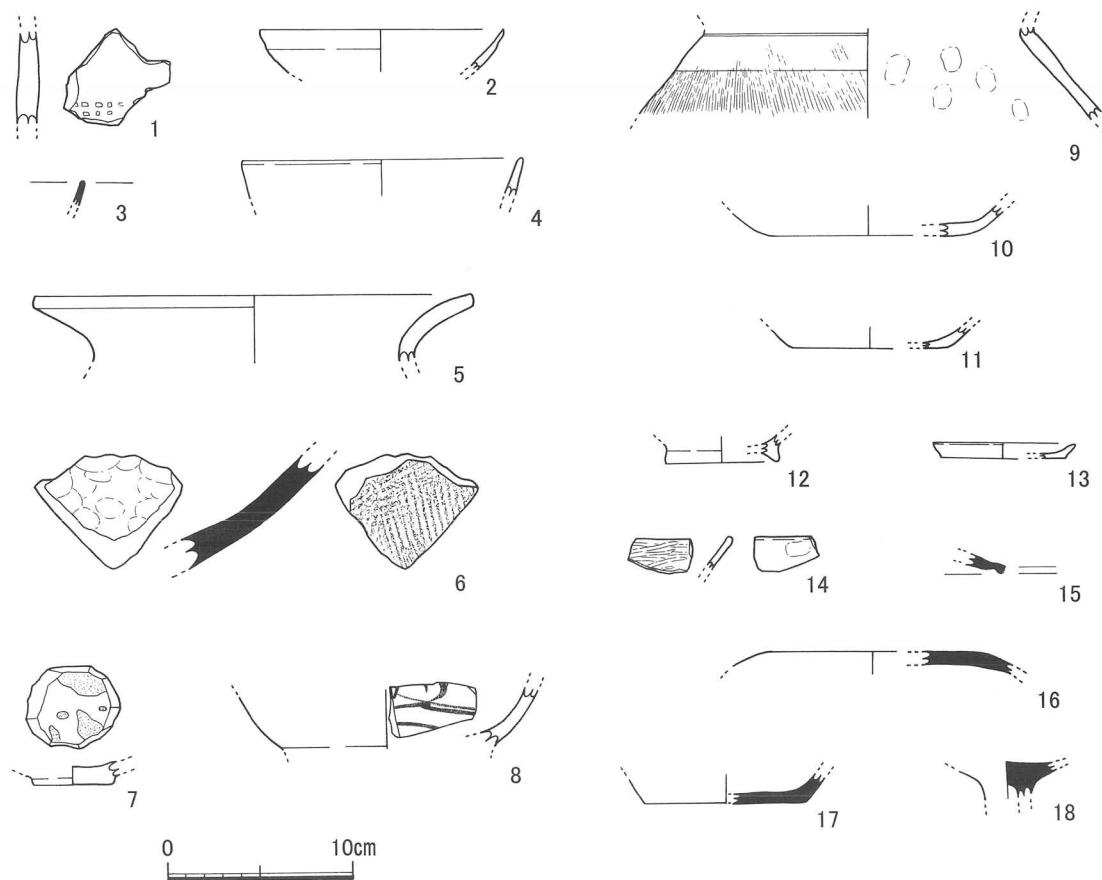
第43図 SP5断面図



第44図 SD3断面図



第45図 SD4断面図



第46図 調査地周辺出土遺物実測図

### 噴砂（第42図）

SD2を切った状態で検出した地震痕跡で、幅2cm、検出長1.55mを測る。遺構面の42cm下層に所在する灰色細砂層が、噴き上がったものである。SD2の時期が不明であるが、上層の遺物包含層には達しておらず、久米池築造前と考えられることから、近世前半以前の地震と考えられる。

### 表採遺物（第46図）

第6トレンチ周辺では、既存の粘土採取により、遺物が多量に散布していた。第46図7～18が図示できたものである。7は産地不明陶器の皿である。無釉の高台は糸切りで、見込みに砂目が残る。8は龍泉窯系青磁碗である。9は土師器の甕である。外面タテハケ、内面指頭圧である。10・11は土師器の壺である。12は土師器の碗である。13は土師器の皿である。14は瓦器碗である。内面のミガキは入念である。15・16は須恵器の蓋である。17は須恵器の壺である。18は須恵器の高杯である。

### （7）工事箇所における立会調査

粘土採取工事は、遺構の希薄な第1トレンチと第2トレンチの間で実施したが、この工事範囲の中で幅約20mの旧河道を検出した。遺物は含まれておらず、時期は不明である。また、第4・5トレンチ及び第6トレンチの東半にかけて包含層が認められることから、これらトレンチの北西側において工事を実施した。この範囲では遺構・遺物は検出していない。

### （8）平成8年度工事範囲

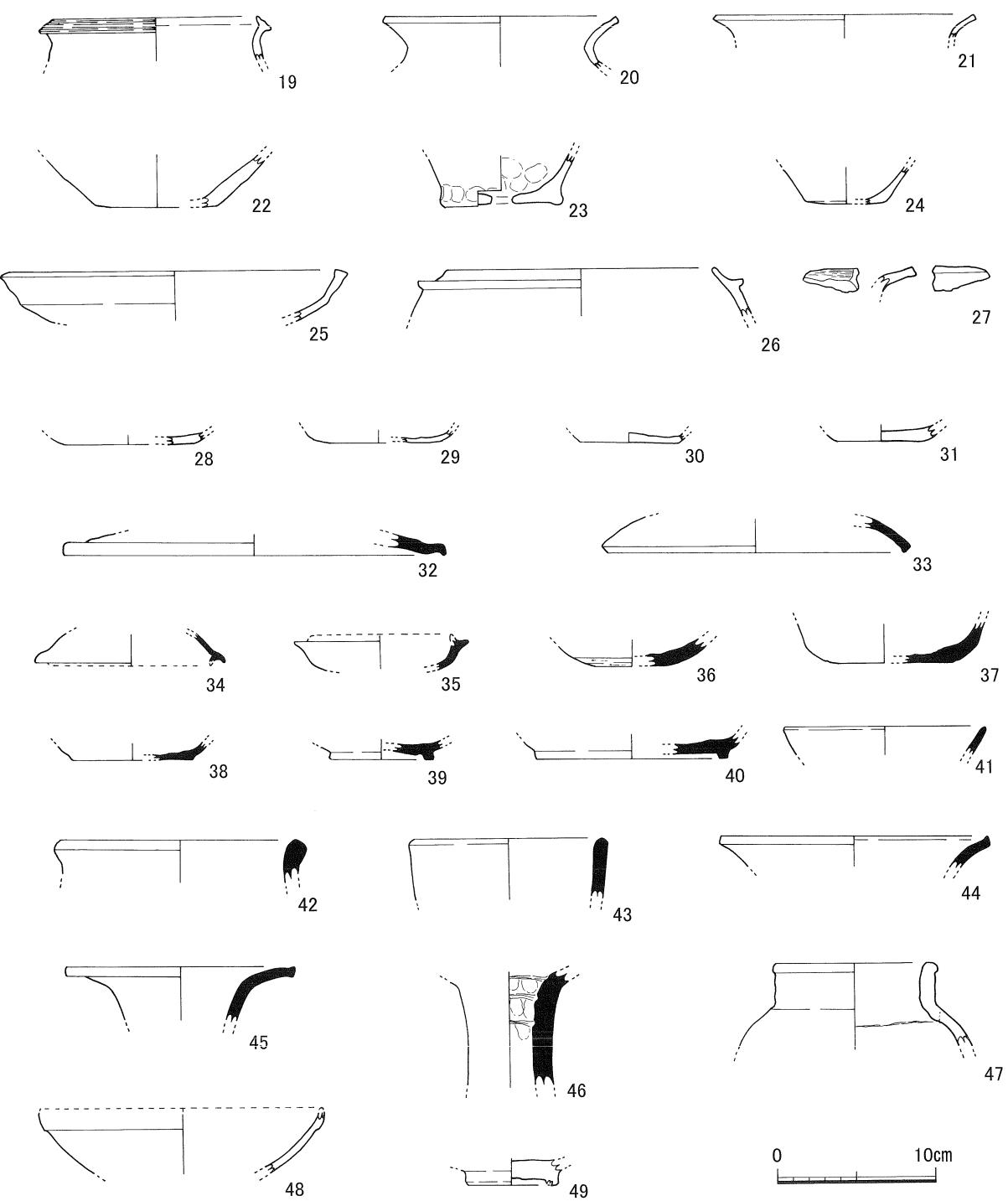
平成8年度に池浚渫工事を行った際に、末光甲正氏により遺構の観察、遺物の採集が行われている。工事範囲は久米池の北東端で、今回の調査地の北側にあたる。第47図に当時の略測図を掲載した。工事によって削平された池底において総柱の掘立柱建物跡、溝、土坑等が確認されている。また、この工事範囲内において表採された遺物を第48図に掲載した。19～21は弥生土器の甕である。19は口縁部を上下に拡張させ、凹線2条を施す。22～24は弥生土器の底部である。23には焼成後の穿孔が見られる。25は弥生土器の高杯である。26は土師質土器の鍋である。27は土師質土器の甕である。28・29は土師器の壺である。30は白磁の皿である。31は土師器の壺である。32～34は須恵器の蓋である。35～40は須恵器の壺である。41は須恵器の碗である。42は須恵器の甕である。43は須恵器の鉢である。44・45は須恵器の壺である。46は須恵器の高杯である。47は備前焼の壺である。48は白磁の碗である。49は龍泉窯系青磁碗である。

### （9）久米池内表採遺物

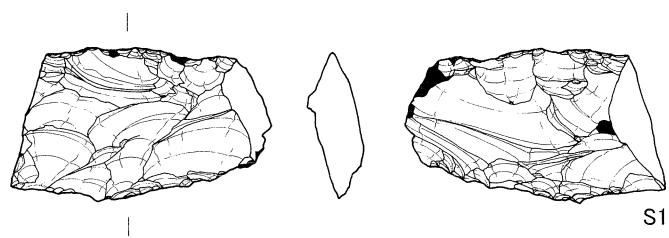
平成7年度以前にも末光甲正氏により久米池内で表採が行われており、第49図に掲載した。ただし、これらの資料については、詳細な採集地は不明である。S1はサヌカイト製の石庖丁である。50は須恵器の蓋である。51は須恵器の甕である。52は土師器の碗である。53は土師器の壺である。54～56は土師質土器の鍋である。54は内外面ともハケを施している。55・56は僅かに羽がつくもので、外面指頭圧、内面板ナデである。57～60は土師質土器の脚部である。61は土師質土器の把手である。62は備前焼の甕である。63は備前焼の壺である。64・65は備前焼の擂鉢である。



第47図 平成8年度工事範囲及び検出遺構模式図 (S=1/2,500)



第48図 平成8年度表採遺物実測図



0 5cm



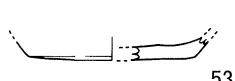
50



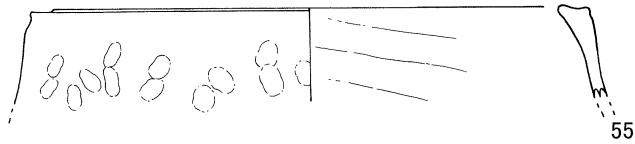
51



52



53



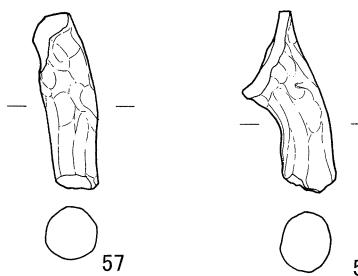
55



54

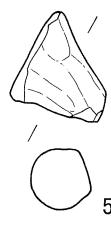


56



57

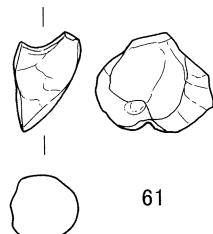
58



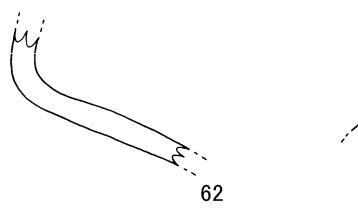
59



60



61

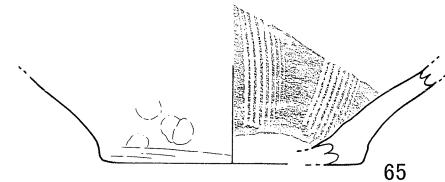


62

63



64



65

0 10cm

第49図 平成7年度以前久米池内表採遺物実測図

### 第3節 まとめ

#### (1) 久米池遺跡の概要について

久米池遺跡については、池の中という立地条件からこれまで発掘調査が行われておらず、実態が不明な遺跡であった。久米池内の表採資料から、久米池東岸一体が遺跡の範囲として認識されていたが、今回の発掘調査により若干の遺構・遺物が検出され、池の北東部の状況を知ることができた。今回の調査では、北東から南西に流れる旧河道を検出しており、この両岸に微高地が認められ、それぞれに遺構・遺物を検出した。特に旧河道北側の微高地では、遺物包含層が確認され、柱穴列を検出しており、集落が営まれていたことが判明した。なお、明確な遺構の時期は不明であるが、出土遺物及び表採遺物から弥生時代～中世までの遺跡と考えられ、弥生時代中期、弥生時代後期前半、7～8世紀、13～15世紀の4時期に細別できる。また、平成8年度の工事に際し検出した総柱の掘立柱建物跡についても、旧河道北側の微高地に立地する。同地では周辺で7～8世紀の遺物が表採されていることから、7～8世紀の集落域と想定できる。

さらに、調査中の平成15年1月20日に、県営ため池等整備事業に伴い、久米池の東岸部分において香川県教育委員会による立会調査が行われている。この調査によると久米池の南東部では埋蔵文化財包蔵地は確認されていない（香川県教育委員会2003）。久米池東岸部分は、池内でも最も高所に位置することから、度重なる浚渫が行われており、久米池南東部は既に遺跡が消滅してしまっている可能性もある。

久米池の正確な範囲・時期・性格等を知るにはまだまだ資料不足である。今後の周辺の調査を待ちたい。

#### (2) 久米寺について

久米寺の由来については『久米寺縁起』がある。上下2巻に分かれ、上巻は同寺の縁起、下巻は同寺の管轄にかかる久米八幡宮・諏訪明神・天満宮・方丈山弁天祠等の由来を記したものである。これによると、天平11（739）年に「行基菩薩 於此彫刻十一面觀音 安於方丈山之峯 当於其東北 安置無量寿仏 建立僧藍」とあり、行基が十一面觀音を彫刻し、方丈山の峰に安置し、その東北に無量寿仏を安置し、伽藍僧房を建てたとされている。その後、弘仁元（810）年に「大師任神語 中興伽藍 改久米寺」とあり、空海によって伽藍の復興が行われている。伽藍の規模については、下巻に詳しく、「昔本山郷久米山方十五町之中 有十余宇之堂塔神祠 三十余之僧院」とあり、方15町の中に10余りの堂塔・宮社と30余りの僧院があったとされている。しかし、「然永正年中之於兵乱 多焼失南海坊室 其時当山之堂塔 宮祠同亡失 而本尊十一面觀音而已 移於春日之郷春朝寺」とあり、永正年中（1504～21年）の兵乱で焼失し、春日郷の春朝寺に移したとされている。「龍雲軒源英君 於大悲山久米寺春朝寺堂元之西 貞享元年新建立觀音堂薬師堂並僧院」とあり、貞享元（1684）年に松平頼重により再興されている。その後、明治維新の神仏混淆廃止により廃寺になるが、明治33年に春日町で再興されている（小竹1977）。

『久米寺縁起』は、江戸中期頃の作と言われており（小竹1977）、創建年代や規模については誇張がある可能性もあるが、久米池周辺に「寺角」「ご門堂」といった地名が残ることから、久米寺が久米池周辺に実在した可能性は否定できない。

そこで行基が十一面觀音を安置したとする方丈山の位置から、久米寺の所在地を考察してみたい。現在は、採土によって消滅してしまっているが、久米山の東側に傍生（ぼうじょう）山と呼ばれる山がかつて存在した。読みが方丈（ほうじょう）山に近いことから、この山が方丈山である可能性を考えてみた。しかし、この東北に伽藍を配したとすると、久米山や「久米」の地名が残る地域から離れた位置となり、やや位置関係がおかしい。『久米寺縁起』の下巻に「往古於諏訪山之南 方丈山之西有池」の記述がある。諏訪山は現在諏訪神社が所在する丘陵頂部を指すと考えられ、記述の位置関係からすると、方丈山は諏訪山の南東側ということになる。このため、方丈山は、現在の久米山ないしは久米山から諏訪神社へ延びる尾根の頂部と考えられる。この尾根頂部の東北側が『久米寺縁起』に記載された伽藍の中心と考えられ、概ね現在の久米神社付近と考えられる。方15町という伽藍範囲から考えると久米池内は伽藍内であった可能性が考えられる。なお、永正年中に久米寺は春日郷の春朝寺に再興されているが、その春朝寺について「春朝寺者 久米寺之坊舍之中也」という記載が見られる。このことからも、広範囲にわたって堂塔・僧院が営まれていたことがうかがえる。ただし、これらの範囲がすべて久米寺の寺域であったとは考えにくく、方15町の範囲に久米寺に付随する寺社が点在していたことを意味するものと考えられる。



第50図 久米池・久米寺関係箇所位置図 (S=1/10,000)



第51図 川南・西遺跡検出屋敷地平面図

次に、これまでの周辺の調査例と久米寺との関連性を考えてみたい。平成8年度の浚渫工事で発見された総柱建物は、詳細な時期は不明であるが周辺表採の遺物から7～8世紀と推定される。『久米寺縁起』によると創建～再興年代に該当するが、周辺で瓦等は表採されておらず、久米寺との関係は不明である。

一方、久米山から諏訪神社へ延びる尾根頂部の西側斜面部において、平安時代の平瓦が出土している。同地は先述したとおり、行基が十一面観音を安置したとする方丈山の西側斜面に位置することから、久米寺との関連が考えられる。

### (3) 久米池の築造時期について

今回の調査地は久米池の中であり、検出した遺構・遺物から久米池の築造時期を考えたい。久米池についての最も古い記録としては、『翁嫗夜話』がある。「貞享三年八月所定也」として「久米陂」とあり、少なくとも貞享3(1686)年には、久米池が所在していたことがうかがえる。地元では、天文年間に仁木徳萬小左衛門によって築造されたとする説と、寛永年間に西嶋八兵衛により築造された溜池の1つとする説がある。

仁木徳萬小左衛門は、私財をなげうって久米池を築造した人とされている。仁木徳萬小左衛門は、『翁嫗夜話』において「仁木徳万居春日」と記載があり、さらに『全讀史』においても「仁木徳万屋敷 春日村にあり 仁木作十郎、并に徳万小左衛門と云ふ者の奮迹なり」とある。しかしながら、その経歴については不明である。春日町に墓碑があり、屋敷跡と伝えられる場所も残っている(小竹1977)。なお、屋敷跡と伝えられる場所の南側隣接地は川南・西遺跡にあたり、16世紀～17世紀の屋敷跡が検出されている(末光1999)。高松平野の同時期の集落遺跡である東山崎・水田遺跡(森下1992)や西ハゼ土居遺跡(大嶋2005)においては、溝で区画された屋敷地が集合し、屋敷地群を構成する傾向がうかがえる。このため、川南西遺跡検出の屋敷地と仁木徳萬小左衛門の屋敷地についても同様に屋敷地群を構成していた可能性が考えられ、16世紀～17世紀前半頃の人物と推定できる。

一方、西嶋八兵衛は、生駒藩第4代生駒高俊の外祖父にあたる伊勢津藩主藤堂高虎の家臣である。元和8(1622)年3月に生駒藩の奉行となっており、この時はすぐに帰藩している。その後、旱魃により寛永4(1627)年8月から寛永16(1639)年3月まで奉行職を務めていたことが知られている(木原1989)。その間に満濃池の改築を始め、数多くの溜池を築造・改築を行っており、久米池もその1つであると言われている。なお、西嶋八兵衛の久米池築造に際し、仁木徳萬小左衛門が工事に協力したという両者協力説もある。先述のとおり、屋敷地の存続期間は16世紀～17世紀前半と推定でき、両者協力説も否定できない。

さらに、正保2(1645)年の大干ばつを機に、高松藩により正保年間に再び多くのため池が築造・改築されている(佐戸1989)。地元の言い伝えとは異なるが、文献に記載された貞享3年以前ということで考えれば、正保年間に築造されたとも考えられる。

今回の調査及びこれまでの表採資料から、久米池の東岸部分については15世紀頃までは集落域であったと考えられる。さらに17世紀に下ると考えられる陶器の皿(第46図7)が表採されている。1点のみであるため混入の可能性もあり、早急な結論は出せないが、久米池東岸一体が久米池となった時期が17世紀まで下ることを示唆するものである。久米池内の遺物と川南・西遺跡の発掘成果は、西嶋八兵衛・仁木徳萬小左衛門の両者協力説を補強するものである。

なお、久米池の築造時期については、原田氏の研究がある(原田2000)。原田氏は、新田町七面大明神社に掲額されている「新田八景」と題する和歌の風景等から考察し、西嶋八兵衛説を否定し、仁木徳萬小左衛門との深い関わりを指摘しながらも、さらに古い時期に久米池の基になる池の築造を推測している。久米池東岸一体は、池内で最も標高が高いことから、久米池の改築により池の中となった可能性も考えられる。原田氏の説くように、久米池が相当古くから所在し、西嶋八兵衛や仁木徳萬小左衛門によって改築されたことも十分考えられる。

### 参考文献

- 木原溥幸 1989「生駒藩の政治と御家騒動」『香川県史3 通史編 近世I』香川県  
佐戸政直 1989「ため池と水利」『香川県史3 通史編 近世I』香川県  
小竹一郎ほか 1977『古高松郷土誌』古高松郷土誌編集委員会  
末光甲正ほか 1999『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊 川南・西遺跡』高松市教育委員会  
香川県教育委員会 2003『香川県埋蔵文化財調査年報 平成14年度』香川県教育委員会

原田遼 2000「久米池」『讃岐のため池誌』讃岐のため池誌編さん委員会

大嶋和則 2005『都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊 西ハゼ土居遺跡』高松市教育委員会

森下友子ほか 1992『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 東山崎・水田遺跡』香川県教育委員会

## 『讚州久米寺縁起之卷上』

當寺者 人皇四十五代聖武天皇天平十一年 行基菩薩來當山者 出向異人曰 賑是八幡大神也 在娑婆世界者 變十一面觀音 在西方淨刹者 称無量壽 於此山者 現白蛇而云妙音 此地仏法弘伝靈場 与汝而不見

行基菩薩 於此彫刻十一面觀音 安於方丈山之峯 當於其東北 安置無量壽仏 建立僧藍 云極樂谷 之妙音坊殊一山之本尊 大慈大悲十一面觀音自在薩埵 故号大悲山 其後嵯峨天皇弘仁元年 於當山或夜放光 現阿彌陀如來 弘法大師拜之 淩晨至光処 実靈區而有八幡宮（今稱久米八幡宮）於其東方有櫻花翻春風 於此有影向天女 告曰 此地昔行基大士表妙音觀音之三十三身而 建立三十有余之僧坊所也 汝於此地弘密教 可移大和久米寺 我此山之守護神而住當山乾方月說尊也 言已不見（今于春日鄉奉崇四所大神此神也）

大師任神語 中興伽藍 改久米寺 弥弘伝密教而魏魏堂堂梵刹也 所謂方丈山者 有久米寺之方丈所極樂谷者 現妙音所 桜谷者 天女有影向所 然永正年中之於兵亂 多燒失南海坊室 其時當山之堂塔 宮祠同亡失 而本尊十一面觀音而已 移於春日之鄉春朝寺 今也呼本山鄉大悲山久米寺之古跡 云久米山（於此除久米山之伝 出下卷）春日鄉（本山鄉之中也）春朝寺者 久米寺之坊舍之中也 昔久米仙人 鑄丈六藥師金像 為和州久米寺之本尊 故大師表久米寺之本尊 於此安置行基自作之石藥師所也（於今云堂之元）然永正年中於兵亂同燒矣 而殘本尊十一面觀音（行基大士之作） 藥師（二軀 行基・慈覺之作） 地藏（行基之作） 文殊（連慶之作） 十王（小野篁作 今也在日內山）等 人民於春朝寺旧跡 建草庵而安之

龍雲軒源英君 於大悲山久米寺春朝寺堂元之西 貞享元年新建立觀音堂藥師堂並僧院 仰春日大神之神德 称藤原山利生院 寺号者復久米寺古刹 以付山門寺門之兩祖山王院智証大師末流 則為春日明神之別當者也

## 『讚州久米寺縁起之卷下』

伝曰 昔本山鄉久米山方十五町之中 有十余宇之堂塔神祠 三十余之僧院 物換星移 惜哉名觀而已 本山鄉八幡宮者 天平十一年 於當山有出現 其後弘仁元年 移和州久米寺之号 自其奉稱久米八幡宮矣

東鏡嘉禎二年七月二十五日下文曰

石清水領讚岐國本山之庄 被止足立多季之助遠親知行地頭職 一円付宮寺 所謂本山鄉者 東本山（今云公文・久本・熊前） 西本山（於今云伝元山） 本鄉也（今云山崎・水田・春日） 称山崎者（貞觀元年 於城州山崎行教有靈夢 奏聞之 以於男山 奉勸請八幡） 移石清水起首之地名 自是以來 奉崇山崎久米八幡宮 轉和名集（抄） 所山田郡十二鄉之其一 而一鄉一社之氏神也 八幡託宣 我名曰大自在王菩薩 神皇正統記云 応神天皇 本名譽田天皇 又号曰胎中天皇 縁起曰 筑前管崎有人幡宮 昔白幡四 赤幡四 自天降於此 故名八幡 植松而為標 至于今猶在 久米山諏訪明神者 大己貴神第二之子 健御名方命也 勸請不知年曆 自昔登於此山 祈請雨者 必有靈雨云

本山鄉天滿宮者 一条院正曆年中 奉勸請神也 寛文年中 自東本山移於久米山（八幡境内） 仁和年中 当国之大主故國民一等 於一鄉 建立一社而祭之

方丈山之神者 妙音天而 自古示現白蛇 久米山之主也 今称山神

伝曰 往古於諏訪山之南 方丈山之西有池 称蛇淵（亦名・南浦池） 人民年年開之 今也旧跡而已 昔（當天正之前云） 於當鄉 有後藤市太夫広連者 或時遊於久米山 女來而導広連 到于其淵 女即變白蛇 広連取弓矢 欲射白蛇之左眼 広連俄狂悶絕 其女即弁天而變化白蛇 久米山之主也 広連使不知之以取弓矢 忽蒙罰死（今于村中 有云広連墓驗之松） 其子孫於今一目眇 或云 久米山之主弁天者 春日姬大神也 神書抄曰 倉稻魂者 宇賀神也 伊勢外宮同體之神也

# 觀 察 表

# 奥ノ坊古墳群

## 土器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量 (cm)			外 面	内 面	色 調 (上=外面、下=内面)	胎土	焼成
				口径	底径	器高					
1	須恵器 蓋	23	3号墳	8.2		(1.8)	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/4 浅黄 2.5Y7/4 淡黄	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
2	土師質土器 人形	23	SK6			(4.8)	型成形		10YR7/2 にぶい黄橙	密 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
3	肥前系磁器 碗	23	SK6	10.4	4.0	(5.2)	網目文・圈線3条	圈線5条・寛永通寶4枚付着	5G7/1 明緑灰 5G7/1 明緑灰	精良	良好
4	土師質土器 蓋	23	SK3	32.5	24.6	4.0	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 5YR5/4 にぶい赤褐	やや粗 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
5	土師質土器 蓋	23	SP22	17.0		(3.5)	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 橙 7.5YR6/4 橙	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
6	土師質土器 火鉢	23	SP7	25.6		(21.3)	板ナデ	板ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙 2.5Y6/3 にぶい黄	やや密 2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
7	弥生土器 製塙土器	25	表土		3.5	(1.5)	指頭圧・ナデ	指頭圧・ナデ	5YR6/4 にぶい橙 5YR6/4 にぶい橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
8	弥生土器 底部	25	表土		5.8	(5.0)	ナデ	指頭圧	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良
9	須恵器 底部	25	表土		14.1	(5.0)	回転ナデ 溶着痕付着	回転ナデ	N6/0 灰 N7/0 白灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
10	土師質土器 焰烙	25	表土	42.8		(1.9)	指頭圧	ナデ	10YR5/1 褐灰 10YR7/2 にぶい黄橙	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
11	土師質土器 焰烙	25	表土	42.0		(2.9)	指頭圧	ナデ	10YR6/2 灰黄褐 2.5Y6/2 灰黄	密 1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
12	瓦質土器 焰烙	25	表土	46.5		(4.0)	ナデ	ナデ	2.5Y4/1 黄灰 2.5Y4/1 黄灰	やや密 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
13	瓦質土器 焰烙	25	表土	28.2		(3.2)	ナデ	ナデ	5Y5/1 灰 2.5Y6/1 黄灰	やや密 2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
14	瓦質土器 焰烙	25	表土	36.0		(3.2)	ナデ	ナデ	2.5Y6/1 黄灰 2.5Y6/1 黄灰	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
15	瓦質土器 焰烙	25	表土	51.0		(3.0)	ナデ	ナデ	2.5Y3/1 黑褐 2.5Y3/1 黑褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
16	瓦質土器 焰烙	25	表土	46.2		(4.0)	ナデ	ナデ	10YR5/2 灰黄褐 10YR5/2 灰黄褐	密 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
17	瓦質土器 焰烙	25	表土	47.6		(4.3)	ナデ	ナデ	2.5Y5/1 黄灰 2.5Y5/1 黄灰	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
18	瓦質土器 焰烙	25	表土	47.0		(4.0)	ナデ	ナデ	2.5Y3/1 黑褐 2.5Y3/1 黑褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好
19	土師質土器 焰烙	25	表土	55.2		(2.7)	ナデ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐 7.5YR5/3 にぶい褐	やや密 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良
20	土師質土器 焜炉	25	表土	14.5	10.2	11.8	型成形・草花文	粗いヨコハケ	5YR5/4 にぶい赤褐 7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良
21	土師質土器 蓋	25	表土		35.8	(8.9)	ナデ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐 5YR6/4 にぶい橙	やや密 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
22	肥前系磁器 蓋	26	表土	9.4		(1.6)	草花文・圈線1条	斜格子文	7.5Y8/1 灰白 7.5Y8/1 灰白	精良	良好
23	肥前系磁器 碗	26	表土	9.3		(3.3)	圈線1条・コンニャク印判		7.5Y8/1 灰白 7.5Y8/1 灰白	精良	良好
24	肥前系磁器 碗	26	表土	8.7	3.6	4.8	草花文・圈線1条	口紅	5Y8/1 灰白 5Y8/1 灰白	精良	良好
25	肥前系磁器 碗	26	表土	9.8	3.7	5.8	草花文	圈線8条	N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
26	瀬戸美濃系磁器 碗	26	表土	9.2	3.2	4.3	草花文		5Y8/1 灰白 5Y8/1 灰白	精良	良好
27	肥前系磁器 碗	26	表土	10.8	3.8	5.3	草花文・圈線4条	斜格子文・圈線1条	5Y8/2 灰白 5Y8/2 灰白	精良	良好
28	肥前系磁器 碗	26	表土	10.5	4.2	5.7	草花文・圈線2条	圈線2条・「大化年製」	5Y8/1 灰白 5Y8/1 灰白	精良	良好
29	肥前系磁器 皿	26	表土	14.4	8.7	4.3	草花文・圈線3条	型紙摺り	N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
30	肥前系陶器 皿	26	表土		4.1	(2.6)	高台無釉	施釉・鉢絵	5Y7/2 灰白 5Y4/2 灰オリーブ	精良	良好
31	產地不明陶器 蓋	26	表土	18.0	5.0	2.4	回転ナデ	回転ナデ	10R5/4 赤褐 10R5/6 赤	精良	良好
32	京・信楽系陶器 底部	26	表土		8.2	(3.6)	ナデ	ナデ	10YR6/2 黄灰褐 10YR6/4 にぶい赤褐	精良	良好
33	明石焼陶器 鉢	26	表土	31.8	16.0	12.6	ヨコヘラケズリ後ナデ	ナデ	2.5YR5/3 にぶい赤褐 2.5YR5/3 にぶい赤褐	やや密 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
34	明石焼陶器 鉢	26	表土		15.2	(2.6)	粗いハケ	ナデ	2.5YR5/3 にぶい赤褐 2.5YR5/3 にぶい赤褐	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
35	明石焼陶器 擂鉢	26	表土	32.0	13.4	10.9	ナデ	ナデ 擂目 19本1束	2.5YR5/3 にぶい赤褐 2.5YR5/3 にぶい赤褐	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
36	明石焼陶器 擂鉢	26	表土	33.0		(4.6)	ナデ	擂目	5YR3/3 暗赤褐 5YR3/3 暗赤褐	密 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
37	明石焼陶器 擂鉢	26	表土	30.2		(9.3)	ナデ	ナデ 擂目 12本1束	5YR6/4 にぶい橙 5YR6/4 にぶい橙	やや密 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
38	明石焼陶器 擂鉢	26	表土		19.2	(7.6)	ナデ	ナデ 擂目	2.5YR5/4 にぶい赤褐 2.5YR5/2 灰赤	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
39	明石焼陶器 擂鉢	26	表土		14.4	(1.4)	ナデ	ナデ 擂目 11本1束	10R5/2 灰赤 5YR4/1 褐灰	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
40	土師質土器 井戸杵	27	表土	64.0		(8.9)	ナデ	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐 7.5YR5/2 灰褐	やや粗 5mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好

## 石器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量 (cm)			重量 (g)	石材	特 徴	
				長	幅	厚				
S1	硯	27	表土	18.2	7.0	3.5	838.9	凝灰岩	内面に使用痕有。	
S2	ナイフ型石器	27	表土	8.7	4.1	1.5	37.5	サヌカイト	白色風化。	

金属器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量(cm)			特徴
				縦	横	厚さ	
K1	錢	24	表土	2.4	2.2	0.2	寛永通寶
K2	錢	24	表土	2.3	2.3	0.2	寛永通寶
K3	錢	24	表土	2.4	2.4	0.2	宋錢
K4	錢	24	表土	2.5	2.5	0.2	寛永通寶
K5	錢	24	表土	2.4	2.4	0.2	寛永通寶
K6	錢	24	表土	2.5	2.5	0.2	寛永通寶
K7	錢	24	表土	2.3	2.3	0.1	寛永通寶

## 久米池遺跡

土器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量(cm)			外 面	内 面	色調 (上二外面、下二内面)	胎土	焼成
				口径	底径	器高					
1	弥生土器 蓋	46	1Tr			(5.0)	ナデ 櫛原体による指突文	ナデ	10YR4/2 灰黄褐 7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
2	土師器 坏	46	3Tr	13.1		(2.3)	マメツ	マメツ	2.5YR8/2 灰白 2.5YR8/1 灰白	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
3	須恵器 坏	46	SD2			(1.2)	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 N7/0 灰白	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
4	土師器 坏	46	SD2	15.0		(2.0)	ナデ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐 5YR7/4 にぶい橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良
5	土師質土器 蓋	46	6Tr	23.4		(4.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR8/2 灰白 10YR7/2 にぶい黄橙	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良
6	須恵器 蓋	46	6Tr			(6.0)	タタキ	指頭圧	N6/0 灰 N7/0 灰白	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
7	産地不明陶器 皿	46	表採		4.2	(1.2)	高台無釉・糸切り	施釉・砂目	7.5Y7/1 灰白 5Y5/3 灰オリーブ	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
8	龍泉窯系青磁 碗	46	表採			(3.2)		草花文	7.5Y4/2 灰オリーブ 7.5Y4/2 灰オリーブ	精良	良好
9	土師器 蓋	46	表採			(4.8)	タテハケ 煤付着	指頭圧	10YR5/1 褐灰 10YR5/1 褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良
10	土師器 坏	46	表採	10.0		(1.5)	マメツ	マメツ	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/1 灰白	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
11	土師器 坏	46	表採		8.2	(1.1)	マメツ	マメツ	10YR8/2 灰白 10YR8/4 浅黄橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
12	土師器 塊	46	表採		6.0	(1.4)	マメツ	マメツ	5Y8/2 灰白 5Y5/2 灰オリーブ	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
13	土師器 皿	46	表採	7.6		(0.8)	マメツ	マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR6/6 明黄褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
14	瓦器 塊	46	表採			(1.8)	指頭圧	ナデ 暗文	N4/0 灰 N4/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
15	須恵器 蓋	46	表採			(0.7)	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
16	須恵器 蓋	46	表採	11.0		(1.2)	回転ナデ	回転ナデ	5B4/1 暗青灰 5B4/1 暗青灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
17	須恵器 坏	46	表採		8.6	(1.6)	回転ナデ	回転ナデ	5B5/1 青灰 5B5/1 青灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
18	須恵器 高杯	46	表採			(2.4)	マメツ	マメツ	10YR5/6 黄褐 10YR5/6 黄褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良
19	弥生土器 蓋	48	表採	13.0		(2.8)	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 N3/0 暗灰	やや密 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良
20	弥生土器 蓋	48	表採	14.7		(3.2)	マメツ	マメツ	7.5YR6/6 橙 7.5YR7/6 橙	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良
21	弥生土器 蓋	48	表採	16.2		(1.6)	マメツ	マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
22	弥生土器 底部	48	表採		7.7	(3.4)	マメツ	マメツ	10YR4/1 褐灰 10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 4mm以下の石英・長石含む	良
23	弥生土器 底部	48	表採		7.6	(3.2)	指頭圧 焼成後穿孔	指頭圧	7.5YR5/4 褐灰 10YR5/4 にぶい褐	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
24	弥生土器 底部	48	表採		5.1	(2.4)	マメツ	マメツ	2.5Y4/2 暗灰黄 2.5Y5/2 暗灰黄	やや粗 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良
25	弥生土器 高杯	48	表採	21.0		(3.2)	ナデ	ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐 10YR5/4 にぶい黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良
26	土師質土器 鍋	48	表採	16.9		(3.1)	マメツ	マメツ	2.5Y5/3 黄褐 10YR6/4 にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
27	土師質土器 蓋	48	表採			(1.5)	ナデ	ヨコハケ	10YR6/4 にぶい黄橙 2.5Y7/2 灰黄	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
28	土師器 坏	48	表採		8.2	(0.7)	マメツ	マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
29	土師器 坏	48	表採		8.2	(0.9)	回転ナデ	回転ナデ	10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良
30	白磁 皿	48	表採		6.2	(0.7)			2.5GY7/1 明オリーブ灰 2.5GY7/1 明オリーブ灰	精良	良好
31	土師器 坏	48	表採		5.4	(1.0)	マメツ	マメツ	5Y6/4 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
32	須恵器 蓋	48	表採	24.1		(1.4)	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 2.5Y6/2 灰黄	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良
33	須恵器 蓋	48	表採	18.8		(2.3)	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
34	須恵器 蓋	48	表採	12.0		(2.0)	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR5/3 にぶい赤褐 2.5YR5/3 にぶい赤褐	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
35	須恵器 坏	48	表採	11.0		(2.1)	回転ナデ	回転ナデ	N5/0 灰 N6/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
36	須恵器 坏	48	表採		4.6	(1.7)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰白 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
37	土師器 坏	48	表採		14.7	(2.6)	回転ナデ	回転ナデ	10YR4/3 にぶい黄褐 10YR4/2 灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
38	須恵器 坏	48	表採		7.6	(1.1)	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好

39	須恵器 壺	48	表採		6.4	(1.2)	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y5/1 黄灰 2.5Y7/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良
40	須恵器 壺	48	表採		12.3	(1.6)	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰 N6/0 灰	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
41	須恵器 壺	48	表採	12.6		(1.8)	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白 5Y7/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良
42	須恵器 壺	48	表採	15.0		(2.8)	ナデ	ナデ	N4/0 灰 N6/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良
43	須恵器 鉢	48	表採	12.0		(3.9)	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰 N6/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
44	須恵器 壺	48	表採	15.5		(2.0)	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰 N5/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良
45	須恵器 壺	48	表採	14.6		(3.5)	回転ナデ 自然釉付着	回転ナデ 自然釉付着	N2/0 黒 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
46	須恵器 高杯	48	表採			(7.3)	回転ナデ	指頭圧 接合痕	N6/0 灰 N7/0 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
47	備前焼陶器 壺	48	表採	9.9		(5.5)	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR5/1 灰赤 2.5YR5/2 灰赤	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
48	白磁 碗	48	表採			(3.8)			N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
49	龍泉窯系青磁 碗	48	表採		5.5	(1.6)	高台無軸		5Y7/1 灰白 5Y7/1 灰白	精良	良好
50	須恵器 蓋	49	表採	16.0		(1.8)	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰 5Y7/1 灰白	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
51	須恵器 壺	49	表採	21.0		(3.8)	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰 N6/0 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
52	土師器 壺	49	表採	13.2		(2.6)	マメツ	マメツ	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	やや密 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良
53	土師器 壺	49	表採		8.8	(1.3)	マメツ	マメツ	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/6 明黄褐	やや粗 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良
54	土師質土器 鍋	49	表採			(3.5)	指頭圧・粗いタテハケ	粗いヨコハケ	2.5Y8/2 灰白 10YR8/4 浅黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
55	土師質土器 鍋	49	表採	27.4		(5.5)	指頭圧	板ナデ	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良
56	土師質土器 鍋	49	表採	27.0		(3.6)	指頭圧	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	粗 1mm以下の石英・石含む	良
57	土師質土器 脚部	49	表採			(9.4)	指頭ナデ		2.5Y7/3 浅黄	粗 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良
58	土師質土器 脚部	49	表採			(9.7)	指頭ナデ		2.5Y5/2 灰黄	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良
59	土師質土器 脚部	49	表採			(5.9)	指頭ナデ		2.5Y6/2 灰黄	やや粗 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
60	土師質土器 脚部	49	表採			(7.0)	指頭ナデ		10YR5/4 にぶい黄褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
61	土師質土器 把手	49	表採			(5.3)	ナデ	ナデ	5YR3/3 暗赤褐 5YR3/3 暗赤褐	密 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
62	備前焼陶器 壺	49	表採			(6.2)	ナデ	ナデ	10YR6/1 褐灰 N6/0 灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
63	備前焼陶器 壺	49	表採	15.0		(6.2)	ナデ	ナデ	N3/0 暗灰 N3/0 暗灰	密 3mm以下の石英・長石含む	良好
64	備前焼陶器 擂鉢	49	表採			(5.4)	指頭ナデ	指頭圧 擂目	7.5YR5/3 にぶい褐 7.5YR5/3 にぶい褐	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
65	備前焼陶器 擂鉢	49	表採		7.0	(5.3)	板ナデ・指頭圧	擂目	5YR5/2 褐褐 5YR5/3 にぶい赤褐	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好

石器観察表

番号	器種	図版	遺構名	法量 (cm)			重量 (g)	石材	特 徴		
				長	幅	厚					
S1	石庖丁	49	表採	7.0	4.0	1.5	39.6	サヌカイト	両面より調整。		

# 写 真 図 版



写真 1 調査前遠景(北から)



写真 2 調査前状況(北から)



写真 3 2号墳調査前(北から)



写真 4 3号墳調査前状況(東から)



写真 5 測量風景(西から)



写真 6 調査風景(東から)



写真 7 2号墳断面(東から)



写真 8 2号墳周溝完掘状況(北から)



写真9 3号墳表土掘削状況(西から)



写真10 2号墳断面(東から)



写真11 3号墳断面(北から)



写真12 3号墳完掘状況(北から)



写真13 4号墳完掘状況(北から)

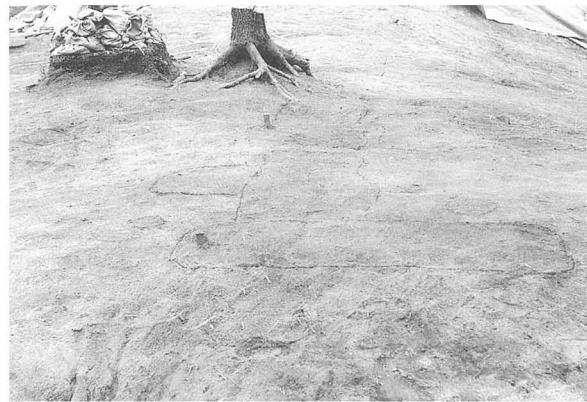


写真14 土壙墓群検出状況(北から)

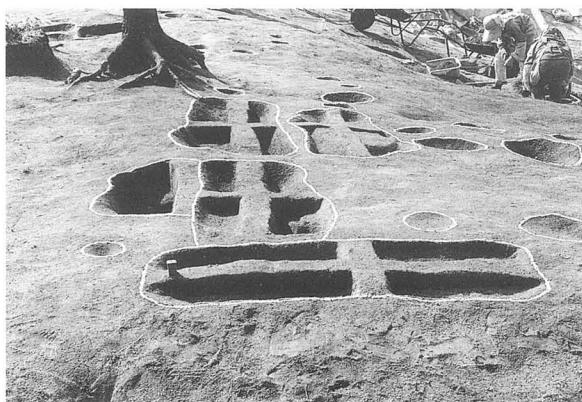


写真15 土壙墓群断面(北から)



写真16 調査地全景(北から)



写真17 土壙墓群完掘状況(北から)



写真18 土壙墓群完掘状況(南から)

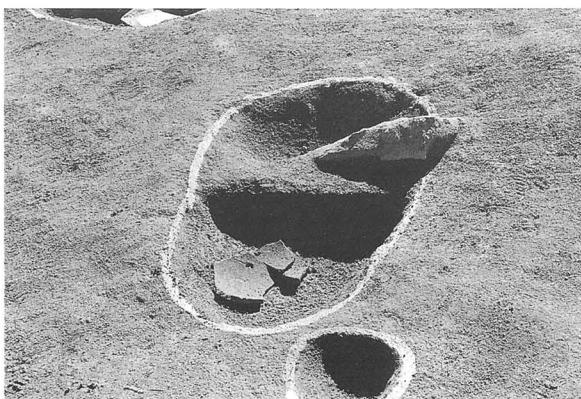


写真19 SK7 遺物出土状況(北から)

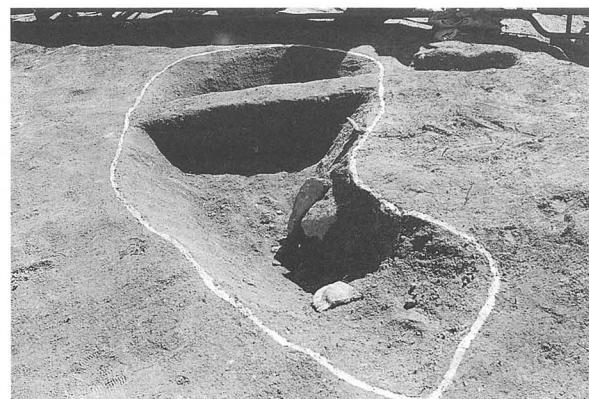


写真20 SK3 遺物出土状況(北から)

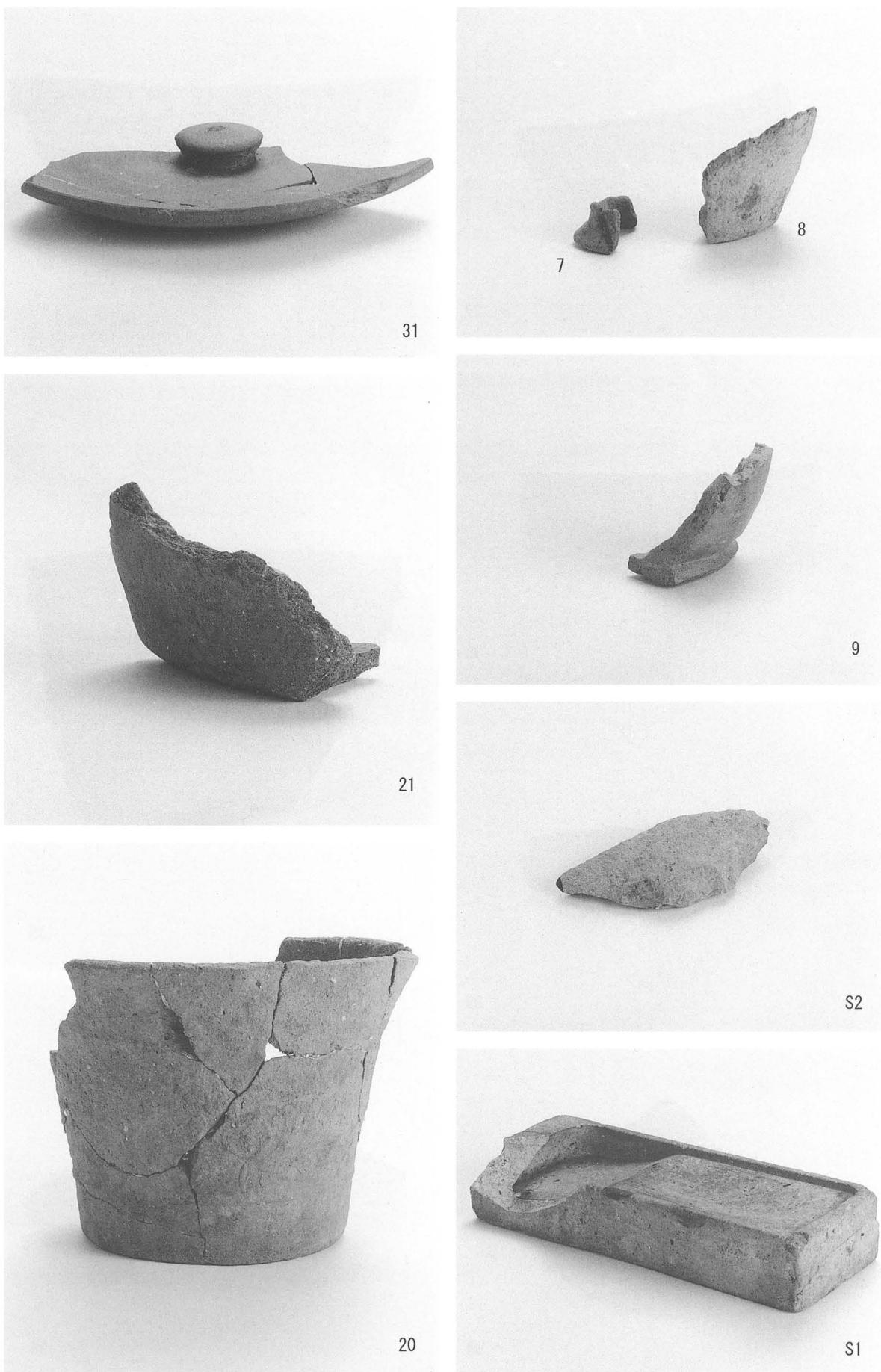


写真21 奥ノ坊古墳群出土遺物①

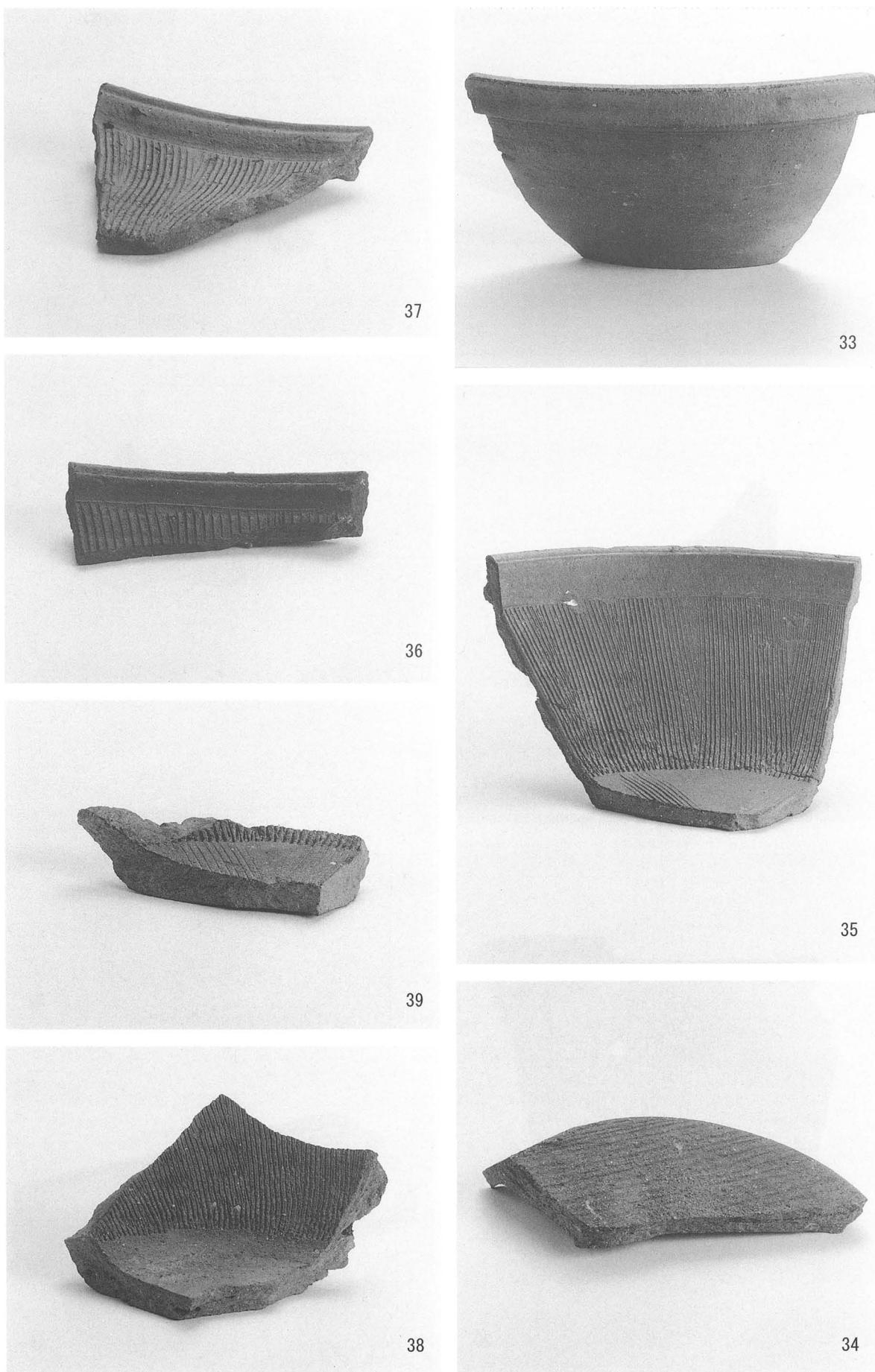


写真22 奥ノ坊古墳群出土遺物②



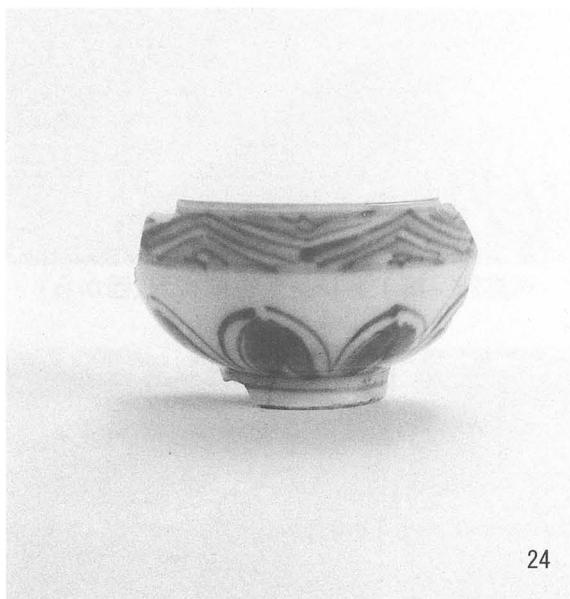
28



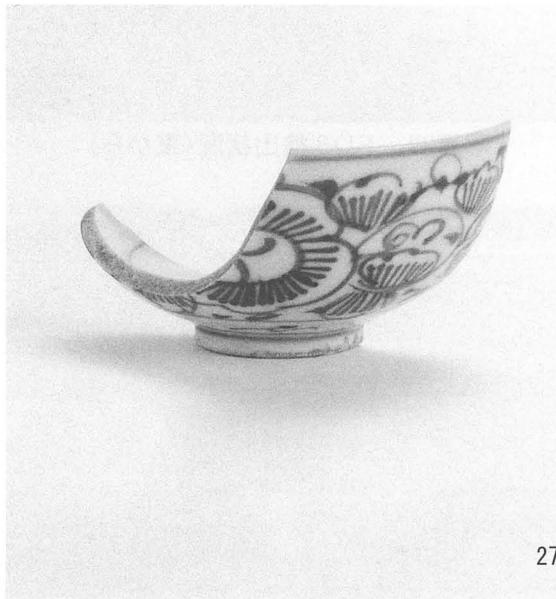
26



25



24



27



29

写真23 奥ノ坊古墳群出土遺物③



写真24 調査地全景(南から)



写真25 第1トレンチ掘削状況(西から)



写真26 第1トレンチ掘削状況(西から)

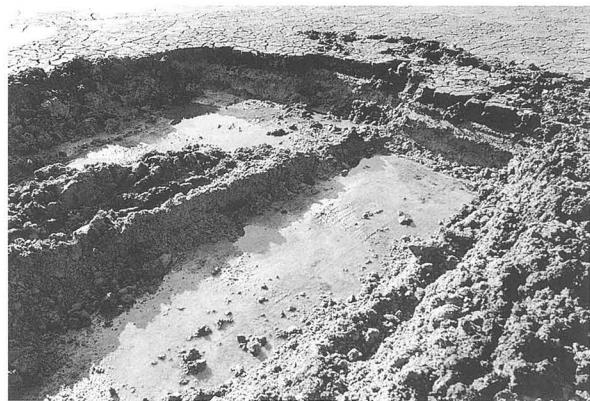


写真27 第1トレンチ掘削状況(北から)



写真28 第6トレンチ土層断面(北から)



写真29 SD3検出状況(東から)



写真30 SP5検出状況(東から)



写真31 SA1検出状況(西から)



写真32 SA1 半裁状況(東から)



写真33 SA1 完掘状況(東から)

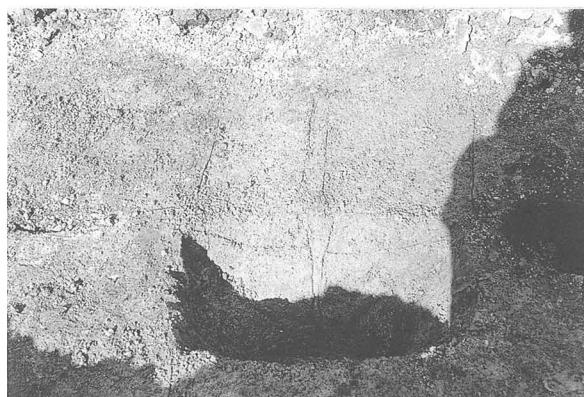


写真34 噴砂検出状況(南から)



写真35 旧河道検出状況(南から)

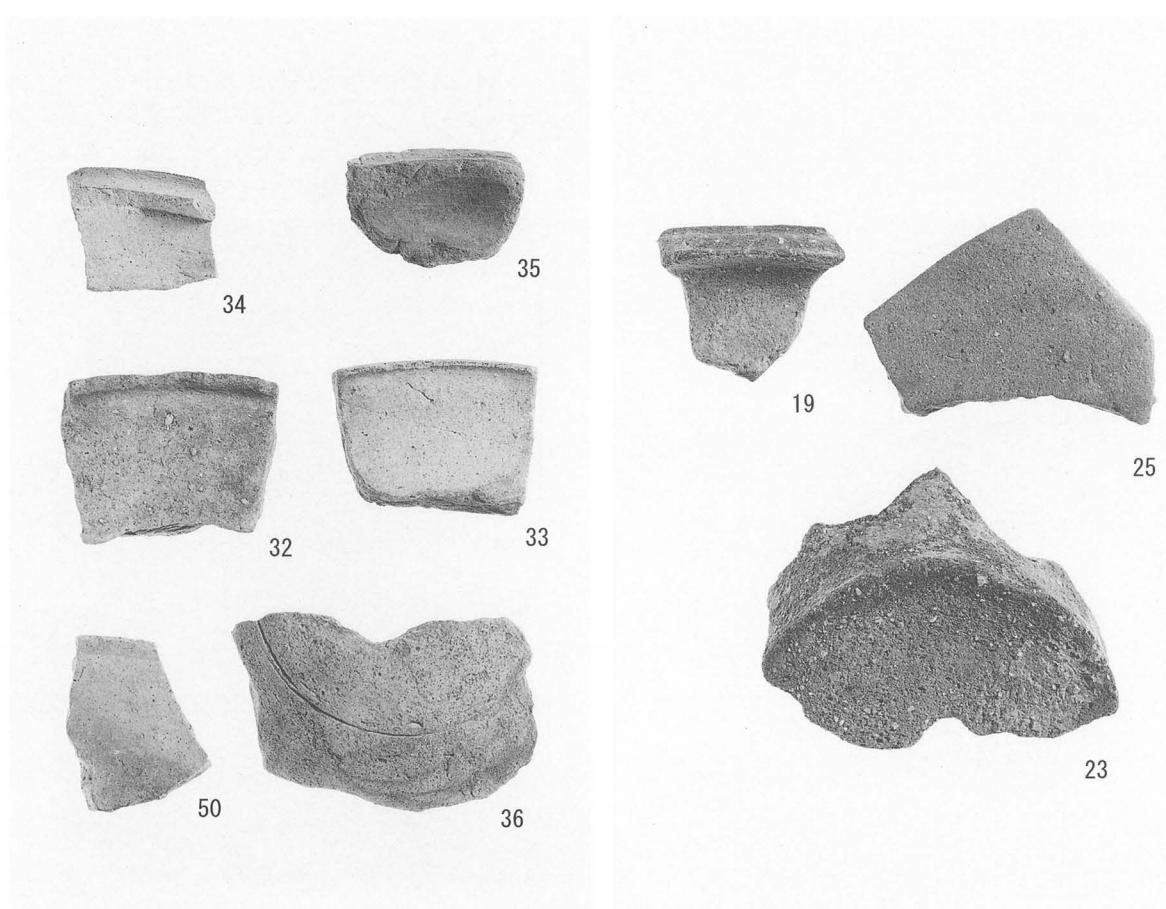
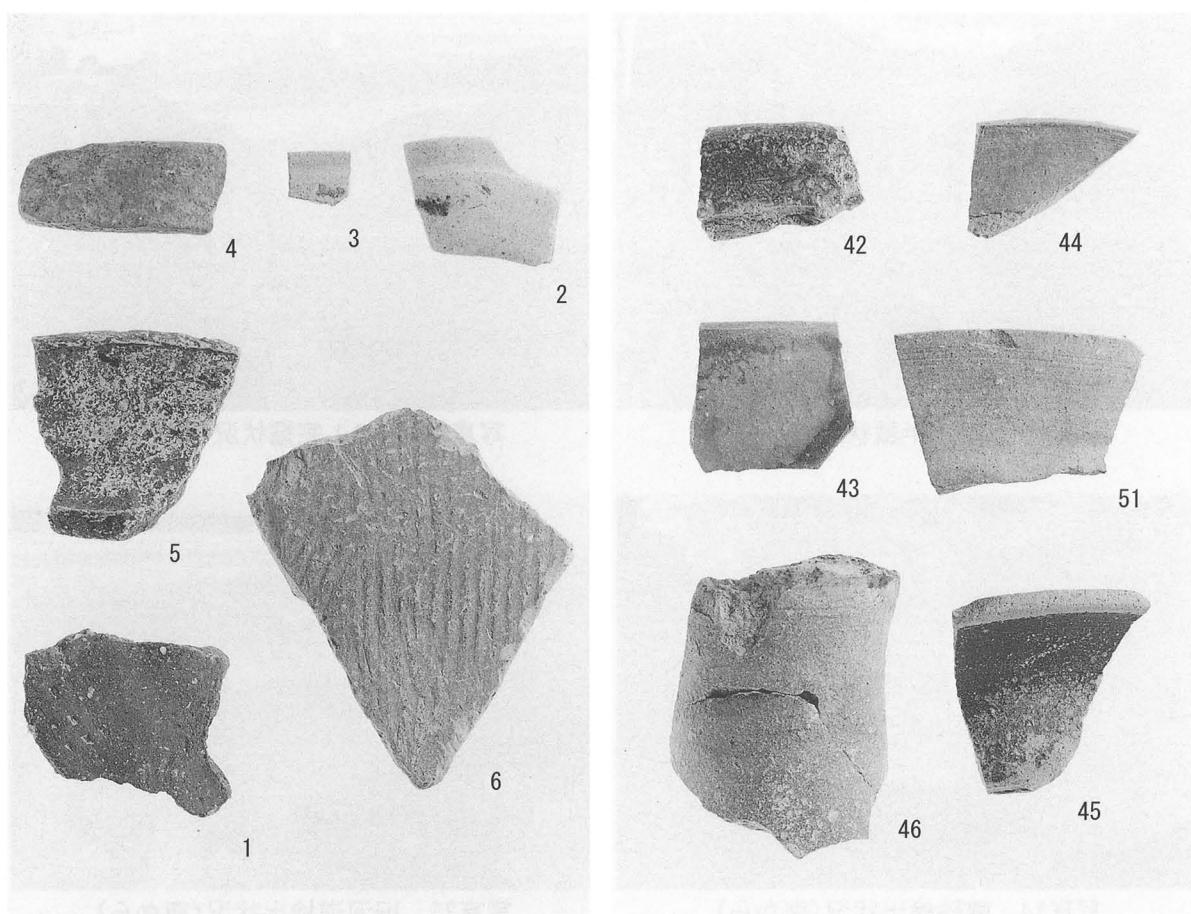


写真36 久米池遺跡出土遺物①

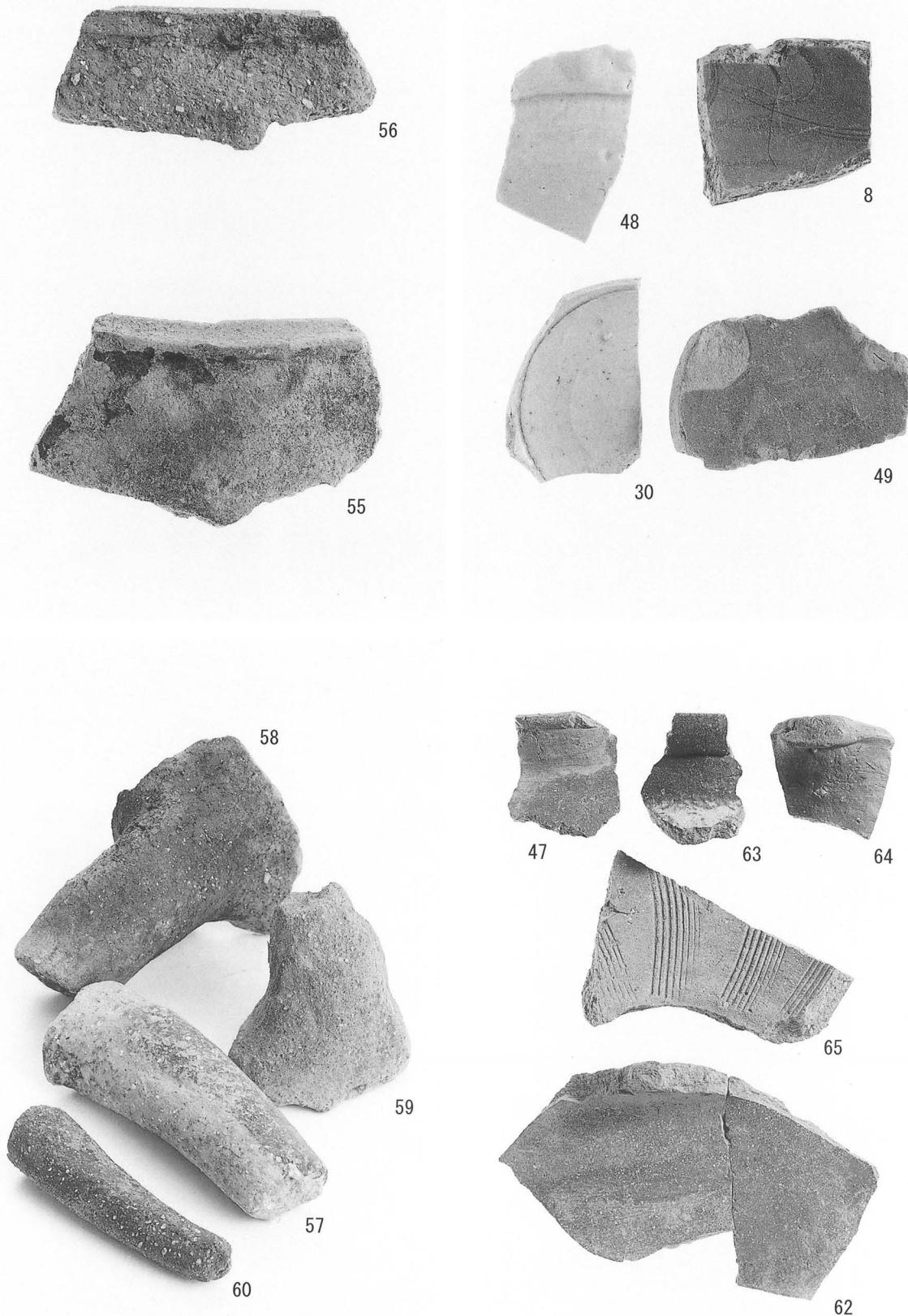


写真37 久米池遺跡出土遺物②



# 報 告 書 抄 錄

高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第4冊

## 奥の坊遺跡群IV (奥ノ坊古墳群・久米池遺跡)

平成18年3月31日

編集 高松市教育委員会  
高松市番町一丁目8番15号  
発行 高松市教育委員会  
印刷 有限会社 河端商会